
化け物学園帝国

逃亡日記

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化け物学園帝国

【Zコード】

Z9389V

【作者名】

逃亡日記

【あらすじ】

化け物ばかりが集まる、学園。人間は恐れていて誰も近寄りひとつしない。

そんなに悪い化け物達じゃない、学園。

それがこの化け物学園帝国！

絆と友情そして時には恋愛溢れるハチャメチャストーリーが始まる！

登場人物1

緋鬼瘤
雨眞魏

15歳で死神とヴァンパイアの血を引く女の子。
二重人格。

普通=明るくて元氣で優しくて心配性でよく笑う。
変化=生意氣で暗くて口が悪くて冷たくて笑わない。
自分は人間だと思っているらしい。

人格が変わると『瞬彗』という女の子になる。

幸杜
梓

15歳で狼と天使の血を引く男の子。

生意氣で優しくて照れ屋でちょっとキツい時もある。
雨眞魏の幼馴染で二重人格モードの雨眞魏の世話をしている。
いつも苦労している。人の記憶を喰う事が出来る。

青柳
黒

15歳の悪魔とヴァンパイアの血を引く男の子。
生意氣で口が悪いけど本当は優しい。
白の双子の兄。白と血は繋がっていないが双子。
雨眞魏を気に入っている。

青柳
白

15歳の天使とヴァンパイアの血を引く男の子。
明るくて元氣で優しくて甘えん坊。
黒の双子の弟。黒と血は繋がっていないが双子。
雨眞魏にいつも甘える。結構嫉妬深い。

紀来
澪

14歳の極普通な人間の女の子。
真面目でしつかり者の優等生。

化け物ばかりの学園の唯一の人間。

両親の都合でこの学園に無理矢理転校させられた。

西院等 さいとう 由梨 ゆり

17歳の狐の血を引く女の子。
表は元気で明るい、裏は弱虫で怖がり。
人間紀来。

嘉応 かおう 劉禰 りゅうね

15歳の狼とヴァンパイアの血を引く女の子。
体は意外と弱く見た目は狼だが、体质はヴァンパイアで日光が嫌いで
しおつちゅう風邪を引く。
人間があんまり好きではない。

鈴月 すずつき 乃亜 のあ

12歳の九尾（狐）の血を引く女の子。
明るくて元気。
火が苦手。

鈴峰 すずみね 凌 りょう

15歳（精神年齢、外見年齢）童人（純血）の血を引く男の子。
明るくてキツイ言い方をしてしまうが、根は優しく思いやりがあり
強い子。

澪が幼い頃に初めて会った人間意外の大型の生物。
人が簡単に入れないような山の中で暮らしている。
運動がよく、身軽。

登場人物2

闇該 やみがい
龍牙 りゅうが

16歳の狸の血を引いた男の子。
不良だけど優しくて強い。

由梨と幼馴染。

黒崎 くろさき
蒼弥 そうや

17歳（精神年齢・叔父さんなみ）ヴァンパイアと人間の血を引く
男の子。

クールで冷静？な極普通の常識人。

素直じやない上に人見知り、微妙にツンデレでたまに毒舌。
困つてる人は見逃がせないらしい。

超がくつ甘党で血を食さない所が苦手。（見るとぶつ倒れる。）
日光が苦手で常に日傘を持ち歩いている。

鬼塚 おにづか
緋那 ひな

18歳の鬼の血を引く女の子。

ドSで明るい。

家事が得意。

身体能力がよく馬鹿力持ち。

黒蝶 あげは
凜 りん

年齢不明で闇族とヴァンパイア（うさぎ族）の血を引く女の子。
冷静でクールで人見知りだが、心を開く一面もあり。
連と血が繋がっていない双子。

頭の回転がよく、頭がいい。

人殺しを昔していて、何万人の人々を殺してきた。

コードネーム、『漆黒の蝶』『血に染まった少女』など言われてい

る。

顔つきに無表情だが、実際に感情を抑えている。

黒蝶 あけは **連** れん

年齢不明で闇族とヴァンパイア（「さき族」）の血を引く男の子。明るくて優しくて頼りになる。

凛の双子となつ存在。

刹那 せつな **吹雪** ふぶき

見た目は10歳で妖怪雪女に血を引く女の子。
無関心。

一般の雪女、雪男は美しい男を狙うが、吹雪は美しい女を狙う。

咲愛 さきあい **シルク**

年齢不明で、**龍の血**を引く女の子
（ドラゴン）

ミステリア

魔法を使う時は、**龍**に変心する。
（ドラゴン）

羽を隠し、目には眼帯を。

過去に酷い目にあわされて人をあんまり信じれなくなっている。
意外にツンデレっぽいところも

シルク・アスタール

11歳で蛇と人間の血を引く女の子。

殺人鬼で男女（子供）問わず、関係なしに殺す。
通りすがつた一般人でも殺す。人殺しの天才。
由梨の元親友。

1話 入学

タツタツ…。

足の音が聞こえてくる。

「…」ここが私が今日から通う学校？…。」

一人の少女がつぶやいた。

「雨眞魏。」

「ん？あつ！梓！おはよう」二コツ

「お前、相変わらずテンション高いな。」

「そんな事ないよ」二コツ

少女の名前は『緋鬼瘤 雨眞魏』

「大丈夫か？」

「うん！バリバリ、大丈夫！」二コツ

「そつか」二コツ

「うん！」二コツ

少年の名前は『幸杜 梓』

「あの…。」

「ん？」

梓と雨眞魏に誰かが声をかけてきた。

「化け物学園はここであつてるかな？…。」

「うん！合つてるよ」二コツ

「良かつた。」

「あつ私、緋鬼瘤雨眞魏。よろしくね」二コツ

「俺は、幸杜梓。よろしく頼む。」

「あつ、私は、嘉応劉禪よろしく…。」

「うん！」二コツ

三人は、学園に入つて行つた。

「誰もいないね。」

階段を上りながら言つ。雨眞魏。

「そうだな。」

梓は辺りを見渡す。

「おかしいよね…。」

「教室合つたよ！一人とも！」
教室が合つたらしい。

【1 B】と書いていた。

「1 Bで合つてるのかな？？」

「入つてみるしかないだろ？？」

「それもそうね…。」

三人は教室に入った。

そしたら一人の女の子が席に座つていた。

「あれ？ 一人だけ？」

「一人だけだろう？ 見渡せば。」

「うん…。」

座つっていた、女の子が席を立ち、三人の目の前に来た。

「初めまして、私は鈴月乃亜すずつきのあなの。」

「私は、緋鬼瘤雨真魏。よろしくね！ 乃亜ちゃん」二コッ

「俺は幸杜梓。よろしく頼む。」

「私は、嘉応劉禪。よろしく…。」

「はい、よろしくなに」二コッ

四人は挨拶をして、席に座つた。

「先生来るのかなあ…？？」

「こないだろ？ この気配だと。」

「そう？ 来ると思うけど…。」

「教室に来ない先生なんて聞いた事無いな。」

「それもそーだな。」

30分後

。

「来ないねえ～」

「ＺＺＺＺ」

「梓、寝てるよね？」

「疲れ果てたんだよ。」二コジ

「????」

ガラツ

「??」

教室に誰かが入ってきた。

「先生ですか??」

劉禰が聞いた。

「はい。」

と答えた。

「皆さん、ご入学おめでとうございます。これから…。
この化け物学園帝国の掟、規則などを説明します。

「遅れてから、そんな事言うか??」

「梓、起きたんだあ～」二コジ

「説明なの?」

「そうです！質問なども受けましょー。」

「つて生徒、私達だけ！？」

劉禰が大声をあげて驚く。

「そのとおりです。」

「えつ…………！」

2話 説明

「「J」の学園は全寮制です。」

「先生が一言そひ言ひ。

「先生、質問ー。」

劉禰が手を上げて言ひ。

「こんなボロボロの学園に寮なんてあるんですか??」「ありますよ。とっても綺麗な寮が。」

「おおーー!」

皆、嬉しい顔。

「「J」の寮は一人一部屋。1階~3階までは男子寮。

4階~6階までが女子寮です。」

「先生!質問したいんですけど…。」

雨眞魏が言ひ。

「はい?」

「女子が男子寮に行つてもいいんですよね??」

「まあ~自由です。それは男子寮、女子寮の寮長に許可を貰つてくれださい。」

「はい!」

「寮は、お風呂も時間制になっています。

9時~10までは女子、11時~12時までは男子、それ以降は自由です。」

先生が軽く説明する。

「先生。」

「はい?」

劉禰が先生に質問する。

「何時以降は寮から出ちゃ駄目なんですか?」

「人間以外は9時以降は出では駄目です。」

「じゃあ、私だけ駄目なんだあ～」

「えつ？ 雨眞魏、人間なの？」

「うん、まあ～ね。劉禰ちゃんたちはいいなあ～」 一二コツ

「じゃあ、先生。」

梓が質問した。

「なんですか？」

「俺達みたいに人間以外の奴とだつたら出でいいのか？」

「はい。まあ～危険がなければ。いいでしょ～。」

「ヤツター！ 梓ありがとう～！」 一二コツ

「なつ～？ 別に～。」

梓は顔を真っ赤にさせた。

恋？…面白そ～。

劉禰はにやける。

「では、自習にします。授業は教科事に先生が変わります。でわ。」

先生はそのまま、教室を出て行つた。

「暇だよな。こんなんだつたら。」

「それもそ～だよねえー。」

「ん～？？」

「雨眞魏は人間なのに、よくこの学園に入れたなの？」

「私もわかんないや。自由に生きてたから」 一二コツ

「そうなの？」

「うん」 一二コツ

ガラツ！

「ん？」

誰かが教室に入ってきた。

「すみません！ 遅れました！？」

「ハア…ハア…遅れた?。」

「あれ?先生は??」

「いないな。」

「大丈夫だよ、今自習だから」 一一口シ
雨眞魏が優しく言つ。

「遅刻?つて言つても…」

「私、紀来澪きらいみおです、よろしくお願ねいします!。」

「俺は、涼峰凌すずみねりょうよろしく。」

「私は、緋鬼瘤雨眞魏。よろしくね」 一一口シ

「幸杜梓こうとくし。よろしく頼む。」

「私は嘉応劉禰。よろしく。」

「私は鈴月乃亜な。よろしくな」 一一口シ

皆自己紹介をする。

「ねえー皆で寮の確認でも行かない?。」 一一口シ

雨眞魏が提案する。

「いいな。それ!」

「いいと思つ。雨眞魏が提案したから。」

「私も賛成なの!」

「私も行きます!」

「澪が行くなら…俺も。」

「よし!じゃあ行こう!」 一一口シ

いつして…始まった、戦と友情と絆と恋の物語ストーリー。

3話 双子

「一人一部屋って、広すぎるよ! なあ〜。」
雨眞魏は、とても寂しそうな顔をする。

朝

「梓! おはよ!」「ひっ

「おう、雨眞魏。」

「おはよ!」「雨眞魏」「ひっ

「おはよ!」「皆」「ひっ

皆朝からテンションが高い。

「雨眞魏、昨日は眠れた?」

「うん、劉禰ちゃんは?」

「私もバツチリかな?」「ひっ

「お前ら仲いいな。」

「うん!」「ひっ

劉禰と雨眞魏はとても仲がいいらしい。

「雨眞魏!」

「えつ! ?」

「! ?」

雨眞魏に誰かが抱きついてきた。

「何? 雨眞魏! 大丈夫??」

「白、何してんだよ!」

後ろから一人の少年の声がした。

「白?。」

「雨眞魏、久しづり!!!!」「ひっ

「白、いいから雨眞魏に抱きつくな。」

「アイアイサーー！」

「誰？」

「白ー黒ー！」

「おお！梓！」

梓と雨眞魏の知り合いらしい。

「何！？梓の恋の敵、現れちゃった？？？」

劉禰は一人暴走中

「僕は青柳白あおやぎしらー！よろしくねー！」二口シ

「俺は青柳黒あおやぎくろ。」

「双子なの？」

乃亜が白と黒に聞く。

「まあー…血は繋がつていないけど、双子。」

「ふーん… そうなの。」

乃亜はうなずく。

「私は、嘉応劉禰。よろしく」二口シ

「梓、お前ちゃんと雨眞魏守れてるんだろうな？」

「うつせ、俺はお前らみた的に、大雑把じゃねえーよ。」

「なんだと！俺のどこが大雑把だ！」

「全てだろうが！」

「何この展開！？」

梓と黒は口喧嘩、劉禰は一人暴走中？

「ねえ。」

「ん？」

「なんだ？」

劉禰が梓と黒に話しかけた。

「黒と梓は付き合つてるの？」

「なつー！」

「はあー！？」

「「そんな訳ねえーだろー…………」」

二人は全否定した。

「何でそなるんだよ…」

「何で俺がこんな奴と…。」

二人は顔を見合せた。

「だつて、二人ともホモじやないの…?」

「ホモつて何?」

「知らない方がいい。」

「??」

凌と凌は一人で話していた。

「白は相変わらず、元気だね」 二コッ

「雨眞魏の顔を見たから、すっごく元気になつた!」 二コッ

「ありがとう」 二コッ

「えへへへ」 二コッ

「もう…………黒と梓喧嘩しない…………！」

劉禰の声が学園中に広がった。

4話 一重人格

「雨眞魏、今日は顔色悪いよ。」
白が雨眞魏の顔を覗き込んで言つ。

「そんな事ないよ。私はいつも元気だし！大丈夫！」
雨眞魏は明るく接する。

「そう？ならいいよ」
「うん！」
「コッ

「相変わらず、白は雨眞魏に甘えるなあ～」
「黒！僕だけが！雨眞魏に甘えていいの！」
「はあ！意味分からん！」
「はいはい。喧嘩しない。」

「雨眞魏も大変だね」
「劉禰ちゃん…そんな事ないよ」
「えつ？」

「毎日樂しいよ」
「そつか。」

劉禰と雨眞魏は顔を見合させて微笑んだ。

「雨眞魏と劉禰は何笑ってるの？」

「あつ乃亜。」

「乃亜ちやんだ」
「コッ

階段を下りてくる乃亜。

「私も混せてなの」
「うん」
「コッ

「皆さん、どうもです。」

「澪ちゃん！」
「コッ

「つてあれ？梓と凌は？？」

劉禰が辺りを見渡す。

「あれ？何所行つたんだろう？？」

澪は辺りを見渡す。

「梓も何所行つたんだろう？？白と黒は知らない？」

「知らなーい！」

二人ははもつて言つた。さすが双子。

「！？？」

「雨眞魏？どうかしたの？」

雨眞魏の様子が変だつた。

「雨眞魏！どうしたの？」

「雨眞魏！どうしたの！？」

乃亜と劉禰が雨眞魏のそばに駆け寄る。

「チツ…。」

「えつ？？」

「雨眞魏？？」

乃亜と劉禰が啞然する。

「何で俺が…。」

バンッ！

「偉い、大歓迎されてないなあー…。」

「雨眞魏？？」

「本当に俺が嫌いなんだな…白。」

「白！やめろ！」

「僕、あいつ嫌い。殺していいよね？」

白は銃を構える。

「俺も準備運動にはなるだろ？？」「

「そんな事聞いてない！」

白が銃を撃とうとする。

「雨眞魏とは違ひ…。」

「誰なの？？」

乃亜と劉禰は焦る。

「はあー……お前ら何してんの?」

「梓? 何でお前がここに居る?」

「瞬彗!。」

「ん?」

「あんまり、こんな所で騒ぎを起すな。」

「はいはい。」

「白、落ち着け。黒、頼むわ。」

「おう。白。」

白は銃を片付けた。

「……。」

「あつち行くぞ。」

白と黒はどこかに行つた。

「雨眞魏も駄目な人間になつたな。」

「しょうがないんだよ。」

「そりかよ。」

「あなたは? 誰? …。」

劉禰が違う雨眞魏に聞く。

「俺は、雨眞魏のもう一つの人格。名前は、

しづかんすい
まあ一本当の名前ではないが。」

「どうこう? ?」

「お前らが知る必要はない。」

「…。」

「雨眞魏はどうしての? ?」

乃亜が恐る恐る聞く。

「今は眠つてゐる。」

「…。」

「俺は普段あんまり出でこないんだが……雨眞魏が俺を用意めさせた。」

「えつ? 雨眞魏が? ?」

「そうだ。あいつにも何かあるのだろう?」

「…。」

「あなたは……。」「えつ？」

劉禰が聞く。

「瞬彗は人間なの？？？」

「違う。雨眞魏も違う。」

「えつ？……だけど雨眞魏自分で……。」

「あいつは自分自身が人間だと思い込んでいる。何も知らないんだよ。」

「！？……。」

「もう雨眞魏おきたから、俺は行く。じゃあな。」

「あっ！待って！瞬……。」

「うわあ！どうしたの！？劉禰！大声なんか出してー！？」
雨眞魏が元の人格に戻った。

「雨、雨、雨眞魏～戻つてよかつたよお～」「乃亞と劉禰が雨眞魏に抱きつく。

「あわわわわわわ～どうしたの？？？」

雨眞魏がちょっと焦る。

「はあ～…凌～ど～…～…～…」

澪は凌を探し？。

タツタツ…ガラツ

一人の女の子が教室に入ってきた。

「転入生?」

「…。西院等由梨と言います。」

「由梨ちゃんって名前なんだね。可愛い」ニコッ

「人間?…」

「うん! そうだよ」ニコッ

「! ? …」

由梨は雨眞魏に威嚇をする。

「えつ? 何? もしかして由梨ちゃん、人間苦手な人なのかな??」

「えつ? …。」

澪と雨眞魏は焦る。

「…。」

走つて教室を出て行く。

「はあ! …人間苦手な人いるんだなあ! …。」

「雨眞魏も気にしない。澪も。」

「うん。ありがとう」ニコッ

「! ? …。」

雨眞魏の様子が変だつた。

「まさか…瞬彗? …。」

「俺は、雑魚な生き物、人間嫌いなんだよバー力!」

「空氣読めてないの…。」

乃亜がしょぼんと言つ。

「梓! 瞬彗を止めてよ!」

劉禰が梓に狼の電波で伝える。

「俺はあんな雑魚にんげ…」

梓が瞬彗の口を塞いだ。

「お前は黙つてろ！つていいから戻れ。」

「チツ、いつか殺してやる！」

瞬彗の人格が引いて雨眞魏に戻る。

「ハア…ハア…ハア…。」

由梨は走りすぎて息が荒い。

どうせつたら仲良くなれるんだろう…。

「…。」「

タツ！

由梨は教室のドアをこいつそり開けて中をのぞく。

「由梨、何をこいつそりしているの？中に入ってきたらいいじゃない
？？」

「おわあ…！…う…。」「

由梨は焦る。

「謝るなら、ちゃんととね。雨眞魏はちゃんと許してくれるよ。」

劉禰が由梨の耳元で囁いた。

「あのつ…。」

由梨が雨眞魏の目の前に行く。

「あつ由梨ちやん…どうしたの？」一匹

「さつきは威嚇とかしてすみませんでした……。」

由梨が素直に雨眞魏に謝る。

「つづん。私こそ、『めんなさい。』

雨眞魏もなぜか謝る。

「ねえ、雨眞魏は直簡単に許してくれるっしょ？」

「うん。」

「雨眞魏！――！」

「うわあ！白！」「

白が雨眞魏に抱きつく。

「白つて本当に、雨眞魏が好きなんだね。」

「雨眞魏大好きだよ！」ニコッ

人間に好意を抱く？…何考えているんだ？…馬鹿馬鹿しい…。

「由梨、何考てるの？もしかして人間の事？」

「別に…。」

「何で、由梨は人間が嫌いなの？私、それが疑問に思つたわ。」

劉禰が由梨に聞く。

「誰が、あなたに言いますか。フンッ」

由梨は窓から飛び降りた。

チャリンッ…それと同時に鈴の音が鳴り響いた。

「何！その態度！ちょっと待ちなさい由梨！」

劉禰が狼の姿になつて、由梨を追いかけた。

「劉禰ちゃん！由梨ちゃん！喧嘩は駄目だよ――！」

「劉禰！由梨！喧嘩駄目ですの！」

乃亜と雨眞魏が注意する。

リンッ…リンッ…。

鈴の音と一緒に由梨が狐の姿になつて逃げる。
由梨が鎌を構えて火玉を2・3発投げる。

「何で、攻撃してくるの？」

「追いかけてくるから。」

「あつそ！」

「うわあ…何あれ？」

澪と凌が廊下を歩いていると由梨と劉禪が元の姿に戻つて戦つているのが見えた。

澪が窓を開ける。

「さすが、九尾と狼つて感じだな。」

「ん？ 濱と凌見てたの？」

「ごめんなさい。気になつてしまつて」ニコラ

「俺も。」

「そう？別に見るのは全然構わないけど。」

由梨はいつの間にか消えていた。

「……。」「

「戦か？俺にも戦わせろ！」

「お前は引っ込め！何で今日はいっぱい出て来るんだよー。」

「俺は……いや、今日ははもういい。じゃあな。」

「なんだつたんだ……あれは？……。」「

一
はあ
。」

「由梨ちゃん、どうかしたの？」

- 1 -

由梨が無言で教室を出た

「私はなんでも叶は二カギ」田嶋わがんが心の聲をひいていたから。

「ハツモの事」

「元の？」

「この間由梨を追つてたら、戦いになっちゃった」「うう

「知ってるよ、あんまり喧嘩とかしたや駄目だよ。」

雨眞麿は鎧襍の頭を撫てる

ガラツ

「うわあ！狼！」

梓が驚きすぎて足をつった。

「梓、そんなに驚く事なのかな??」

「つて、驚きすぎて足つってるよ様。

「その声……劉禰かあ……痛！つるのつて痛い！」

「当たり前だよ。」

一 梱がへたれてるな、白

一
「ハ」
二
三

白と黒が梓の足を二二く

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତପ୍ରକାଶନ ପରିଷଦ

桂大痛さのあまい口

一五五

本当に平和な…日常だな…。

「憎しみで我を忘れ…。」ボソッ

「雨眞魏、今何か言つた?」

「あつひつさ。何でもないよ」二口ツ

「そう?」

「あれ? 梓が白と黒にいじめられてるの。」

「足つたんだって。」

「そうなの? ジヤあ私もイジメるのー。」二口ツ

「やめろおおおおお。」

梓は絶望状態だった。

ガラツ

一人の少年と少年の後ろに隠れる少女が教室に入ってきた。

「…。」

「凛、そんなに黙つてると誰とも喋れないよ

「転人生?」

「この頃、転人生多いよね。」

「それ思つた。」

澪と凌が一人で話していた。

「えつと…黒蝶連よろしくー。」二口ツ

「…。」

ガラツ

「えつ? ??」

連と凛の後ろから少年が入ってきた。

「何か、今日で随分転人生増えたよね。」

「転人生じゃなくて、本当は登校が今日だつたりしてなの」二口ツ

「そうなのかな??」

劉禰が結構考える。

「初めてまして、私は緋鬼瘤雨眞魏。よろしくね」二口ツ

雨眞魏は優しく微笑みかける。

「私は、嘉応劉禰。よろしく。

「私は乃亜。よろしくなの！」二コツ

「この学園はヴァンパイアが多いのか？…。」ボソツ
「だな！」

「つるわー…。」ボソツ

「凛、気分でも悪いの？」

「…。

「ごめん。人見知りで。」

連が劉禰に軽く謝る。

「梓！ つったの治つた？？」

「治つた！ 白！ 黒！ お前ら許さん！」

梓は黒と白を追いかけた。

「あれば？」

連が梓と黒と白を見る。

「あれば、気にしなくてもいいよ」二コツ

「そつか。」ニコツ

「？？」

「…。

「…。

「で、あなたの名前は？」

雨眞魏が蒼弥に話かける。

「えつ？ …俺は、黒崎蒼弥。くろさきそうや」

「うん。よろしくね！ もつ覚えた」二コツ

「…。

チャリンッ … 鈴の音がした。

「うわあ！？」

連が驚く。

由梨が連の隣にいた。

「…。」

凛がなぜか由梨の方を見る。

「由梨、この間は「めんね…ちょっとムキになっちゃって…。」

劉禰が由梨に謝る。

「二人喧嘩したの？？」

「連、口をはさむな。」

「あつ…うん…。」

「別に…気にしてない…。」

「そつか！」

劉禰は安心する。

「雨眞魏！」

「うわあ！？白！何？？」

「梓が追いかけてくるよ。」

「えつ？」

白が雨眞魏に抱きつく。

「蒼弥、どうかしたの？」

「いや…。」

「？？」

「梓！いい加減にしてあげてよ！黒が可哀想だから！」

「はあ…本当にってうわあ！何か人数増えてるし…」

梓は驚く。

パリンッ！

窓ガラスが割れる。

「敵…。」

由梨が反応する。

「少し離れてるけど…確かに居る…。」

窓から飛ぼうとしている。

「由梨待って…！」

「俺が行つてやうつか？」

「戦いか？…なら俺が殺してきてやうか。」

「げげえ！瞬彗！？」

「……。」

7話 敵か？味方か？

「じゃあ、俺行つて来る。」
蒼弥が教室から出ようとする。

「私も行く。」

由梨は蒼弥についている。つとある。

「駄目！全員ここで待機！」

劉禰が皆に言つ。

「俺は行く！お前、邪魔をするな！」

「瞬彗はまつるさい！」

「チツ…。」

瞬彗は軽い舌打ちをする。

「…。」

由梨が窓から外に出る。

「いじめんねー」「コツ

由梨に続いて緋那も窓から外に出る。

「おい！ちょっと待て！！白！黒！外に行け！」

「アイアイサーー！」

「了解！」

黒と白が窓から外に出る。

タツタツタツ！ショーンツ！タツ！

攻撃してくる相手に由梨は軽くよけ着地する。

「これは酷いわねー」

森に隠れて観察している緋那。

「殺す…。」

敵が由梨に近づき襲い掛かつて来る。

「遅い…。」

由梨が敵の後ろに回り、回し蹴りをする。

「蒼弥！由梨達の所に行くよ！」

۱۰۷

笠禰と蒼弥が由梨達の所に行つた

「どうして、お前は行かない？」

「」

「舜詩？」

「俺は、ちよつと寝る。」

一

人之

西嶺はぐるりを眺めていた

何？この状況！

あれが、ここに侵入つて所だよおー

〔二〕

敵が劉爾

「因勢一難、縱二難」的形勢。

バンッバンッ！

白は銃を出して、火玉を撃つ。

「どうも、業二庄サニサば」

「それもそうだな。」

「その代わり、ご褒美だよ」——コツ

はるかお前な
しいや
俺はくじて
るれ

「黒の分まで僕が働くよ！」

黒はゆつぐつとのんびり、ジュースを飲んでいた。

「乃亜、澪、凌ちょっとと西真魏を見ててくれるか？」

「うん、いいよなの」——口芝

「うん！」

「了解。」

「頼んだ！」

梓は由梨達の所に行く。

「…。」

敵が由梨の腹を斬る。

「！？…。」

だが、由梨には効いてないらしい。

「？？…あれ？女人が歩いてるうへ
白が後ろを向いて言ひつ。

「白！前！」

「…ん？」

「お前、よそ見すんなよ。」

黒が火玉を剣で真つ二つにした。

「ここ…どこ？…。」

「そうだ、由梨！大丈夫！？」

「平氣…。」

「！？…緋那…足。」

蒼弥が緋那の足元を見る。

「あつー…」めん、踏んづけちゃった」——口芝

緋那は思いつきり敵を踏みつける。

「お前、鬼だな。」

「私は鬼だもん。」

「…。」

劉禰が敵を押さえつける。

「「」ひちひち。」

敵が木の上に居た。

「それは幻覚。」

「なつ！幻覚にやられたの！？」

劉禰が落ち込む。

「あらら、引っかかっちゃった。それじゃあ選択肢は殺すでしょう

？」二口ツ

「……。」

笑顔で凄い事を言つ緋那。

「……？何をやつているんだひつ？..」

「僕と遊ぼうよ！」二口ツ

白は少女に話かける。

「幻覚合格…度胸合格…攻撃不合格！」

敵の腹を思いつきり蹴る由梨。

「ガツ！…。」

「俺も暇だなあー…。」

「同感だ。俺も休むか。」

蒼弥は紅茶を飲む。

蒼弥の隣でジユースを飲む黒。

「あんた、名前は？」

白が少女に名前を聞く。

「刹那吹雪。」

「僕は青柳白。」

「よ、よろしく…。」

吹雪とちゅうとだけ仲良くなつた白。

あれからちゅうと、戦いは続いた。
だが、由梨と敵以外は皆のんびりしていたそうです。

8話【番外編】モテモテ魔法！？（前書き）

はい！番外編です！ちょっと早いかなとも思いましたが、いいでしょ♪♪♪

今回は【梓】をメインにした物語です！
お楽しみくださいね^ ^

8話【番外編】モテモテ魔法！？

「ふあー…。」

「梓、おはよー！」

「おはよー、梓。」

「梓、おはようなの！」

「おはよー！ぎこちます。兄様！」

「おはよー。」

「で、何してんだよ。監督で？」

「あーこれだよ。」

「何だこれ？」

白が梓に見せる。

「これはモテモテ魔法が掛かる香水なんだよーーー！」

「何？つてうさんくわー！」

「そんな事言わないでさあーーー！」

白がつまずいて、梓、 方面い香水のビンが割れた。

「あー！」

「げげー！」

男子全員唖然。

「何か甘い匂いだな。」

梓に香水がのんのりかかってしまった。

「梓！」

「うわあー！」

雨眞魏が大きな声で雨眞魏の田の前にたつた。

「私は…梓の事好きだよー！もちろん恋愛対象としてー。」

「はーーー？」

「なつ雨眞魏！何ー。」

「あー…魔法が効いてるなあー。」

白は絶望していた。

「まさか、あの香水本物かよ！」

「雨眞魏！私の方が梓を愛しているわよ！」

「はあ？！劉禰まで何言つてんだよ！？」

「劉禰と雨眞魏より私の方が梓の事を大好きですのー。」

「乃亜まで！？」

「私も…梓の事好きだし。」

「はあ？！」

順々に、梓に告白する女子連中。

「この魔法！いつになつたら切れる！？」

「知らないいー」

「はあ！？白テメエ！」

「フンッ」

白はすねていた。

「…好き…。」

「うつさいわ！ババア × ガギツ！」

「…「…「誰がババア！ガキッだ！」」「…」

「何の喧嘩だよ。つて何瞬替までも効いてる！？」

女子、皆が梓に抱きつく。

「助けるおおおおおおおおおおー！！！！！」

梓が助けを求めるが、誰も助けようとしない。

それから数分後、梓は女子から逃げ続けたらしい。
魔法の効果もきれ、みんな元に戻ったそ�だ。

8話【番外編】モテモテ魔法！？（後書き）

次回は本編に戻ります！

9話 楽しごと（前書き）

由と蒼弥がメインです！――――――

9話 楽しい事

「つまらないなあ……。」

椅子に座つて、窓から空を見上げる白。

「つまらないんだつたら、何かして遊べばいいだろ?」

「じゃあ、蒼弥が僕と遊んでよー。」

「何をして?…。」

「何でもいいよー。」

「それが一番困るんだが…。」

「じゃあ、殺さない程度で戦つたりじりだ?」

黒が横から、蒼弥と白の会話を口を挟んできた。

「それいいね!蒼弥!それここでうつー。」

「分かつた。」

「じゃあ始めー。」

「よつしー!行くよー。」

白は銃を出して連発で撃つ。

「…。」

それはかわす、蒼弥。

「ん?何してるんだ?..」

「梓と雨眞魏!」

「喧嘩か?」

「違う。遊んでるんだ」

「ふ~ん…。」

黒と梓と雨眞魏が見学していた。

「雨眞魏が見てるから!僕は負けないよー。」

「俺は勝つ。それだけだろ?」

蒼弥は白は投げ飛ばした。

「とつ…。」「

「もうちょっと強く投げればよかつたか?」

「いいや、結構効いてたよ、だけど僕には勝てないよ。」

銃を連発で撃つ。

一発が蒼弥の腕にかすり血が出る。

「痛ツ!」

「ヒツー!」

白の銃弾は特殊な弾でかすつただけでも血が出る弾。

「行くよ!」

蒼弥に近づく白。

「甘い。」

白の腹を思いつきり蹴る蒼弥。

「ガハツ!」

壁まで吹き飛ばされた。

「痛ツ…。」「

「俺も今、結構ヤバかったな。」

「そつには見えなかつたけど…楽しいよ。」

「若いつていいな。」

「何言つてるんだよ!」

白が蒼弥の頭を銃で殴る。

「痛ツ!」

「僕を甘く見ないでね!」

「俺も甘く見るなよ。」

「えつ?」

「バシンツ!」

「!?!?」

蒼弥の杖で白の銃が地面に落とされた。

「チツ!」

白は後ろから銃を出す。

そして連発で撃つ。

「さっきのは焦ったよ」――口ッ

「焦つたようには見えなかつたが……。」

蒼弥と白の顔は笑つていた。

「じゃあもう決着つけよ」――口ッ

「いいだろう。」

蒼弥が白に近づく。

「ニッ」

白が後ろから、何かを出そうとする……。

カキンッ！パシッ！

「ストップだ！やめる！」

黒が一人をなぜか止めた。

「白、それを直せ。」

「はいはい……！？ ゲホッ！」

「白！？」

白が血を吐いた。

「ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！……。」

「白！」

黒がポケットから薬を出した。

「飲め。」

「うう……治まつた……はあ……。」

「大丈夫か？」

「うん。ありがとう」――口ッ

「白！大丈夫？つて一人ともボロボロじゃない！」

白と蒼弥はボロボロだった。

怪我もいっぱいしていた。

「手当にするから、こつちきて。」

「俺はいい。」

パシッ

梓が蒼弥の手をつかむ。

「駄目だ。ほら来い。」

「白、手当てできたね。」

「雨眞魏はいいにおいがするー。」 — ハッ

「白?...。」

「Z Z Z Z」

「Z Z Z Z」

黒と白は眠りてしまった。

「蒼弥…頭を怪我したんだね。大丈夫?」

「うん。」

「あんまり無茶は駄目だよ」 — ハッ

「ふわあー…俺も眠くなつた…寝るわ。お休み。」

梓は木の上で眠つた。

「蒼弥は寝ないの?」

「俺は…いい。」

蒼弥はどこかに行つた。

「??…。」

「あれ?三人寝てる!寝顔可愛いー」 — ハッ

「私も眠くなつてきたの。」

なぜか、皆眠りてしまつたらしく。

10話 田覚め 前編

「皆寝てるの……雨眞魏は寝ないの？」

「うそ。あんまり眠たくないから」――口芝

「どうかしたの？？皆寝て。」

「楽しい事をして、疲れたんだよ」――口芝

「楽しい事つて？？」

「さあ～～。」――口芝

「私も寝よう。」

「私もなの！」

乃亜と劉禰も寝始めた。

「……？」

「あれ？雨眞魏さん、起きてたのですか？」

シルクが後ろから雨眞魏に声をかける。

「うん。ちょっとみんなの事お願い」――口芝

雨眞魏はどこかに行つた。

「ん？あれ？ 皆まだ寝てたの？」

「あつはい～。」

タツ……タツ……。

「……。」

「雨眞魏は？」

「一人でどこかに行きました。」

「ん？雨眞魏は？どこなの？」

「一人でどこか行つたらしいよ。」

「雨眞魏が一人で？珍しい事もありますの。」

「それもそうね。」

「ん？……。」

梓がおきた。

「あつ……梓、雨眞魏が一人で……！？」

「…………。」

「劉禰？」

「えつ？乃亜？……。」

「どうかしたの？」

「あつ……いや……。」

一瞬、梓じゃなかつた、気配が違つた。

「あれ？雨眞魏は？」

「一人でどこかに行つたの。」

「探してくる。」

「はいなのー！」

43

「梓……ごめんね。」

「！？……雨眞魏？……いや、氣のせいかな？」

梓は雨眞魏を探していた。

「雨眞魏……誰かにとりつかれてる……。」

「えつ！？」

「早く……探さないと……危険だよ。」

白が言つ。

「私、探してくる。」

劉禰が狼の姿になる。

「私も行くですのー！」

「俺達も行くぞー。」

「うん。」

皆雨眞魏を探す。

タツ！

「雨眞魏ー！」

梓が雨眞魏を見つけた。

雨眞魏に手を伸ばそうとするが、誰かに弾き飛ばされる。

「！」めんね……。」「

「雨眞魏ー！」

「梓ー！」

「梓ー！雨眞魏ー！」

劉禰と乃亜が梓と合流する。

「誰だ！」

劉禰が威嚇をする。

「雨眞魏ー！」

「梓、元気にしてたかしら？」「——」

「彩歌ー！？」

雨眞魏の後ろから女人の人が出でた。

「誰？」

「彩歌、さつそとやる事やるわよ。みみ

「はいはい、本当にお節介ね。」

「雨眞魏を返してー！」

「それは駄目。この子は殺す。」

瞬彗…起きる。

「！？…」

「な、何？」

「もしかして、瞬彗！？」

「俺をこう言つ状況で呼ぶか？」

「別に、お前強いし。」

「なつ！…まあ、いい。俺は暴れるいいな。」

「ああ…好きにしろ。」

「合点。」

瞬彗は氷の刃を構えた。

「さあ…俺と遊ぼうぜ…」

「なつ！…早ッ！…。」

一瞬にして、瞬彗は彩歌の目の前に来た。

「ヤバイ！刃！』

力キンッ！

「へえ～言靈があ～珍しいな。」

「チツ！」

何？この殺氣…ひつきはこんな殺氣…？…。

「よそ見すんな！」

「！？…」

彩歌の手に刃がかすつた。

「お前狼…剣すら持つていないんでしょう？」

「だからって何！？私はただの狼じゃない！」

風菜が劉禰に剣を振りかざす。

「！？…」

劉禰が風菜の腕に噛み付く。

「なつ！…。」

「これで…終わりだな。」

「…」

瞬彗がとどめを刺そうとする。

「ハア…ハア…。」

「死…！？…。」

瞬彗は大量の血を吐いた。

「瞬彗…！…！…！」

11話 目覚め 後編

「瞬彗…どうしたの…？」

乃亜が叫ぶ。

「瞬彗！」

「よそ見したら、死ぬわよ。」

風菜の剣を横腹にかする。

「劉禰！」

「…う…このくら…ゲホッ…」

「へえ…ヴァンパイアなのに血が拒絶かしら?」

「雨眞魏…逃げちゃ…駄目だよ。」

瞬彗が倒れる。

「瞬彗！」

「これでとどめ…。」

彩歌が剣を刺そうとした…。

その瞬間

「雨眞魏…。その刃は…。」

グサツ！

「！？…。」

「お前…何してるの？…。」

雨眞魏が刃を風菜の背中に掛けて投げた。

「なんて…殺氣…。」

雨眞魏からはとてもなく凄い殺氣を放つている。

「許さない…。」

「雨眞魏…。」

「邪魔をするな…。」

風菜が雨眞魏に剣を振りかざす。

「雨眞魏！危ない！」

「雨眞魏…。」

パシッ

雨眞魏は剣を手で受け止めた。

ポタツ… ポタツ…。

受け止めた手からは血が出てくる。

「お前…誰に手を上げているのか…分かつていいのか？」

「あれは…妖力…ヴァンパイアと死神の妖力じや悪魔だつてはがたたない。」

雨眞魏は剣を粉々にする。

「お前！あからさまにさつきと殺氣が違う！

何者だ！？」

「…。」

剣を投げる。

「瞬彗…。」

「…雨眞魏は、死神とヴァンパイアの血を引く娘だ。」

「瞬彗？」

「雨眞魏は普通の死神とヴァンパイアの血を引く者じゃない。」「普通じやない？どういっ…。」

「母親も父親も人間じやない。むしろ人間との関わりもない。母親は最強と言われた死神。父親は人を殺した証のヴァンパイア族だ。」

「ヴァンパイア族は知つてゐるわ。それなら雨眞魏の妖力も正しいと言える。」

劉禰が納得した。

バキューーンッ！

「いい加減さ、その魔力を止めてくれないかな？」

「白！」

今がチャンス！

劉禰は風菜の足に噛み付いた。

「僕ちよつと、今凄く起こつてるんだよね？殺していい？」

「瞬彗、お前は休め。」

「チツ…借りーだ。」

「フンッ…。」

バターンッ

「雨眞魏！」

「雨眞魏！大丈夫？！」

「…。」

「風菜！お待ちなさい！」

彩歌、風菜は闇の中に消えた。

「…………。」

雨眞魏は眠っていた。

「傷が再生していく……かなり早いペースで……これがヴァンパイア族……。」

「はあ～もう傷治るのに一ヶ月も掛かるのに……！」

劉禰が倒れる。

「劉禰！大丈夫なの？」

「大丈夫だよ」二コツ

「だけど、さつきは人は治らないって言ってなかつたの？」

「あれはすぐ治るって意味。一ヶ月は掛かるけど治るよ」二コツ

「やはり……ですか。」

「えっ？」

「一人の人形を持った少女と少女の隣に居る人型ロボット？がつぶやいた。

「！？……」

「私が探していた罪人がここに居ますね。
緋鬼劉雨眞魏、あなたを処刑します！」

12話 情報×仕切り役

「雨眞魏が処刑！？」

「…。」

「死神とヴァンパイアの血を引く娘。

私はあなたを殺します。邪魔をするものも即排除します。」

「何で、雨眞魏が…殺されなくちゃならないわけ！？…。」

「死神とヴァンパイアの血を引く。それもただの死神とヴァンパイアじゃない。」

後から、何をされるか知つた事じやありません。

今、即排除せよとの命令なのです。罪人だからと言つて、容赦はしません。」

少女は構える。

冷たい空気が流れる。

「私は、騎士団長、霧隠深紅。ある人の命めいで緋鬼瘤ひきゆう雨眞魏…。守りに來ました。」

「えつ？」

「はあ？」

「深紅？」

「兄様、私は雨眞魏さんを守りに來ました。

騎士団の人々が雨眞魏さん田当てでこの学園にやつてきます。精々気をつけてください。」

「それなら、私だつて雨眞魏を守るー。」

「私もなのー！？」

劉禰と乃亜が言つ。

「……深紅ちゃん？…。」

「雨眞魏さん…私はあなたを守ります…。」

「ありがとう…。」一二口ツ

雨眞魏は氣を失つた。

「雨眞魏…。」

「皆さん、これからよろしくお願ひします。」

「うん…よろしく」――コラ

「ねえー皆面白い噂、教えてあげよっか?」――コラ

白が笑いながら言う。

「噂?」

「そう、この頃変な噂があるの知ってる?」

「知らないけど…そんなのあるんだ。」

「聞きたい?」

白が怖い笑顔になる。

「いいからー早く言つてよ…………!」

梓は、雨眞魏をお姫様抱っこして、ロビーにある、ソファーに寝かした。

「で、どんな噂なんだ?俺も結構知つているが。」

「この頃、人間じゃない生き物が、強くなったり、変化したりするらしい。」

「変化?」

「そう、本当の化け物のように、自分自身じゃなくなる変化。」

「強くなるは、どういう事なの?」

「この頃、化け物共が無意味に人間襲つているらしい。」

「それもただの化け物じゃないらしいよ。」

「ただの化け物じゃないって?…どうじゅう?」

「僕にも分からぬ」――コラ

白はソファーに座つてジュースを飲む。

「俺は、知つてゐるぞ。」

「えつ!?」

梓が言つ。

「ただのつて言うか、美しい人間の色……美しい人間らしい、目撃情報によればだ。」

「私、その人知ってるかも…。」

「マジかよ！」

「私、人間の町に行つた事があつたの、それで美しいというより、綺麗な人間がいてね。」

「それも妖力が普通の妖力よりも強くて…恐ろしい人…だった。」「うん！分かつた！後は俺に任せろ！」一コツ

梓がメモ帳にメモを書く。

「なら、私は兄様の護衛をします。」

「そうか？なら！全員聞け！」

「??」

白と黒が横に首を振った。

「自分が強いからつて一人になるのは禁止だ！」

「出歩くなら2~3人だ！分かつたか！？」

「分かつたの！」

「了解。」

皆承知した。

「澪は、人間だから複数で行動した方が良いかもしないけど。」

「そうだな。人間も殺される確実が高い。だから！消して、一人にならな！」

「部屋も一人じゃなくて二人で一部屋だ！」

梓つて意外と…仕切り役が似合つてるね～…。

劉禰は心からそう思った。

「えつと、白と黒は一緒の部屋。雨眞魏と劉禰だ！乃亜と深紅！澪と凌だ！いいか？」

「雨眞魏と一緒にだね。じゃあ部屋を床つてるね。」

「おい！鍵！」

劉禰に鍵を渡す。

「ありがとう」「！」

「白！鍵！」

白に鍵を投げる。

パシッ

「サンキュー！」「！」

「澪、ほり。」「

「ありがとう。」「

澪に鍵を渡す。

「深紅！ほれ！」「

「ありがとうござりますー兄様！」「

深紅に鍵を渡す。

梓は誰と一緒に部屋なんだろ？？？。

「雨眞魏、私が運ぶよ。」「

「そりか？ならいいけど。」「

劉禰が狼の姿になり、雨眞魏を抱える。

「深紅！よろしくなの」「！」

「うわうわ…よろしくお願ひします。」「

「乃亜！ちょっと。」「

「何ですか？」「

「深紅は人見知りだから、優しく接してやつてくれよ」「！」

梓が乃亜の耳元で囁く。

「了解！なの」「！」

「部屋広いねえ～。」

とこの間の歓声の声だった。

13話 かばい

「ベッドふわふわだあ～

「そうだな。」

白がベッドに飛び込む。

黒はベッドに座る。

「……。」

深紅はずっと沈黙。

何を話したらいいのでしょうか?…。

「深紅、黙つてどうしたの?」

「あつ…いえ。」

深紅は人に気を使う人。

『全員、起きてるならもう寝ろー・今日は疲れたと思つからなー・
梓が放送流して皆に伝える。

「黒～寝よう～」

「おひ。」

白と黒は一緒にベッドで眠った。

「じやあ、私達も寝るなの!」

「はー。」

深紅と乃亜も眠りに入る。

「…NZZZ」

「……寝れない…。」

澪はぐつすり寝ているが、凌は寝れない様子。

劉禰はベッドから起きて、ベランダに出る。

パチッ。

雨眞魏が目を覚ます。

「瞬彗…」

「ん、行くぞ。」

「うん…。」

雨眞魏が瞬彗になり、部屋のドアから出て行った。
「涼しいい～」

劉禰が風にあたっていた。

「なんだ？」

『どうしたの？ 瞬彗？』

「俺らの歩いている道…魔力がどんどん濃くなつていて。」

『魔力だけ？…。』

「近くだと、魔力、妖力も濃い。
遠くだと妖力しか、分からん。」

『そつか…先に進んで。』

「おう。」

瞬彗は雨眞魏を会話しながら進んだ。

「妖力？…。」

ベランダにいる劉禰が狼の姿になり、屋根の上にあがる。

「！？…。」

『瞬彗？』

「人間が人間を食つていいやー。」

『えつ！？』

「チツ！今は逃げるぞー！」

瞬彗は逃げようとする。

「誰か居ますね？」

「！？…。」

血だらけの男が瞬彗の田の前に現れた。

「人間が人間を食つってどうこうことだ！お前は何者だ！」

普通の人間か！」

質問が多いですね。」

「あれは！瞬彗！行かないと！」

劉禰が瞬彗の元に行く。

「劉禰！」

「狼とヴァンパイアのハーフ、死神とヴァンパイアのハーフ……そ�ですか。」

「僕は、瞬彗を連れ戻しにきました」二ノ瀬

「なつ！？？」

「行きましょう、瞬彗。」

「瞬彗！」

「白！黒！梓！って全員来たのか！？」

「瞬彗、静かに移動するのが下手なんだよお～」

白達が瞬彗の元に来た。

「あれ？あいつが居ない！」

「チツ…逃げられたか…。」

「だけど、何であいつ、瞬彗達の秘密を…。」

「それは…。」

瞬彗は何かを言いかけるが…。

「いいから、全員学園に戻るぞー！」

「はーい。」

梓が指示したら、皆学園方の戻る。

「！？。」

「劉禰？」

「消えるわけが無い！まだいるー皆構えてー！」

劉禰が指示する。

「白ー危ない！…。」

「えつ？…。」

「グサツ！」

「！？…。」

「白ー！」

「おや、かばいましたか。瞬彗。」

「瞬…。」

白をかばって、瞬彗が刺さつた。

血が大量に流れ出す。

「！？…。」

白の体が震え始める。

「白？…。」

劉禰が白の顔色を伺う。

「瞬…瞬彗！…！…！…！」

14話 目標

「瞬彗！瞬彗！」

白が瞬彗の名前を叫ぶ。

「人間が…刺したのですか？…。」

シルクがは唖然していた。

「そんな事つて…。」

シルクはその場にしゃがみこむ。

「珍しい事もあるんだな…人間が化け物を平然に刺すなんて…。」

「あれは、普通の人間じやない！」

劉禰が凛に言う。

「その人間は？…今何所に？…。」

「逃げたよ…瞬彗を刺して、余裕の無傷で消えた。」

「そう…教えてくれて…ありがとう…。」

由梨は凛と劉禰にお礼を言う。

「姿は…見ていないのか？…。」

「真夜中だつたからね、分からぬ。」

「男か女は分かるだろう？」

「多分、男だつたような？…。」

「人間は…一体何が…目的で…。」

皆いろいろと話していた。

「そんな小ざかしい話はいい！今は瞬彗だ！

「そうとう、重傷だ！」

梓が仕切る。

「嫌だ…あの時と…一緒…これじやあ…これじやあ…。」

「白！大丈夫だ！大丈夫、だから。」

黒が白を抱きしめる。

「黒…僕は…。」

「白…。」

劉禰が白の隣に行く。

「ハア…ハア…ハア…」つう…。

「瞬彗…血が…。」

瞬彗は無理に体を動かした。

血は大量に落ち流れる。

「うう…帰るぞ…。」

「瞬彗、お前傷、重傷だろ?」

梓が瞬彗の心配をする。

「お前に心配される…筋合」など…ない…。」

瞬彗は血をポタポタッと落として、ようよひと歩く。

『木の上』

「不思議な事も起きるのね…。」

木の上で瞬彗達を見ていたシルクがつぶやいた。

「ハア…ハア…。」

皆…俺より兩眞魏の方がいいのだろう…俺より…兩眞魏が…。

「瞬彗…大丈夫だよね?」

瞬彗の歩いた道には血が一粒一粒落ちていた。

由梨はその間に鈴を鳴らして、どこかに行っていた。

「カハツ！」

由梨は血を吐き、倒れる。

「ほらほら、僕に傷一つ付けられてないよ？

君はこの程度の人間なんだあ～」

不気味に笑つた。

ゾクッ！

「！？…」

由梨は冷や汗が出た。

「…。」

「…？…」

由梨は相手に思いつきり腹を蹴られる。

壁までぶつ飛ばれる由梨。

「ガハツ！」

「由梨の血の匂い！」

劉禰が狼の姿になつて、由梨の元に行く。

「君には、失望したよ。もう興味が無くなつた。サヨナラ。」
相手がナイフを由梨に向けて投げる。

「…。」

由梨は静かに目を閉じる。

カキンッ！

「！？…劉禰…」

「お前、由梨に何してるんだよ…」

由梨に手を出すな！」

劉禰が牙でナイフをはじいた。

「由梨！」

「澪と凌！？」

「劉禰！」

澪と凌が由梨の元に来た。
由梨は気を失っていた。

「何」「じよ」「れ？」

「大丈夫か？由梨！」

蒼弥は軽く由梨を揺らす。

「……だ……れ？」

由梨はかすかに蒼弥の顔を見た。

「えつと…会つた事なかつたか？…。」

「あなた、どちら様？」

「君に名乗る必要は無いよ」――「

相手は紺那に笑いかける。

「だけど、この子は貰つてこくみ」――「

由梨をお姫様抱っこする。

「…あら？名前も無いのかしら？」――「

「ちよつ…それは困る…。」

由梨を奪い取る。

「それは、幻覚。じゃあ。」

相手は由梨を連れて、消えた。

「由梨…」

15話 守る人（前書き）

久々更新です！

15話 守る人

「由梨の匂いがまだ、かすかにある。だけど、追うのは無謀すぎる。」

「森にある不思議な屋敷」

「由梨、寝ててね。」

相手は由梨にキスして何かを飲ませる。

由梨は眠りに付いた。

「学園」

「まずは、眞と話さないとね……。」

「それが一番だよ。」

「……何か、凄い事になってるね。」

「この気配をただつたら飛べるのですが……。」

タツタツ……。

「ハア……気配が変わった……チッ……何かやらかしたな。あいつら……。」

瞬彗は胸騒ぎのせいで、学園にのろのろ戻った。

「白、黒何か分からんのか?」「梓が白と黒に聞く。」

「僕は、お手上げだよ。気配が風のせいで消えかかってるからね。」

「俺もだ。」

「瞬彗……。」

梓はそつとつぶやいた。

「迷えば迷つほど……人は……闇に落ちて飲まれて死す……。」ボソッ

タツ

「ちょつ……深紅？」

深紅がどこかに行く。それを追う劉禰。

「あなたは何でここにいるのですか？」

「なんだ……騎士団娘か？……。」

「傷の再生が遅いですね。」

「今がチャンスじゃ無いのか？今の俺ならお前でも倒せるぞ。」

「私はあなたを、処刑しに参りました。」

「俺と雨眞魏、いずれはどちらかが消える。」

「どちらかが消えるって……どうい……。」

「劉禰！？いつから……うう……ゲホッ！」

瞬彗から大量の血が流れる。

「瞬彗……いえ……さやみこ裂闇志木！」

「えつ？……志木って？瞬彗？……。」

「俺はお前たちといずれ、戦う。それだけは覚悟しておくのだ……劉禰。」

「えつ！？瞬彗！？いつか戦うってどうい……。」

「瞬彗と言つ名は……白が付けてくれた名前だ……。」

瞬彗は闇の中に消えた。

。

「志木……」

「白……」

「まだ、傷が……。」

「志木じゃない……瞬彗。」

瞬彗はどこかに行こうとする。

何で……いつも……僕は……。

「志木！」

「なんだ？？」

白が瞬彗を呼び止めた。

「行くなよ……。」

「！？……。」

「何で……志木が行くんだよ！何で何でいつも……。」

「白……強くなつてくれ。」

「志木！……。」

「俺は、もう白の知つているあの時の志木じゃない……
瞬彗は闇に消えた。」

僕は守らないと……志木を僕が……。

「白……」

黒が白の元に来る。

「白……黒……瞬彗見なかつた？」

「……。」

1-6話　闇無限　白編=前編（前書き）

白の過去編です！

16話 閻無限 白編＝前編

僕の家はとても大きなお城のような、家だった。

そのせいで、両親は金にしか興味がなかつた。

僕が黒と会うまでは僕はずつと、一人でただ監禁されていた。

とても寒くて、苦しくて、寂しくて、暗くて、誰も居ない。
声もしない。誰もこない。

僕は何度も逃げ出した。だけど、すぐ、つかまって。
何度も何度も逃げてはつかまって、暴力を振られた。

僕にはいつしか闇が生められていた。
憎しみと恨みで出来た僕の闇。

そして、僕は……

憎しみを爆発させて……。

人々を殺した。

血が見るのが好きだから。

殺すのが好きだから。

楽しい事が好きだから。

だから……僕は……。

大切な人も殺してしまった。

無意識に殺してしまった。

悲しかつた。寂しかつた。

僕をずっと信じてくれた人を…。

僕は…殺してしまった。

そして僕は…双子の兄に会つた。血も繋がっていない。

僕とあの人と一緒に匂いがした。

そして僕は出会つてしまつた…。

あの日、あの研究所で…『志木』と同じ気配をした『雨眞魏』とい
う少女に…。

17話 閻無限 白編＝後編

僕は『危険人物』とされ。

とある、気味の悪い研究所に放り込まれた。
別に怖くもなかつた。

こんな暗い部屋で一人になつた方が、まだよかつた。
それの方が、よかつた。

「君、いっぱい怪我してるね。」
一人の少女が声をかけてきた。

僕と一緒に研究所に放りこまれた死体。志木の死体は僕と一緒に研究所に放り込まれた。

「この人、死んじゃつたの？」
「えつ？？」
「可哀想……」
「……」

僕が志木を殺した、なんてこんな知らない人に言えなかつた……。

だけど、一つだけ似ていた。
志木に……。

暖かさと優しい匂いがした……。

「私、緋鬼瘤兩眞魏。よろしくね」二コッ

「僕は…青柳…白。」

「白君が、まずはその傷の手当てからしよう」二コッ

「うん……」

雨眞魏はとても優しかつた。

こんな暗い研究所で一人でいるなんて……寂しく”ないのかなって
?……。

「雨眞魏はいつから、ここに居るの?」

「覚えてない。」——コツ

「どうして?」

「目が覚めたらこの研究所に居たんだ」——コツ

「そつか。」

ガランツ!

「!?……」

「誰か来た、お客様さんかな?」

「ハア……ハア……白!」

「黒兄様……」

研究所に来たのは、黒だった。

息が荒く、足は酷く怪我をしていた。

「どうして?……こんな所に?……」

「お前が心配だつたんだよ!」

「!?……」

「違う……色。雨眞魏と違う色。」

「えつ? 誰?」

奥から、一人の男の人が出てきた。

「この人は、幸杜梓。私の友達だよ」——コツ

「青柳……白。」

「青柳黒だ……」

「白の色は目の色と一緒に、とても優しい向日葵の色。

黒の色は目の色と一緒に、必死で心配症な自然の色だぜー!」——コツ

「僕が向日葵!……って……黒兄様が心配症?……」

「なつ！…ひが！違ひでー白…－－－－！」

黒は顔を真っ赤にした。

「じゃあ、ここは4人の思い出の場所にしまじょ！」二口芝

「思い出の？…」

「場所。」

「はい。白にはこれ。黒にはこれをあげるよ」二口芝

雨眞魏は白と黒にお揃いのガラスのペンダントを渡した。

「ありがとう！雨眞魏！黒！おそろいだよ」二口芝

「…？…やつと、初めて呼んだな、白」二口芝

そして、僕達は旅に出てそれっきりでそして学園に雨眞魏と梓がいるという噂を聞いて
学園に入った。

僕は、友達を仲間を…守る…それが僕の誓いだから！

18話 分かり合ひ

白と黒はとても悲しく暗い顔をしていた。

「二人とも、どうかしたの？」

劉禰は瞬彗を探している様子だった。

「早く、瞬彗探せよ。つと！ 気をつけろよー。」 —コラ

「……。」

黒の微笑みは心から笑つていなかつた。

「何で瞬彗、何所いるか分かるくせに隠すわけ！
確かに、私は役に立てないと思つよー。」

「だけど…私は私なりに頑張つて…みんなの役に立とうとしている
の！」

「いきなり怒るなよ！」

「…劉禰に何が…分かるんだよ。」

「白、やめろ。」

黒が白を止めようとするが…。

「僕はずっと笑つて欲しかつた！

「ずつとずつと…僕と一緒に…僕の隣での向日葵のような笑顔が
見たかつた！

「何で仲間でもない！他人に協力しないといけないんだよ！

「僕には分からぬ…なんで僕は…僕は…。」

白は大声で劉禰に言つた。

「協力するのは当たり前でしょう！ だって白と黒と私は友達でしょ
う！」

「だけど、何？白は私の事…ずっと邪魔者扱いしてたの！？」

劉禰はなきそつな顔で言つた。

「友達じゃない！仲間でもない！だから、協力なんてしないよ！…。化け物も人間も一緒にやん！ただ、他人を裏切るだけ！

どうせ、劉禰だつて、僕の事。裏切るんでしょうー？」

白も泣きそうな顔をして言った。

「私は今まで1人でいて！皆と初めて友達になれて嬉しかったけど…。白だけは私の事そんな風に思つてたんだ！」

ポルンツ…ザツーザツー

雨が白と劉禰と黒をぬらした。

「何が…分かるんだよ…僕に何が…人間もどうでもよかつた。志木以外の人間どうでもよかつた…僕にとっては、志木が僕の全てだつた！」

「だつたら！気持ちを言えばいいじゃない！何で言わないのよー。」

白と劉禰は必死だつた。

ポタンツ

白の目には、涙がこぼれていた。

「僕は…志木が居ないと…永久に迷路をさ迷つんだよ…。」

「喧嘩、している場合ない。瞬彗を追つぞ…。」

「あつー瞬…いや…志木！」

「白ーおいー！」

「そうだね…追わないと…。」

皆瞬彗を追つっていた。

「ハア…ハア…。」「

「止まつて下さい。」

「お前は…。」「

「瞬彗…いや、もう志木と言つてもいいでしょうか?」——「

「勝手にしろ!俺は、まだつかまらない!」

瞬彗は氷の刃を構える。

「いた!、瞬彗!」

19話 助つ人

「つて、劉禰！お前らーー？」
瞬彗の後ろから劉禰達が来た。

「志木…。」

「白…。」

「志木…えつと…。」

「ごめん…。」ボソッ

「えつ？」

瞬彗は白に背を向ける。

素直じやないんだから…。

劉禰はちよつと微笑んだ。

＝木の陰＝

「行かないのですか？…。」

「…今の状況は…どうみても無理だろ？…。」

「…。」

「なぜ、瞬彗を欲しがるんだ！」

「志木を欲しがるのは、私の興味本位ですよ。」ニコニ

「興味本位とか、馬鹿だろ？…。」

劉禰が相手を馬鹿にする。

「志木、私と着なさい。」

「おい！俺は志木じゃねえーー瞬彗だーー。」

「！？…瞬彗…。」

「チツ…瞬彗を渡すわけないでしょ？ーー。」

劉禰が狼の姿になる。

「はあー…俺もう、限界。」

「瞬彗！？」

瞬彗が地面に座り込む。

「お前は…俺の事、憎いんじゃないのか？白？」

「？！…瞬彗…。」

「まあ…俺は…好きだけど…魔力戻るまで戦つてくれ…。」

「アイアイサーー！黒！」

「おう！」

白と黒は武器を構える。

「なら、私は瞬彗を守る…あいつは一人に任せると…。」

劉禰は瞬彗の前に立つ。

「僕、ちょっと楽しくなつてきた！」

「俺も！」

白は相手に弾を連発で撃つ。

それと同時に黒が相手に一瞬にして近づく。

「あなた達は、私には勝てません。」

「うつせ…！」

黒は剣を振る。

「瞬彗は私が…守るんだから…。」

「ＺＺＺＺ」

瞬彗は木にもたれて寝ていた。

「姉様！…行きます！」

横から、深紅と深香が突っ込んできた。
そして黒はぎりぎりセーフでよけた。

「おい！深紅！突っ込んでくんじゃねえーよ…」

「それが、戦ですよ！黒さん…」

「チッ！だから、困るんだよ。騎士の女は…。」

「黒！よけてね…！！！」

「ん？うわあ…！」

黒の下から白が大きな銃を召喚して何発も撃つている。

「お前もあぶねえーよ。」

「あはははは、だからよけひつて言つたじやん」二四三

「ムカツク……。」

「あつ！待ちなさい！」

相手が、劉禰と瞬彗の皿の前に居た。

「瞬彗！」

「あなたを処刑します！』

「私は、瞬彗を守る！…あんたなんかに負けない！」

劉禰は牙で攻撃する。

「雑魚は、本当に鬱陶しいですね。」

「！？…。」

「ああ…？！」

深紅と劉禰の首を絞めた。

「うう…！？…。」

「チツ…！？…。」

バキューーンッ！

相手の手に白の弾が貫いた。

深紅と劉禰は首を放された。

「お前の相手は僕だよ。忘れるな…。」

「姉様！行きます！」

深紅と白が相手に向かう。

「雑魚はとつとと死になさい…！…！…！」

深紅、白、黒、劉禰を一瞬にして、壁の方に吹き飛ばした。

「！？…ガハツ！」

「ゲホツ！ゲホツ！…。」

「うう…瞬彗…。」

「ゴホツゴホツ…。」

白、黒、深紅、劉禰はそのまま血を流して、氣絶してしまった。

「瞬間…。やつ」と

瞬間に近づいてくる。

そして剣を出した。

そして、瞬髪を刺そうとする。

卷之三

「瞬慧！」

白の小さな声が聞こえた。

力キンツ！

「本当に…お前ら、何してるんだよ。」

梓が瞬彗の目の前に来て、剣を剣で受け止めていた。

「俺の許可なし」、学園の奴に怪我させてんじゃねえーよ。」

20話【番外編】料理（前書き）

再び番外編です！

今回は【料理編】－劉禰と瞬慧が主役です！

20話【番外編】料理

「ナニヤー！」

「瞬彗、やる気満々だね！」

「あ、たりました！料理は得意分野だ！」

同上

「はあ～… ミ'ウかねむ。

「おー鑑禪の料理は不味として瞬慧のあの殺人鬼の料理は半端ないよ

10 分前

「おなかすいたあ～」

「白、それ言つた。俺も腹減つてゐるし、梓の料理長は？」

金田は、生は一度の体験から茅でない

「うう?、今アレハム、アーヴィングの

「なつ！？」

と黒塗りや鹽こ窓氣になつていた。

「なら、俺が作つてやるよ！」

「瞬彗」！？

雨真魏が瞬時に変化していた。

なら、金襴と瞬髪、今日の料理一番な

一
角

一編二十一

という、事だ。

「あづあづの馬鹿！……！」

「あづあづ！言つな！」

「はあ…それにしても本当に腹減つた」

三人の会話は廊下に響いていた。

「三人とも、どうかしたの？」

澪が廊下から三人に話しかけてきた。

「兄様？」

深紅も来た。

「いや…別に。」

しそうがない！もう、こいつらに…殺人鬼の料理を食わせないと！

「そう？なら別にいいけど…。」

「そうですか？…別に構いません。」

深紅と澪はあまり、気にしなかつた。

「何をしているんだ？」

「ご飯まだなの？」

緋那と蒼弥が来た。

「いや…、今瞬彗と劉禰作つてるからー待て！」

「そう？なら待つてよお！」

「そうだな…。」

蒼弥と緋那が椅子に座った。

「おお！劉禰、やるぞ！」

台所

「うん！」――「」

「～～～」

瞬彗は鼻歌を歌いながら…。

魚の目玉や、動物の骨、皮などを次々に入れて行った。
そして、瞬彗は紫色のスープを味見した。

「うん！おいしい！」

瞬彗は一品目の料理を完成させた。

「うん。これこれこれ。」

劉禰は極普通な料理の作り方だった。

そして一品目を作り上げた。

そして、料理が完成した。

「料理完成したぞ！」

そして、みんなの前に料理が出て来た。

「なつ…………！」

全員が後悔と絶望の顔になつた。

瞬彗の料理は普通に魚の大きな目玉が浮いていた。

劉禰の料理は高級な料理だつた。

そして、皆さんに劉禰の料理を食べた。

そして深紅、黒以外は皆倒れた。

「つづけ……。」「
まざい……。」

氣絶しているものもいた。そして天国に言っているものも居た……。

続いて、瞬彗の料理……。

パクッ

瞬彗の料理を食べる深紅と黒。

「おいしいですよ。」

「普通。」

と一人のコメント。

他の人が食べると……。

魂が抜けたらしいです。

いつもして、不幸な料理の口は終わったのだった。

21話 帰りたいから

「おやあー、これは梓じゃないですか。」

「俺の名前を気安く呼ぶな！」

「おやあー、私には厳しいですね。」

「つっせなー！」

「あなたには罰をあたえます。」

「チツ…。」

「びびる…俺戦えないし…。」

相手は梓の方に剣を振る。

梓は軽々とよける。

「おやっ…どうしました？ 私相手に素手はさすがにきついですよ。」

「…つっせー！」

武器持つても、俺、ヘタレだからなあー…。

シユツ！

「チツ…。」

頬に剣がかすつた。

頬から血が出る。

「はあー…私も少し遊び過ぎました。では。」

「あつちよつと待てー！」

「…梓やめひ…。」

凛が後ろから、梓を止める。

「チツ、手当してやれ。」

梓が指示すると皆動いてくれる。
重傷なのは、白と黒と深紅と劉備だった。

「ンンン」

瞬彗は寝ていた。

起きる気配がまつたくなかつた。

「はあ～…瞬彗…。」

「ンンン」

梓は瞬彗をお姫様抱っこをした。

「全員、学園に戻るぞ！」

「はーい。」

そうして、長い一日は終わつた。

パチツ

「ん？…あれ？私…いつの間に寝てたんだろう？」
瞬彗ではなく、雨眞魏の人格で目を覚ました。

「！？…皆…凄い怪我！？」

雨眞魏の隣には、大怪我をした、白達がいた。

ガラツ

梓が入つてきた。

「梓…！？…梓も怪我、してる…」

「ああ…かすり傷だ。」

「だけど…。」

雨眞魏が悲しい顔をする。

「…大丈夫だつて！雨眞魏は心配すんな」二一七

「梓…ごめんね…。」

雨眞魏は部屋から出て行つた。

「はあ～…間違えた…雨眞魏絶対…落ち込んでるわな…。」

私は、何をしてたんだろう？皆が怪我をしてたのはなぜ？…。何で…私、こんな時に何も知らないの？…馬鹿みたいじゃん…。

ポタンッ

「雨眞魏？」

「…？…。」

雨眞魏は顔を拭ぐ。

「どうかしたのか？」

「…いや…な…なんでもないよ」――

「そ…う…か？…なら…いい…が…。」

少し…ない…て…いる…よ…う…に…見…え…た…が…、氣…の…せ…い…か…？…。

「じゃあ、私、用事あるから…じゃあね」――

「あ…雨眞…？…。」

雨眞魏は蒼弥に背を向けてどこかに去った。

私は…本当に何も出来ないの？…瞬^{まばた}…あなたは一体…何をしたの？…。

ドンッ！

雨眞魏が誰かとぶつかった。

「梓…。」

「大丈夫か？」

「お前、目が赤いぞ？」

「あ…ちょっとね。」

「…悪かつたよ…。」

「えつ？…。」

「俺さ…。」

「？？…。」

梓が真剣な顔で雨眞魏に言ひ。

「雨眞魏は俺が守るからな！」

「えつ！？…あつ…えつ？！」

雨眞魏はなぜか、顔を真っ赤にさせた。

「なんだよ…その反応？！」

梓も雨眞魏を見て、顔を真っ赤にさせた。

「梓が…恥ずかしい台詞言うからでしょーうー？」

「俺は…お前のためを思つて…。」

ハツ！

「……。」

少しの間、沈黙が続いた。

「だけど、ありがとう。梓」ニコッ

「！？…。」

梓は顔を真っ赤にさせた。

22話 学園パーティー 前編

「あれ？ 雨眞魏、朝から何してるの？」

「劉禰ちゃん…。」

朝、起き立ての劉禰。

そして、雨眞魏は朝から折り紙をやっていた。

「折り紙だよ？」

「それは分かるけど、何で今日に？」

「ああ～…ちょっとね」二口ツ

「？？。」

劉禰は首を横にかしげて、どこかに去る。

「雨眞魏、これでいいのか？」

「うん。 ありがとう。 梓」二口ツ

梓は大荷物を持って、雨眞魏に話しかける。

「本当に、俺と雨眞魏一人だけですんのか？」

「白と黒はこの部屋の見張り番なの。 しょうがないよ」二口ツ

「深紅は？…。」

「深紅ちゃんは、お疲れなの！だから梓と私だけ！」

「ああー…はいはい。」

梓は大荷物を机の上においた。

今日は、学園でパーティーをしようと思います。

「あれ？ ロビー…立ち入り禁止になつてんだけビ…。」

「そうだな。」

澪と凌がロビー前で看板を見る。

「どうしたんだ？…。」

「どうしたのかしら？…。」

その後ろから緋那と蒼弥が来た。

「ああ……蒼弥と緋那。この看板見てくれよ。」

「？？？……ただいま、立ち入り禁止。」

「どういう事かしら？？」

「さあーな。」

「いいから、もう入っちゃいましょう。」

「おい……緋那。」

緋那がロビーに入ろうとする。

バキューーンッ！

銃声の音が緋那達を沈黙にする。

「えつ！？……白？？」

「つて、黒まで？！」

白と黒が武器を構えていた。

「お前ら、何してるんだ？」

「つて、仲間に何してるのかしら？」

緋那が怒る。

「ここは、立ち入り禁止。分かつてる？」

「なつ？！……」

白が黒い顔で笑った。

緋那が白の顔を見てイラついた。

「なぜ、入れないんだ？」

「ああ……今、取り込み中だ。」

「僕達がここを番人！」二コツ

「なつ？！……」

「いつになつたら、入れるんだ？」

凌が冷静に聞く。

「夜だね。」

「そうか。澪一部屋に戻ろうぜ。」

「あつ……うん！」

澪と凌が自分の部屋に戻った。

「じゃあ俺達も戻るか？」

「……ええ、そうね。」

緋那は1回白をこちらで部屋に戻った。

「雨眞魏達、大丈夫かな～？？」

「知るか。」

＝ロジー＝

「雨眞魏、ほれ。」

「おお！ ありがとう。」＝ロジ

「2人で夜までに出来るのか？」

「分からぬけど、無理でもやるー。」

「はあ～ 分かった。」

梓と雨眞魏は黙々と作業を進めていた。

「何か、思つたんだけどさ。」

「ん？ 何？ 白、改まって…。」

「いや…だからあ～うう～ん…。」

白と黒はジュースを飲んでいた。

「」の学園、おかしな事件とか、おかしな事とか、おかしくやること

ね。」

「それもそだな。それも偶然だろ？…。」

「偶然じゃなかつたら？…。」

「！？…。」

「もしも…必然だとしたら？…。」

白が黒に近づく。

「白、黒。何してんの？ こんな所でこちやつかないでよ。」

劉禰が白と黒を見て言つた。

「別にいちやついてない…。」

「そうだね。」＝ロジ

「あんたら、禁断の双子かよ…。」

「そうかもね」二コツ

白は笑つて流す。

「そんな訳ねえーだろうが。」

黒はいやみつぽく流す。

「ははは、それもそーかい。つて入つていい?」

「駄目だよおー」

「何で?」

「駄目なものは駄目。以上。」

「白のケチ!」

「なんとでも言えば…。」

ガタンッ

ロビーのドアが開いた。

「あつ…劉禪ちゃん!/?」

「雨眞魏?! 何で…立ち入り禁止つて…。」

23話 学園パーティー 後編（前書き）

新しい小説始めようと思っています！

皆さん是非、見てくださいね^ ^

「劉禪ちゃん！」

「何で、雨眞魏だけずるいよ！私も入れてよ、白、黒。」

「アーティスト」

「それは命だからな。」

「命の謎?」
「死の命?」

「 キケッ ! ?

まあ、誰でもいいだろ？お～

卷之三

劉爾は部屋に窓つた。

「はあ、あつがとう。白黒。」

「別」

「雨真魂の頃みごとく、ニロジ

「あらか。」あ松、あい舞難あらぬ。——一

「うん！」

「頑張れよ。」「

シナリオ

雨真魏は部屋に入つて行つた。

一一二

一様、飾りつけ、出来た?

卷之三

一
もう少
し
。

分かつた

梓は部屋の飾りつけ。
雨眞魏は料理全般。

雨真魏の顔を笑っていた。とても嬉しそうな顔で。

皆のこんな事初めてだな…楽しみだし…嬉しいな!

「……。」

梓はちょっと寂しい顔をした。

「梓? …。」

「あつ…ちょっと飲み物買つて来る。」

「うん! 行つてらっしゃい」二コツ

「おう。」

梓は部屋を後にした。

＝どこかの部屋＝

「ねえ、蒼弥。」

「ん? なんだ?」

「何か、妙に白と黒おかしいと思わないかしら?」

「どうしてだ? …。」

「何か、隠してゐつて思つただけ? …。」

「氣のせいだろ? …。」

蒼弥は本を読んでいて緋那の話をあんまり聞かなかつた。

「乃亜ー久しづり」二コツ

「劉禰! お久しづりですの」二コツ

「何してたの?」

「ちょっと、用事だつたの」二コツ

「そう。ならいいけど」二コツ

乃亜と劉禰が一人、嬉しく会話していた。

「はあー…僕、疲れた。」

「俺も。」

「ほら。」

「梓…」

「うわあー、ジューースだーー」

「サンキューー！」

梓は、白と黒に飲み物を渡した。
白と黒は飲む。

「お疲れ様。…。」ボソッ

「！？…。」

梓は、部屋に入つて言つた。

白には一瞬、何かが聞こえた。

「どうした？白？」

「いや…」ニコッ

本当に…素直じゃないね…アズアズ。

「チツ…。」

梓はちょっと頬を赤く染めていた。

「梓、おかえり」ニコッ

「おう。料理、手伝うぜ。」

「ありがとう、助かるよ」ニコッ

雨眞魏を梓は一人で料理をしていた。

そして 午後6時

「白ー、いつになつたら入れるの？」

「7時じゃないの？」

「後、一時間も待たなきやならないのーー？」
皆苛立つていた。

ガランツ！

ロビーのドアが開いた。

「皆、お待たせ、さあ！入って」——口芝

「雨眞魏…何？」

「皆、ロビーに入った。

「うわあー？…」

皆ロビーに驚いた。

「何、今日は何かするの？」

「今日はね、パーティーをしたいなあーって…。」——口芝

雨眞魏が皆に言う。

「雨眞魏、ありがと」——口芝

「！？…」

雨眞魏は頬を赤く染めた。

「うひて、学園パーティーは楽しく、面白く、終わった。

「こんな楽しい事も樂しいなあ～…。」——口芝

23話 学園パーティー 後編（後書き）

雨眞魏の口調が敬語になりかけるww
何でだろ？？ww

24話 SSS級犯罪者

私は…誰?…。

お前は雨眞魏。死神とヴァンパイアの血を引く者。

違う…私は…。

お前は…狙われている…。いざれば、皆を見殺しにする。

!…待つて…どうこう事!ねえ!待つてよ!ねえ…皆殺しにするなんて…いやだよ…。

ハツ!

雨眞魏が目を覚ました。

「雨眞魏、大丈夫?

横から劉禰が心配そうな顔をして、聞く。

「うん。大丈夫だよ」ニコッ

「そう?うなされてたから、驚いたよ。」

「そんなに、うなされてたかな?」

「うん。怖い夢でもみたの?」

「まあ…そんな感じかな」ニコッ

「何かあつたら、相談してね」ニコッ

「うんー」ニコッ

ドカ
ンツ!

下の部屋から凄い音がした。

「何?」

「どうしたんだろう？」

劉禰と雨眞魏は慌てて、下におりる。

「あなたはここで処刑します！」

「無理なものは無理だつての。」

「もう！大人しくてなさい！姉様！」

深紅と一人のフードをかぶった、男の子（？）が争っていた。

「どうしたの？」

「あつー……いや、ちょっとほつといてやれ。」

梓は思い出したくない顔をしていた。

「ん？あつ……雨眞魏…………！」

フードをかぶった人が雨眞魏に抱きついてくる。

「キヤア！……何？……」

「雨眞魏、大丈夫か？」

「雨眞魏（）！相変わらず、可愛い」ニコツ

「えつ……と……放せ！黒鳥（）！」

「あれ？瞬彗（）？」

フードが取れた。それは女の子だった。

「で、誰？」

「あれ？わしの事知らないの？アズアズ先輩（）説明よろしくつすー…」「だから…アズアズつて呼ぶな！」

「先輩？」

皆頭の上にはてなが浮かんでいた。

「こいつは、黒鋼黒鳥（くろがねからす）。情報屋で俺の後輩。
で、今じゃ、SS級の犯罪者だ。」

「SS級

「..

皆が驚く。

SS級とは、滅多に人にも使われないほどの犯罪者。

「ふあ～…熙い。」

白が起きた。

「し…し…白…-----」

「うわあ…?」

黒鳥が白に抱きついた。

「うわあ…黒鳥…?」

「相変わらず可愛になあ～お前…」

「うう…やめろ…黒鳥…」

白は顔を真っ赤にさせて言つ。

バシッ

「あれ?…。」

黒鳥の手を誰かがはじいた。

「黒鋼。あんまり俺の白に触るな。」

「黒…。」

「くつへー…相変わらず、シンシンだねえ～黒りん～

「黒りん…言づな…ボケ!~?」

「あれれ〜にゃははは。」

「チツ…。」

白はちよつと頬を赤く染めていた。

「どうした?白?」

「…?…べ…別になんでもない…。」

「??…。」

「…やめはははは、これからよろしくな」

25話 騎士と犯罪 前編（前書き）

更新しなくて、「めんなさい」vv！
物語がなかなか思いつかなくてww

二二二

「えつ！？何の音！？」

朝から物凄い大きな音が鳴った

卷之三

「どうかしたの？」

あ、
おはー

「梓、何あの大きな音？」

ああ：あれた

梓が指を差す方を雨眞魏が見ると。

「黒鳥！あなたを牢屋にぶち込みます！」

「無理だつて、だつて、わしにはやる事があるからなあ～」

「そんな言い訳どいてもしいのです！姫様！」

「姉様はそんな名前なんかじやない！」

深紅が攻撃していくが、黒鳥は軽々しくよける。

「何で、騎士の仕事しないで。犯罪者に手を貸した?」

۱۰۰

「何で、お前は犯罪者に手を貸す？それはお前も犯罪者になると分かつてか？？」

「！？」

深紅は驚いた顔をして、黙つていた。

「じゃあさ、一回死ぬか？深紅？」

「！？…。」

「わしが殺してやる！」

ジャキッ！

「雨眞魏？…。」

「！？…。」

「！？…。」

深紅と黒鳥の前に一本の剣が地面に刺さった。
「いい加減にしろ！お前ら！朝から鬱陶しい一
つるわすぎて寝られないんだよ！…。」

「瞬彗！？…。」

「チツ…。」

瞬彗のおかげで黒鳥と深紅は治まつた。

”死ぬ”…私が？…姉様を残して…死…。

「……。」

瞬彗は深紅の何かを知っていた。

人は…何か無しでは生きれない…。

「！？…。」

「瞬彗？…どうかしたか？」

「いや…なんでもない。」

「そうか、それならいい。」

「おう…先に行つてくれ。」

「おう。」

瞬彗はどこかふらりと歩いていた。

「ゲホツ！ゲホツ！ゲホツ！…。」

俺の体も…もう…。

人は何かなしでは生きれない。

人は何かを隠して生きている。

人はいつでも半信半疑で生きている。

「今日は…ここまで…また、会えるかな～雨眞魏～」

26話 騎士と犯罪 中編

「はあ……暇だ……。」

黒鳥は自分の部屋のベッドで寝転んでつぶやいていた。

黒鳥は一人部屋だった。

「兎へどうしたらいいのだろうな?」

黒鳥の服の中から黒い兎が出てきた。

「何が?……。」

そして、兎は喋りだした。

「わしは……なんで、罪を重ねるのだろうな?」

「知らないわよ。なら騎士へ言つて、つかまるの?」

「それは無理な話だ。わしにはやる事がある。」

「そう、なら。罪を重ねる事ね。」

「はあ……相変わらず、兎は言い方がきついなあ~」

「それもしないと、あなたが立ち直らないでしょう?」

「それもそうだな……。」

「ふん……私は、寝るわ。」

「分かった。」

兎は黒鳥の服の中に戻つて行つた。

「はあ……瞬彗、居ないのかあ~」

「なんだ?」

「うわあ!~?」

黒鳥の部屋の後ろの窓から瞬彗が顔を出した。

「何で、そんなに驚くんだ?お前、俺を呼んだらうが。」

「あつ……『ごめん。』

「チツ……。」

「で、瞬彗は何してるんだ?」

「別に、ただ……暇だからな。」

「ふうん。」

黒鳥が窓から飛び降りた。

「お前、何してるんだ？」

「わしの相手は、あの子がやつてくれるんだってさあ～」

「…深紅…。」

「黒鋼黒鳥！あなたは私が処刑します！」

「やれると思う？君が？」

「黙りなさい！」

「あつおい！」

黒鳥と深紅は戦うオーラを放っていた。

「騎士団として、あなたを見逃す事は無用！排除します。」

「怖いねえ～だけど、その瞳まなこたまらんな。」

黒鳥はとても不気味な笑つた顔を見せた。

「姉ねえさま様！」

「あれえ～自分は戦わないのか？しうもないねえ～」

「つるさい！あなたに何が分かるんですか！あなたに…犯罪者のあなたに！」

「分かるわけないじやん。人間なんてとてももうい。」

「つるさい！人形！」

深紅の持つている、人形が巨大化した。

「ほえ～、その人形、戦うんだあ～意外な情報ゲットッ！」

「つるさい！姉あね様！人形！」

深紅の人形と深香が黒鳥に襲い掛かる。

「遅い。何もかも、遅い。」

「！？…。」

「君もだよ…深紅。」

深紅の目の前に黒鳥が居た。

「はい。終了。」

「…？…」「

深紅の首に肩車を置く。

「？！…何で…。」「

深紅はそのまま座り込んだ。

「何で？…はあ…君は普段、とても真面目だけれど。頭に血が上ると
我を忘れ、

何でも発動しちゃう癖があるんだね。」

「…？…。」「

ポタンシザーツ

雨が降つて來た。

「…う…私は…。」

「わしは、君の事情など知らない。だけれど君は今、やりたい事があ
るんだったら

わしは、深紅に協力する。」

「…？…。」「

「わしを仲間だと思つて欲しい。」

深紅に手を差し伸べる黒鳥。

「…？…。」「

深紅の頭につつたのは、幼い頃の記憶…。

「僕の仲間になろうよ、深紅」二口シ
一人の幼い少年が笑つた、姿。

「うう……うう……はい…仲間…です。」

「泣くなよ。深紅！」

「うう…。」

黒鳥は優しく雨の中、深紅をそっと静かに抱きしめた。

”仲間”それは”絆”で出来た欠片。

「もうすぐ、会えるかな～雨真魏～」二口シ

27話 騎士と犯罪 後編

「姉様！」

「深紅、おはよっ」——口ヶ

「はい！おはよひびきます！」——口ヶ

姉様…凄く笑つてゐる…凄く楽しそうに…。

「姉様！姉様！嫌…父様！父様！やめて！姉様！」

「深紅、お前は模造品。だから死ね。」

「嫌！…姉様！姉様！…嫌！イヤアアアアアアアアアア…！…！…！…！」

ハツ！

「…？…」

深紅はゆっくりおきて、頭を抱えた。

「夢…」

隣には姉の深香が立っていた。

「姉様…ごめんなさい…」

「…。」

「ンッ」「ンッ

「はい？…。」

「あつ…深紅ちゃん、雨眞魏だけど…朝ごはん出来たから、呼ぶに
来たんだけど。」

ガチャッ

「深紅ちゃん。」

「分かりました…今行きます。」

「うん…。」二口ツ

「雨眞魏さん？…。」

バタンツ！

「！？…雨眞魏さん！雨眞魏さん！」

雨眞魏が倒れた。

「どうしたの？雨眞魏！？」

「劉禪さん…。」

深紅は不安な顔をしていた半分焦りを見せていた。

「大丈夫、雨眞魏は大丈夫だから。」

「はい…。」

「姉様！…姉様！嫌！…嫌！姉様！…姉様！…！」

あの頃は何も分からなかつた。
何も、誰も教えてくれなかつた。

私が…”模造品”だから…私が…”処分品”の出来損ないだから…。

「深紅？」

「…。」

「深紅？」

「…痛ツ！」

「深紅！？どうしたの？大丈夫？」

「あつはい…。すみません。」

深紅は自分の部屋に入つて行つた。

「……。」

深紅の腕を見てみると、道化師の模様の付いた黒いマークがあつた。
とても濃く書かれていた。

「……。」

深紅はゆたりを座り込んだ。

タツタツ

「深紅に、雨眞魏に、白は、模造品。もう引き取るか。」ニヤツ

「姉様。姉様。寂しい。」

バタンツ

深紅はそっとドアの前に倒れた。

「瞬彗？！。」

「ん？…劉禰か？飯か？なら俺は食べに行く…じゃあな！」

「ちよつ！瞬彗！」

瞬彗は食堂に向かった。

そんな瞬彗を追いかける劉禰。

「ゲホッ…。」

「大丈夫？風邪？」

「たいしたことない！大丈夫だ！」

「そう？ならないけど…。」

雨眞魏の憎しみが、また増してゐる。

28話 間の住人

真つ暗な部屋。その部屋に一つの椅子が置いていた。
その椅子に座っている。女の子。

「ねえー、咲ぐ。もう行っちゃおう。会いたくてたんない。」
「まだ、待ってください。」

「はあー…暇だなあー」

ねえ、雨眞魏。あなたはいつ死ぬの?…。

「模造品。」

「ゲホッ！…ゲホッ！…ゲホッ！」

「ちょっと、瞬彗ー大丈夫？」

「志木！大丈夫？」

「あつ…大丈夫だ。ただの風邪だ。」

「もう一週間だよ。そんなにせきが続くわけないでしょ?」

「別に、せきが出てるからって、あまり気にする事はないだろ?」

「それもそうだけど…瞬彗。」

「もう、心配するな!俺は平気だ!…ちょっと外の空気を吸つてくる。」

「あつー!瞬彗ー!」

「…。」

瞬彗は逃げるよつて学園の屋根に行つた。
「はあ…。」

「何をそんなにため息になるんだ?」

「ん?
黒か?

「おのじかが、向か、純くなつてゐ。」

「可
能
性
？

「返済」
金利

反周
卦幽
行重力

氣にしてしたが

瞬髪は深刻そこの顔をした

何か隠してるだろう?

「…どうだひな。」

「なんだよ、それ。」

「ゲホッ！ ゲホッ！ ゲホッ！ ゲホッ！ ゲホッ！ ゲホッ！」

「おー！大丈夫かよ？」

辨證女座のスケル

黒澤一郎著

アヌニカ・カカの魔術アヌニカ

そんなにせきが潔いしか?

俺のせきはそんなものだ

「そうか。水と薬持つてくるから。」
「うう」といふよ。

「分かっている。黒。」

薬と水を取りに行こうとする、黒を引き止めた。

「ありがとう。」

「！？」
別に……だから駄目だよー！」

「お」

黒は顔を真っ赤にして走つて下の階に行つた。

瞬彗。迎えに来たよお~

ドクンッ！

「！？…」

バリツバリツ

「学園の結界を…すり抜けたか？…チッ…あつ…黒悪い！」

瞬彗は屋根から飛び降りた。
地面にちゃんと着地した。

「わあーこの結果。凄いやあーだけど。こんなんじゃ僕を倒せないよお～」

カキンツ！

剣が重なった音が響いた。

「あれあ～、凄い歓迎だね。って久しぶりだね。」――コツ

「お前！何しに来た！」

「ほえ～久々の挨拶がこれって酷くない？志木～」――コツ

「うつせな！」

カキンツ！カキンツ！カキンツ！

その頃

パリンツ！

「瞬彗！…」

黒はコツツを落として割つてしまつた。

「あいつ！…あんな体じや戦えねえーだろうが！」

黒はすぐさま、瞬彗の元に行つた。

「当たり前だ！」

カキンツ！

「あつ…傘があ～…」

「志木～あえて嬉しいよあ～」

「相変わらず、ウザイんだよ…」

「あれれ～もしかして、苛々してる？」

「当たり前だ！」

カキンツ！

「あつ…傘があ～…」

瞬彗を相手をしている少女は武器である傘が飛ばされた。

「終わつたな。」

— それはどうがな？

二〇九

卷之三

「アホッ！アホッ！アホッ！アホッ！アホッ！」

「真・力」

グサツ！

「志木」僕と行こう

「ハア……ハア……お前は……！」
。

「はあ～」相変わらず、往生際の悪い。

グサツ！

「ああ！？ クツ！？」

「ねえ、もつと悲鳴を聞かせてよお！志木！？」

卷之三

瞬彗は右肩をクサッと逝かれていた

力量の血が流れ

「元ス」

卷之三

ジーベック 増刊 ビルト

「井上、
動けるのかあ?
？」

三

またマークが濃くなる一方だよ。

「！？ ゲホッ！ ゲホッ！ ゲホッ！ うう ゲホッ！」

瞬彗は口から大量の血を吐いた。

「瞬彗！」

「志木！」

「...白黒の前ひ遅すぞ。」

バタンツ！

「志木！」

「瞬彗！」

瞬彗が倒れた。

29話　『仲間だからです。』（前書き）

今回のサブタイトルは、キャラの台詞にしてみましたww

29話『仲間だからです。』

「志木！」

「あれ？志木はおねんね？」――口ッ

「お前…何者だ！結界を通り抜けたのか？…」

黒は驚いて。

学園の結界は絶対誰も通れない。完全防壁。

「あれ？君は、白君？見つけた！見つけたよー咲くー」――口ッ

「咲く？…」

少女の後ろから背の高い男が現れた。

「！？…」

白は一瞬にして、体が震えだしていた。

「おや、ここに居ましたか。白様。お迎えに参りました」――口ッ

「何言つてんだよー？？」

「白様、帰りましょー」――口ッ

「嫌だ…嫌だ！」

「つう…」

「志木！」

瞬彗はちょっとおきた。

「白…動けるか？…」

「えつ？…つん…」

「おや、まだ動けますか？」

「お前は白のなんだ！」

「つるさいですね。執事ですよ。」

「えつ…？…」

黒は一瞬にして、男に吹き飛ばされた。

「ガハッ！」

「黒…」

「白…逃げる…。」

黒は気を失つた。

「さあ、帰りましょう」二口ツ

「嫌、嫌だ、嫌だ……。」

白はとても震えていた。

「うう……お前ら、勝手な事やつてんじゃねえーぞ……。」

瞬彗はよろよろ立つた。

「志木……。」

「白、黒を連れて、逃げる。」

「だけど志木が！」

「俺はもう逃げないよ、大丈夫。」

「志木！」

「いいから行け！ ゲホッ！」

「志木、嫌だよ……。」

「白……。」

白は瞬彗の言葉を拒否つた。

「僕はもう志木を苦しめたくない！ 志木を守るのが僕の誓いなんだよ……。」

「！？……。」

瞬彗は白の言葉に驚いていた。

「ん？……岬、何か来ます。」

「分かつてゐつてえ～」二口ツ

「姉様！」

「！？……。」

瞬彗達の田の前には、深紅が來た。

「深紅！？」

「騎士娘！？」

「姉様！」

「……。」

深香が白と黒と瞬彗をかかえて学園の方に戻つて行つた。

「深紅！何してんのだよ！君も！」

「…皆様…今までありがとうございました。」

「…？…。」

「騎士娘…やめろ…お前ではそいつらは倒せない…やめろ…瞬彗と白は大声で言つた。

「私は、皆様に会いえて幸せでした。だから…。」

深紅の目には一粒一粒涙が零れ落ちていた。

「深紅！」

「仲間だからです。だから、守りたい…だから、大切だと思ったのです！」

今までありがとうございました。姉様も頼みます…人形…パベット

「やめろ…！…！…！」

そのまま、学園には特別な結界が張られた。

深紅はどうなったのかは不明だった。

「梓！…深紅は？」

「いない。もう、敵もない。」

「？！…。」

白はとてもショックな顔をしていた。

「…ゲホッ！…ゲホッ！…ゲホッ！」

瞬彗はよろよろ立っていた。

「志木…。」

「…白…。」

「うう…。」

白は瞬彗に抱きついて泣いた。

「大丈夫だ。深紅は死んでない。安心しろ。」

「うん……分かってるよ。」

『仲間だからです！だから、守りたい！』

お前から……そんな言葉を聞くとはな……騎士娘……。

黒はとても重傷だった。

それから、一週間。深紅は行方不明。

そして、瞬彗の体もどんどん悪化してきたのだった。

30話 製鑿 前編（前書き）

30話行きました！

30話 襲撃 前編

「ゲホツ！ ゲホツ！ ゲホツ！」

瞬彗は雨眞魏に戻つても両方の人格の体が悪化していた。

「大丈夫？ 雨眞魏？」

「うん… 大丈夫だよ… 劉禰ちゃ… ゲホツ ゲホツ！」

「あんまり、無理しないでね。」

「うん…。」 ニコツ

深紅が居なくなつてから、姉、深香にも変化が出てきた。この一週間、目から血の涙を流していた。

「白、大丈夫か？ 代わるぜ。」

「僕は、大丈夫。」

「そうか？」

「うん。」 ニコツ

「…。」

梓と白は黒の看病をしていた。

「皆、冷たい空気なの。」

「それもそうだろう。」

「そうよね～？」

階段で乃亜と蒼弥と緋那が話していた。

「どうなるのかしらね。この学園。」

「本当だな、この学園はとても不思議な事が起きすぎだと思つぞ。」

「それもそうなのー！」

「はあ…。」

「…。」

「笑えないの…。」

三人は階段でとても暗い顔をしていた。

「まだだよ。」

「えつ？？」

「本当なの。」

「深紅の姉が血の涙を流している。」「深香は目から血の涙を流していた。

「ゲホッ…ゲホッ…ゲホッ！」

「雨眞魏！？」

「大丈夫なのか？」

「あつ…うん。」

雨眞魏はよろよろ深香の前に立った。
そして深香の手を握った。

「大丈夫…だよ。深紅ちゃんは生きてるよ。お姉ちゃんが信じないと、駄目だよ」＝「コツ
「！？…。」

初めて感情を表に出した、深香。

「大丈…夫…あなたが…深…紅ちゃ…んを信じれば…大丈…夫。」

バタンッ！

雨眞魏が倒れた。

「雨眞魏！？」

「大丈夫か？」

「大丈夫よ、ただ氣を失つただけよ。」

「よかつたの～」

「ん？…。」

眠っている雨眞魏の目から涙が零れ落ちていた。

「雨眞魏…。」

「部屋まで運んでくる。」

「よひしくね、蒼弥」＝「コツ

「…。」

蒼弥は雨眞魏をお姫抱つゝして部屋につれて行つた。

ビリツ…。

ハツ…?

雨眞魏は田を覚ました。

「雨眞魏? 大丈夫か?」

「蒼弥君…うん。大丈夫だよ。」

蒼弥は雨眞魏を下ろした。

「…結界が…。」

「えつ?」

ドカーンツ!

学園の入り口から煙がいっぱい入つてきた。

「キヤア!」

「なんなの? ?」

「へえ~、中つて結構豪華なんだあ~」

「…。」

「ああ~! 雨眞魏~! 超一可愛い!」 二コツ

「! ? …。」

「咲ぐ、自分の目的は果たしてね」 二コツ

「分かっています。」

「ああー、自己紹介するね」 二コツ

タツ!

「お前! ? …。」

「あれ? 白君もいるんだあ~」

力チャツ

「あれ? …まだ、自己紹介していないんだけどなあ~」

「うつせな、お前ら何しに来た。」

少女の後ろにいる黒鳥、頭に銃をあてている。

「ええ~? 何しに来たつて? それは呪マークの者を捕まえに来たんだよお~」 二コツ

「…。」

「まあ、黒鳥は要らないけど。あなたは模造品じゃない、処分品。なんだよ。」

「！？…死ね！」

「バキューーンッ！」

「今、心に空きが出来た。」

「！？…。」

少女は銃の弾を軽々しくよけていた。

「チツ！」

「咲ぐ。」

「御意。」

「白！雨眞魏！逃げる！」

「ゲホツ！ゲホツ！ゲホツ！…！？」

ドンッ

雨眞魏を気絶させた。

そして、抱える。

「おい！雨眞魏！」

「チツ！」

「別に、雨眞魏が揃えば、もういらぬいんだけど、一応、白痴もねえ～」「二口ツ

カシャーンンッ！

「！？…なつ！？」

黒鳥は鳥の檻に閉じ込められた。

「鴉にはお似合いでしょ？」「二口ツ

わしも本来の力が戻れば…！。

「白！逃げる！」

「！？…。」

「白様、行きますよ。」

「！？…。」

「いい加減、離せ！暑苦しい！」

ドンッ！

男が壁まで蹴り飛ばされた。

「！？…。」

「ありやあ～、甘く見ちゃ駄目だよ。特に志木と雨眞魏は。」ニコッ

「チツ、白ーしつかりしろ！」

「！？…志木…。」

「大丈夫だ。自分を信じ…ゲホッゲホッ！」

「志木…。」

「えつ？…。」

男が後ろに居た。

バキューーンッ！…！…！

「！？…白様…。」

白は男に向けて弾を撃つた。
だが、弾は当たっていない。

「チツ…。」

トンツー！トンツー！

白と瞬髪を氣絶させた。

「！？…チツ…。」

バタンッ

男が、白と雨眞魏を抱えて少女の所に行く。

「そうだ、自己紹介だつたねえ～」

「雨眞魏を離せ！！！！！！！」

劉禰が狼の姿で男に襲い掛かる。

「はあ～…もう、邪魔！」

「！？…。」

劉禰も鳥の檻に閉じ込められた。

「僕は、闇の住人^{ナイトメア}？、岬、よろしくね

それでこっちの執事が…闇の住人^{ナイトメア}？、咲く。」ニコッ

「おー！雨眞魏と白を返せー！」

梓が下に下りてきた。

「あれ？ああ～そつか。じゃあ勝負しようよ。」——シラ

「勝負？」

「そう、君の故郷で勝負。」

「！？！」

「君の故郷で君と白君と黒君と雨眞魏が出合つたあの、研究所。」

「？！」

「僕はそこで待つてるよ。」

「あっ！待てー！」

岬と咲くは白と雨眞魏と共に消えた。

出会いの研究所で勝負……。

3-1話 襲撃 後編

「やつとだよ。模造品が揃つた。」

「うう…クッ…。」

「あれ？もう田を覚ましたの？志木～」ニコラ

「うつせ…。」

瞬髪と深紅と白は三人、小さな檻に入れられていた。

「深紅…白…」

「うう…うう…。」

「…。」

深紅と白はまだ気を失っていた。

「志木、さあ～、僕と一緒に帰ろう。」

「！？…。」

「雨眞魏も連れて、白君も深紅も一緒に帰ろう？」ニコラ

「？！…嫌だ！俺は帰らない！あんな所に！」

「そつか、知つてる？。」

「何がだ！…。」

「雨眞魏、梓君、黒君、白君を出会わせたのは、僕なんだよ。」

「！？…。」

「一人一人がもう離れなれなくなる、そして離れていく屈辱をして欲しかったのさ…。」

「？！…。」

岬はとても憎い田をしていた。

「俺は…恨んでいるんだな。」

「当たり前だよ！僕を惨めに惨めにした君を…だけど、僕は志木が大好きなんだあ～」ニコラ

「チツ…ウザイ。」

「だけど、志木も雨眞魏も僕がいないとその、やまい病治らないよ？」

「……。」「

「雨眞魏は僕の事、覚えてなかつた。」

「！？……。」「

「あれ、どういう意味？僕の事を一番恨んでいるの雨眞魏だよ？」「あいつに…何も教えないでくれ…。」

「どうして？」

瞬彗はとても悲しい声で頼んでいた。

「…雨眞魏は…記憶喪失…一部の記憶は無い…だから…悲しい過去を教えないでくれ！」

「そんなの、しないよ。」「

「！？…。」「

「僕は雨眞魏に思い出して欲しいんだもん。だからさー。」「

「？！…お前は…。」「

「僕はさ、あんたら極普通の化け物とは違う…。」「

「…。」「

「僕は…人間！僕の体は人間だよ！だから、刺されたらすぐ死ぬ。だけど…。」「

「それが出来ない…歪の悪魔がとりついてるから。」

「？！…岬お前！」「

岬は何かをしようとしていた。

「人は…何か無しでは生きれない。」「

「！？…。」「

「志木、サヨナラ」

「！？」

「フラッ

駄目だ…目がかすんで…。

バタンッ

瞬彗は倒れた。

俺には…まだやる事が…。

「もう、時間。だけど、楽しかったよ。咲く。」

「御意。」

「志木は、闇の住人ナイトメア？」

白君は、闇の住人？」

深紅は、闇の住人？なんだよね～」二口ッ

32話 死と隣り合わせ

【雨眞魏、大丈夫だよ。お前は俺が守る。】

誰？…誰なの？…なんで、私の名前を知つていいの？…。

【知つてるよ。雨眞魏の事なら。何でも。】

何でも…私の事なら…じゃあ…。

【何？】

私は…何者なの？…。

【君は、ヴァンパイアと死神の血を引く娘。】

それは…知つてるよ。自分自身が分からぬい。

【…。】

ねえ、何で…。

【君は恨み、憎しみがあると死ぬ。】

！？…私が…だって私は…。

【君はいつも死と隣り合わせなんだよ。】

「……。」

雨眞魏の人格で田を覚ます。

田を覚ますとベッドの上だった。

「……。」

「起きたあ～」 一〇七

「誰？……。」

「僕だよおー岬」 一〇七

「岬ちやん？……。」

「そうそう～」 一〇七

「……？？」

何か…この人を見ていると懐かしい…だけどとても悲しい…。

「どうかしたの？」

「歯は？……。」

「ああ～後で来るよ」 一〇七

「そうなんだ。」

「雨眞魏は、待つててね」 一〇七

「うそ。」

雨眞魏はそう言つて、机の上にあこでいるパーヒーを口にした。

「じゃあ、また後で来るね」 一〇七

「うそ。ありがとう岬ちやん」 一〇七

「うそん」 一〇七

岬は部屋から出て行った。

「本当に記憶が無いんだね。面白くなつてきたよ。また、あの顔が見れるんだあ～」 一〇七

「ゲホツ…ゲホツ…ゲホツ…」

雨眞魏はとても悲しい顔をしていた。

死と隣り合わせ…嫌…死にたくない。何…なんで私は死ぬの?…。

雨眞魏の頭はそればかり廻っていた。

「…ゲホツ…ゲホツ…」

【雨眞魏】

「!…瞬慧!…」

【逃げる】

「どうして?」

【いこから】

「分かったよ!」

雨眞魏は部屋の窓を開ける。

「あれ?何してるの?」

「!…岬ちやん…」

「雨眞魏、ここからはずせいや駄目だよ~」――シラ

「…。」

「真実を教えてあげる。」

「えつ?…。」

「あなたの思い出。」

「私の思い出は全て私が覚えてるよ~。」

「覚えてない、あなたの記憶はかけてるの。パズルのよう。」

「!…。」

岬は雨眞魏を追い詰めるように走る。

「…。」

「思い出すじよ~。雨眞魏~僕と君は友達?…だろ?~。」

「?…違つ…私と岬ちやんは今日、初めて会つたよ…。」

「初めて?…ねえ~。」

「…。」

「…?…」

雨眞魏の頭の中で何かが引っかかった。

「初めて?…違う…初めてじゃない…あなたとは…。」

「そう。会ってるよ。」

「…?…違う…違う…」

雨眞魏は田をつぶつって、頭を抱えて座り込む。

「雨眞魏、私達いつも一緒にね?」

「?…?…。」

雨眞魏は顔をあげた。

「雨眞魏」ニコシ

「岬ちゃん!…嫌!嫌!」

「思い出した?君は僕の模造品。だから、意地悪したかつたんだあ

」

「…?…返してよ…私の…私の。」

「だつて、雨眞魏、とても幸せそうな顔してたんだもん。

あの顔を壊したかつたんだあ~僕の模造品だからさ~」ニコシ

「…?…返してよ…私の大切な人を!…。」

「何言つてるんだよ?あれ、殺したの、雨眞魏自身だよお~」ニコシ

「違う!…違う!」

雨眞魏は頭を抱えんだ。

「咲く、運べ。」

「御意。」

咲くは雨眞魏を氣絶させて抱えた。

「はあ~、実験スターとだね」ニコシ

33話 月下の満月

「雨眞魏が鍵。雨眞魏が宝。雨眞魏が世界の全て。」
「…。」

雨眞魏は気を失つて、ベッドの上で眠つていた。
目を覚ます事もなかつた。

まるで、永遠に眠るかのように、眠つていた。

「始める。深紅ちゃんも白君も咲くに任せせるよ。」

「御意。」

咲くは消えた。

「じゃあ、雨眞魏。サヨナラ。」ニコラ

「…。」

「白様、もう終わりです。」

「！？…僕は、お前には負けない！」

「もひ、逃げるのをやめてください。」

「！？。」

「世界も誰もあなたの味方はいません。」

「う…黒…。」

バタンッ

「…？…白…。」
「黒…早く行くぞ…！」
「あつおひあ。」

「深紅……君はもう用済みです。」

「！？……嫌……こないで！……姉様……。」

「……。」

「姉様……！……私は……。」

「サヨナラです。」

「カキンツ……！……！」

「！？……何！？」

「お前ら、やりすぎなんだよ！？」

「志木！？どうしてだ！？」

「俺は、雨眞魏と違つて、瞬彗つて名前があるんだよー。」

「？？」

「意味がまったく伝わっていらないらしい。」

「俺の瞬は、一瞬の瞬だ！彗は彗星の彗だ！よく、覚えておけボケが！」

「あなたは、ここに来ると想いましたよ。」「ああ？」

「死んでください。」

「グサッグサッグサッ！」

「？！……。」

瞬彗は体の何ヶ所を横から刺された。

「！？……う……ゲホッ……。」

瞬彗は体から血を大量に流す。

バタンツ！

「瞬彗さん！？」

「深紅……逃げる……。」

「だけど……。」

「いいから……白を連れて……逃げろ……俺は……平気だ。」

「分かりました！」

深紅は、人形を使って、白を担いで部屋から出る。

「逃がしましたか。」

「……お前は俺が……倒す。」

「無理です。」

「……梓……悪いな。」

「？！……雨眞魏？……瞬彗？」

「俺……もう駄目かも知れないな。」

「死ね！」

「悪い……サヨナラ。」

「グサッ！」

「バタンッ」

瞬彗は倒れた。

そして血が大量に出ていた。

そして、部屋から満月の月光が射し込んでいた。

その満月の光が瞬彗の体に当たっていた。

「来た。」

「……。」

「志木、あんたのサヨナラだよ！咲く、一人を追え！」

「御意。」

「サヨナラ、雨眞魏！志木！。」

「！？……。」

瞬彗は少しだけ、意識が合つた。

「ガツ！……う……岬！……貴……様。」

瞬彗の周りには、雷が流れ込んでいる。

「志木、世界のために死んでよ。」

「な……んだと……。」

「あなたは、鍵！あなたは宝！あなたは全て！分かる！だから死んで。サヨナラ。」

「楽しきつたよ。人生。」——口ツ

「…………。」

瞬彗は黙り込んだ。

ガタンツ！

「雨眞魏！」

「……梓……。」

バタンツ

瞬彗は倒れた。

血も大量に出ていた。

「雨眞魏！！！」

「遅かつたね、志木も雨眞魏も死んじやつたあー、君の封印ももう解かれてるでしちうっ！」

「…………。」

「雨眞魏…………。」

34話 君の笑顔（前書き）

更新遅れてしません。
これから、よろしくです。

34話 君の笑顔

「ねえ、知つてる？ 雨眞魏も瞬彗も世界のために死を選んだ。」

「雨眞魏！」

梓は瞬彗の所に駆け寄る。

「……。」

雨眞魏の髪は真っ赤な髪に染まつてきっていた。

「！？。」

梓は思わず驚く。

「これが、本心本能の姿。」

「！？。」

「誰も知らない。雨眞魏の姿だ。」

「……。」

「雨眞魏の人格は生き、志木の人格は死んだ！」ニヤッ

「！？。」

「傑作だ！僕は勝った！傑作だよ！深紅も白ももう死ぬかもしれないよ？」二コツ

「！？。」

岬は満足気な顔で微笑んでいた。

……。

いきたいか？

誰？……。

お前は生きなくてはならない。雨眞魏。俺の分まで生きてくれ。

瞬慧……つづさん。一緒に生きるんだよ。これかも。

雨眞魏……ありがとう……。

瞬慧……。

「お前は、許さない！」

「あれ？ 怒つた？」

「お前だけは許さない……！」

梓の能力が解かれる

「梓！」

「劉禰、今行けば、梓に巻き込まれる。ここは梓に任せて

俺達は白と深紅を助けに行くぞ。」

「分かった。」

劉禰達は、白と深紅達がいる、部屋に向かった。

ビリツビリツ

梓から電気が走っていた。

「へえ～、狼つて結構いいものだね。」

「…。」

「僕、ペツト欲しかったんだよねえ～」――コツ

「狼と天使の血を引く者だけど、まるで悪魔と狼の血を引いている
ものだな。」

「…。」

梓は一瞬にして消えた。

「あれ？ 消えた？ なんてね。」

カキンツ！

「？！ …。」

「君では、僕には勝てないよ。」

「つるせえ…………！」

「そつちがうることよ。」

ガツー！ドカーンッ…………！

梓は岬に思いつきり腹を蹴られて、壁まで飛ばされた。

「あ……こりや、しつけしないと。駄目だなあ～」

「……」

「だからさ、もうやめない？僕、戦うの嫌いなんだだけじゃあ～？」

力キンッ！

「俺は……お前を殺す！」

「殺せるものなら……殺してよー。」

グサツ！

「！？……ガハッ！」

梓は腹を思いつきり刺されて、座り込む。

「僕だつて、死にたいよ。だけど死ねないんだよ！もう疲れた！僕だつて！」

人生に飽き飽きなんだよ…………！」

梓の体を切り刻んでいく。

梓の体は血だらけだつた。大量の血が流れていった。

「……ハア……ハア……。」

岬はとても息が荒くなつていた。

「雨眞魏も志木も、呪マークのせいで寿命がきつたんだよ。」

「雨眞魏も志木もまだ死がない！俺が一生守ると決めた相手だ！」

「！？……愛されてるね……雨眞魏も志木も……。」

岬は笑つてゐる半分に寂しそうな顔をした。

「梓だつけ？……君は、本当に守れると思つ？」

「はあ？……。」

「じゃあさ、賭けをしようよー。」

「……なんだ……と？」

「雨眞魏達を守れなかつたら僕の勝ち。守れたら梓の勝ちね。」

「…チッ…。」

ヤバイ…視界がかすんできてる…。

「今日は、もう終わりだよ。咲く、帰るよ。」
そう言って、岬は消えた。

バタンシ

「雨眞魏……ごめんな…。」

梓も氣を失つてしまつた。

そして、一週間後

ガタンツ！

「梓ー！おはよー」「ゴシ

「おー、雨眞魏。おはよー」「ゴシ

あれから、一週間が経つた。

梓の怪我も雨眞魏の怪我も無事回復した。
そして、今を平凡に生きている。

雨眞魏の髪は灰色から、真っ赤な赤毛に染まつた。

「しかし、真っ赤だねえ~」

「それでも雨眞魏い~」「ゴシ

白は雨眞魏に抱きつく。

「そうだな。雨眞魏らしい色だな。」

「ちよつー梓、雨眞魏らしい色つて何?」

「別に。」

「ちよつとー梓!教えてよおー!」

君の笑顔が薔薇のように綺麗だから……。

雨眞魏は知らないけどな……。

「黒発見 ! 久々だな。あいつに会つのは、」

34話　君の笑顔（後書き）

次回からは、新章編です！

35話 濃黒の嘘と濃黒の真（前書き）

新章編開幕！

35話 漆黒の嘘と漆黒の真

『黒、私を守ってくれる？』

卷之二

卷之三

あの後、俺は、約束を破って死なせてしまつた

「黒=お片手=お二=二」
「ツ

ପ୍ରକାଶକ - ବ୍ୟାକିନୀ

卷之三

「そつか」——「ハツ

俺の双子の弟。血は繋がつてないけど。俺の弟だ。
絶対こいつだけは、失いたくないと思つた…理由が合つたからな。

「まあ。
」

「黒? どうかしたの?」

卷之三

「そう? それならいいの」「コッ

雨真魏に優しく微笑んだ

ボノツ!

「瞬慧！？」

瞬慧の人格に変異した

「男なの、飯十五杯は行け!!」

一男なら、飯は5杯は行け！」

「…何の話してんだよ。お前。」

「何！黒！お前、少し生意気になつたぞ！」

「俺は、いつもこんなんだ。」

「ムカツク！！！」

いつもより、なぜか騒がしかつた。
人数が増えたからか？…。

「黒鳥、お前起きてるの遅い。」

「悪いっす！梓先輩」ニコッ

「はあ…。」

梓はため息を吹いた。

「お前、もう”梓先輩”って呼ぶな！」

「何でっすか！？」

「俺は、別にお前の先輩じゃねえーし。」

「分かつた！じゃあ梓ー」ニコッ

「それでいい。」

梓は納得。黒鳥は嬉しく微笑んでいた。

俺は…皆が明るくて、明るいほど…いやになる。
冷めて来る。鬱陶しくなる。何もかも壊したくなる。

「悪い、外の空気吸つてくれるわ。」

黒はそう言って、外に出て行つた。

「ん？…深紅？」

学園の屋上に来た、黒。
上から深紅の姿が見えた。

「姉様！…。」

深紅は姉の事を呼んで叫んでいた。

「来るんです…。」

「…。」

「来るんですよ…あいつが…あの憎しみが…。」

深紅はとても震えていた。

上から見ている黒でも分かつていた。

ビリッ

「！？…。」

ドカーンッ！…！…！

黒に直撃した。

「あれ？当たつてないやあ～さすっがー！」

黒は一瞬にして、よけていた。

「誰だ、お前！」

「はははははは、黒。会いたかった。」

「はあ？」

「黒～変わらないなあ～。」

「はあ？」

「覚えてないの？私の事、守るつて約束してくれたのに。」

「？！…。」

黒は一瞬黙り込んだ。

「お前…何言つてる！あいつは死んだ！」

「死んでないよ。今日の前にいるじゃん。」

「！？…雲…！…。」

「そうだよ。雲だよ。黒、会いたかったよ」二ゴシ

「…？…。」

「イヤアアアアアアアアアア…！…！…！」

「深紅…！」

屋上から黒は深紅を見た。

深紅の目の前には仮面をかぶった男が居た。

「姉様！…。」

「久しぶりだな。深紅。ほら、母さんにも挨拶しなさい。」

「！？…母様…。」

男の横から深香と同じ人型ロボットが出てきた。

「深香も元気か。そうか。」

「違う！嫌！やめる！やめる！やめる！」

「深紅、どうした？父親に会えて嬉しいか？」

「貴様などに会えて嬉しくなんかない！」

バチンッ！

「？！…。」

「口の聞き方をわきまえろと言つてゐるだらつ！」

深紅の父を名乗る男が深紅の頬を叩いた。

「…何しに来たんですか？…。」

「いや、深香を連れ戻しに來た。後深紅、お前もだ。」

「！？…嫌だ…。」

深紅はとても悲しい目をしていた。

「おいで、深紅。」

「！？…母様…。」

バタンッ

深紅はそのまま倒れてしまった。

「ほらね、深紅ちゃんも一緒に行くの。黒も一緒にいりつ」二口芝雲という少女は黒に手を差し伸べた。

「！？…俺は…。」

「黒、私とずっと一緒に居てくれるよね？」

「？！…。」

「……？」

白…。

黒の頭の中に浮かんだのは笑っている白だった。

ガタンッ！

「黒…」

「白…」

「…行ひへ、黒」

「…悪…白…」

「？…黒…」

黒は零と消えてしまった。

「黒…黒…」

36話 真紅の薔薇 前編（前書き）

深紅編から、始めます。　ｗｗ（過去編）

36話 真紅の薔薇 前編

私は、姉様が…世界で一人しか居ない…姉様が大好きだった…。
いつも、私を笑わってくれる。姉。
とても大好きだった。私の大切な人だった…。

世界で一番もつとも、私が信頼できる相手だった…。

「姉様！」ニコッ

「深紅、今日も元気だね。」ニコッ

「姉様！おそぼう！おそぼう！」ニコッ

「そうね。遊びましょう。」

「うん！」ニコッ

いつも二人で笑い合っていた。

いつも一人で花畠に行つて、遊んでいた。

ただ、ただ、その日々が楽しかった。

「姉様、どこ？姉様？」

そして、ある日。

不幸で絶望する日が来た。

私はまだ、知らなかつた。
私はただ築きもしなかつた。

「姉様！どこ？姉様？」

私は探した。姉様を。必死に。
不安と願いで頭がいっぱいだった。

ガタンッ！

「姉様？」

一つの扉を開けた。

真つ暗な部屋だった。

そして、いやなにおいがしみていた。

「おお？深紅か？どうしたんだ？寝ないのか？」

「父様…なんでここに？何をしているのですか？」

「深紅、見てなさい。お前の姉と母が命を欠けて、この私の実験に
参加してくれた。」

「！？…。」

父の目の前の台には深香が眠っていた。

「姉様！」

「深紅、静かにしなさい。これから実験なのだから。」

「いや！姉様！…。」

タツ！

深紅は深香の所に来る。

「深紅！来るな！」

バシッ！

深紅は頬を叩かれる。

「駄目！」

「深紅！やめなさい！」

深紅は父の手をつかんだ。

「姉様！いや！やめて！！！！」

「うるさい！もう、深紅を殺しない。」

「…？…」

父の後ろから、人型のロボットが出てきた。

「母様…。」

「深紅…。」

「姉様！…。」

深香の意識は朦朧としていた。

「一緒に……居てあげられなくて……」めんなさい…。

「…？…姉様！いや！死なないで！私を！私を！…。」
深紅の目から涙が溢れていた。

「私を…一人にしないで！…！」
ガタンッ！

「？！…。」

「渡さない…姉様はあんたなんかに渡さない…」

この時に、深紅は”ヴァンパイア”の血が覚醒した。

「殺してやる！お前を！」

「母！戦え。」

「死ぬ…殺す。」

深紅はそこら辺に落ちている刃物を手に取る。
そして、母に向かつて切りかかった。

そして一瞬。

「深紅…父様を消して、恨まないでください。」

「母様…。」

そして、人型ロボット《はは》は倒れた。

「殺す…。」

「やめろ…深紅！やめてくれ！」

「うるさい…お前は私が殺す！」

そして、深紅は父の左目を刺した。

父の左目からは大量の血が溢れ流れていった。
グサツ…！

「…？」

深紅の肩に刃物が刺された。

「はははは、深紅！お前は負けた！」

そして母は立ち、父を担いで、どこかに消えて行つた。

「…姉様…。」

バタンッ！

深紅はそのまま姉の隣で倒れて、眠つてしまつた。

パチッ

「…姉様…。」

「深紅。」

「！貴様！」

深紅の目の前には父の姿が。

「おいおい、まだ。お前を処刑するのにはまだ早い。」

「私が、貴様を処刑してやる！」

「出来るか？そんなガラクタのお前に。」

「許さない！お前だけは！」

』

37話 真紅の薔薇 後編

私の大好きだった姉様。

もう居ないの？ あんなに笑顔で笑っていた深香姉さんはもう。

「お前だけは許さない！」

「深紅、お前に出来るのか？」

力キンッ！

「母様…。」

「…。」

「邪魔をしないでください！」

深紅は母を吹き飛ばした。

「深紅。お前は哀れだ。」

「貴様を殺して、私は姉様を人間に戻す！」

「それは無理だ。あれはもう戻れない。」

「戻す！絶対戻れる！」

「そうか。ならやってみるがいい。」

「貴様を殺して、なつてやる！」

グサツ…！

「！？。」

「お前は負けたんだ。深紅。」

「貴様…。」

「私も、もう人型のロボットだ。」

「！？。」

深紅が刃物で刺された。

バタンッ！

深紅は倒れた。

「……私の……家族は……皆……口ボット？……」

「そうだ。お前だけが唯一のヴァンパイアの血を引く娘だ。」

「！？……」

深紅はとても悲しい顔をした。

「深紅、もう疲れただろう？……もつ、帰ってきなさい。」

「私は……帰らない。」

「そうか。それは残念だ。」

「グサツ！グサツ！」

「！？……」

深紅の背中を刃物が2発突き刺す。

深紅はそのまま、顔をあげはしなかった。

「お前は、ヴァンパイアだ。」

姉様……姉……。

ハツ！

「……ん？」

深紅は血だらけの体で立ち上がった。

「……。」

そして、深紅の髪が漆黒髪に真紅のような瞳に輝いた。

「……。」

深紅は背中から、刃を出した。

「これがヴァンパイアの落とした、娘。」

「……。」

「これが、ヴァンパイアの子の本心。」

「……。」

「……。」

「！？…」

一瞬にして、父の前から深紅の姿が無くなつた。

カキンッ！

「！？…」

一瞬にして、深紅は父の目に前に現れた。

母が父の前に立ち、深紅の刃と重なつてゐる。

「…邪魔だ。どけ。」

深紅は母を吹き飛ばした。

「！？…お前何をしてるか！分かつていてるのか！」

「…うるさい。」

深紅は父を躊躇なく刺した。

「！？…」

父はよろよろと倒れた。

「…。」

深紅は母を元に向かつた。

「待て…深紅…母さんだけは…殺さないで…くれ。」

「…。」

深紅は父の話を無視して、母に刃を振ろうとする。

「やめろ！深紅！」

バタンッ

ボタンッ

深紅の様子がおかしかつた。

「！？…」

深紅は刃を落とした。

「…なぜ？…」

深紅の目からは一粒一粒の涙が溢れていた。

「殺せない…私には…家族を…。」

グサッ！

「グアッ！」

「父様！」

深紅が振り向くと、一人の少年が父を刃で刺していた。

「君じや、王にはなれない。」

「…父様！貴様！何をする！」

「ヴァンパイアはいいな。」

「…。」

グサッ！

「！？…。」

一瞬にして、少年が深紅の目の前に来て、深紅を刺した。

バタンッ！

「君、結構良い匂いがする。君が王になればいい。」

少年は消えた。

姉様…もう会えない？寂しいな…姉様…。

『深紅…。』

「…姉様…。」

『大丈夫だよ。姉さんはここにいるよ』二コッ

「深香姉さん…。」

深紅はとても優しい顔で眠つた。

そうだ…あいつと出会ったのは…夏の朝。
太陽がまぶしきて、田がまともに開けれなかつた日。
そして、あいつに出会つた…。

”雪”と云つ少女に。

雪は、森から出てきた。白いワンピースに身を包んで、ドロドロナ
で俺の前に。

あいつは、笑っていた。

俺と出会つたときも、笑っていた。

向日葵のような微笑むで…。

「黒君、何で私のためにこんな夜でも来てくれるの?」

「別に…お前、いつもここに居ると想つたから。」

「いるよ。いつまでも。」

「??.」

雪と黒は川の側で座つていた。

「雪、俺の家で住まないか?」

「ううん。黒君の迷惑にはなりたくないの。だからいい。」

「そうか?お前、何かどんどんドロだらけになつてる。」

「あ…気にしないで、ちょっと遊んでるだけよ」二ノ瀬

「そうなのかな?ならいいけど…。」

「ほら、黒君。もつ帰らないといけないんじゃない?」

トント

雪は黒の背中をポンッと押した。

「…?..。」

黒には一瞬、寒気が漂つた。

なんだ今の?...。気持ち悪い?...

「じゃあねー黒君」二口ツ

「おひー...。」

雲は優しい笑顔で黒に手を振つた。
そのまま黒は、走つて家に帰つた。

俺は、予感がした

。

「じゃあ、母さん行つてくれる。」

「ちょっと待ちなさい。黒!」

「ん?何?」

「今、ちょっと奇妙な事件が勃発してるらしいのよ。」

「事件?...。」

「そう、周りの村、全ての村人が心臓だけを取りぬかれて死んで
いるって事件よ。」

「!?...。」

黒は少し分かっていたと半分恐怖心が合つた。

「気をつけてね。」

「分かつてるつて!」二口ツ

「そう。ならいいわ。明日から双子になる弟が来るのよ。楽しみに
していくね」二口ツ

「おう!弟か、楽しみだ!」二口ツ

黒は家を出た。

「雲ー。」

「ん？ 黒君？ どうかしたの？」

雲は焼き魚を食べていた。

「あつ…悪い、飯だつたか？」

「つうん。 大丈夫だよ」二コツ

「そうか？ なあお前やつぱり俺の家に来いー！」

「どうして？」

「今、奇妙な事件が勃発してるんだー！ 時期同じにもかいつが来るー。」

「大丈夫だよ。」

「えつ？」

雲は焼き魚を捨てて、立ち上がった。

なんだ？ … 雲がいつもと…違うー。

「その事件やつたの私だよ。」

「！？…。」

「心臓取つたら、死ぬかなつて思つてたら。あの恐怖心に沸いた顔
がたまんなくつてさ！」

殺しているうちにその恐怖心の顔が見たくなるんだ！

ああー黒君にも見せてやりたいなあーだけど、ここで死ぬから。
いつか。」

「？！…。」

「死んでくれる？」

「俺は…。」

雲は血だらけの刃物を手に持つていた。

「？…。」

俺は…生きるー弟の顔を見て、弟を守るつて…。

「黒君…私を守ってくれるよね？」

「？！……」

「ごめんね、黒君。」ニロツ
雲は田から涙を流していた。

「雲！……」

グサツ！グサツ！ググサツ！

「……失せろ。」

雲の体が剣が何本も刺さっていた。
バタンツ！

雲の体からは血が流れていた。

「……チツ。」

一瞬黒には黒い羽が生えていた。

「……。」「……。

雲はそのまま死んでしまった。

黒はやうして、田に出会った。

ぐるぐるめんなこーへへー！

「ジャリッ…。

「ん？…！？…。」

黒は口を覚ました。

手には鎖が繋がっていた。

「起きた？」

「？！…雲？！？」

「黒君、久々だね。こんなにかつゝよくなつて」「ニルシ

「…。」

「あつ！鎖、外すよ！ごめんね！忘れてたの。」

雲は慌てて、黒に繋いでいる鎖を外した。

「お前、何が目的だ？」

「目的？？。」

「何、考へている…」

「私は、ただ。黒君と一緒に居たいだけだよ」二ノツ

「！？…。」

違つ…」「こつは…あの口の雲…。

「黒君？」

「…お前、俺を殺せるか？」

「えつ？そんなの無理だよ！何で、私が黒君を？」

「嫌…言つてみただけだ。」

「……殺せる。」

「…？…。」

「だつても、ずっと黒君を殺したかったんだよ？」

「…雲…。」

「！」の口を待っていた！いつも待っていたんだ！はははははー。」「！？…。」

雲は落ちていた、刃物を手に取った。

「！？…。」

「黒君…死んでくれる？」

「？！…雲！」

俺はまた…大切な人を…殺すのか？…。

「黒君は、また私を殺すの？」

「！？…。」

「ははは…無理だよね？無理に決まってる。あなたの弟すつじくウザイよ？」

「白は関係ないだろー！」

「いやあー。黒君が私を殺した後。君にそつくりな男の子が来たんだよねえ～」

「？！…。」

何で白が！？…。

「あの子は、血だらけで一生、神にも天使にも魅入られない存在だよ。」

「！？…。」

「！？…白はそんなんじゃない！」

「あの子、私にこういったの…。」

【兄上に次、近づいたら。君殺すから。】

「白はそんな事言わない！」

「言つたんでしょう？あれば、もつ絶望の顔…だけど瞳はとても寂しい顔！」

あの顔たまんない…もつ1回みたいな。」

バキューーンッ！

「？！…。」

「来たね。」

「白…」

白は黒と雫の家部屋のドアの前に居た。

「あれれ？兄が名前呼んでるのに、返事もなし？」

「君、昔言つたよね？兄上に近づいたら殺すって？」

「白…。」

何で…あいつが雫を殺すんだ？…。

「知らないよ。だつて私は黒君より君に会いたかったんだもん」一
口ツ

「…？…白に？」

黒は顔を上げた。

「僕に会いたかったんだ。僕は会いたくなかった。」

バンツ！

「？！…。」

「雫…。」

バタンツ！

白は躊躇なく、雫を撃つた。

雫は倒れた。

「……。」

白は倒れている雫に銃を向ける。

「白一。」

黒は白の名前を呼んだ。

お前は……罪を背寄つちや 駄目なんだ……。

「あれ？ 私を殺すの？ 兄が呼んでるよ～聞かなくていいの？」

「……。」

「その哀れな、白いい！」

「…………！」

バンッ！

「白一…………！」

白は轟を撃つた。

「黒…大丈夫…？」
いつもの白だった。

「白…。」

雪は血を大量に流して、そのまま動かなかつた。

「…」ニコッ

ボタンツ

「黒…？…どうしたの…！？」
白は黒の顔を見て、焦つた。
黒の目からは涙が溢れていた。

「…黒…？」

「…悪い…。」グズツ

白は優しい…だから俺は…。

「う…ごめんな…白。」

俺は、それにすがつてるだけなんだよな…。

靈…『ごめんな…。

「ごめんな…白…。」

黒は泣いていた。

白の田の前で。

たつた一人の弟の田の前で。

「…黒」一ノッ

「…？」

一瞬黒には、白と誰かの顔が重なった。

「…雨眞魏…。」ボソッ

黒は白の頬に触れる。

「黒？？」

「会いたい…雨眞魏…。」

バタンッ

黒は氣を失つてしまつた。

「黒…。」

白は黒の頭を優しく撫でた。

「白ー黒ー飯だぞ！」

梓が呼んでいた。

「白ー行くぞ！」

「うん！」

黒と白は手を繋いだ。

「あー、白、黒ーおはよー」一ノッ

田の前には雨眞魏が居た。

「雨眞魏」！！！！

白は相変わらず、雨眞魏に抱きついた。

「黒、どうかしたの？」

雨眞魏が黒に問う。

「別に……なんでもない。」

「そつか」二口ツ

ドキッ！

「？……。」

黒は頬を赤く染めた。

「恋だな。」

「そうね。」一ヤリツ

「……。」

「恋なのね。」

「恋なの？？」

「お前らー後ろからいつせーー。」

別に……恋も悪くない……。

41話 鬼の血を引く者（前書き）

今回は緋那がメインです

41話 鬼の血を引く者

私は、人間が好きじやない。

私は、自分が憎い。

だつて……。

”鬼”の血を引く者だから

「……はあ……つまんないわ。何もかも。」

ベッドに寝転んでいる少女、緋那。

あまり、他人にも物にも興味をあまり示さない。

ガチャツ

「はあ……ん？」

「……何、してる？」

「凛。久しふりじやない？」

「……徹夜続^{シテ}きで寝てたな。」

「へえ……。」

緋那の目の前には凛が居た。

「あれ？ 凜ちゃんに、緋那ちゃん？？」

「雨眞魏。どうかしたのかしら？」

「ううん、何でも無いよ。ただ呼んでみたかっただけだよ」

「それ、洗濯物？？」

「えつ？……うん。」

雨眞魏は学園のみんなの洗濯物が入った巨大なかごを持っていた。

「……手伝^{ツタシ}い。」

「ありがとう、凛ちゃん」

「しないがな^イいわ。手伝^{ツタシ}うわ。」

「ありがとう。」

「……」

三人は屋上に行つた。
ガタンツ

「あれ？ 梓？」

屋上では、梓が寝ていた。

「ZZZZ」

「可愛い寝顔だね」ニコッ

「そうね。こんな顔だから、いじめちゃくなるわ。」ニヤリッ

「分かつたから、早く洗濯物干すぞ。」

「あつうん」ニコッ

「そうね。」

三人は洗濯物を干し始めた。

太陽の日差しが差し込んでくる。

「まぶしい…。」

緋那は座り込んだ。

「……闇の…空…光の…太陽…。」

小さな声で歌を歌い始めた。

「緋那ちゃん？？」

ハツ！

「？！ 何かしら？？」

「大丈夫？影で休んでもいいよ」ニコッ

「そう？分かつたわ。」

緋那は日陰に座り込んだ。

人間とよく似た、化け物…皆変わらないのになあ…。
緋那は少し寂しそうな顔をした。

バタッ！

「？？？」

緋那が顔を上げると、雨眞魏が座り込んでいた。

「雨眞魏！大丈夫？」

「ハア…緋那ちゃん？…ははは…大丈夫だよ」一ノ口シ

「全然、大丈夫じゃないでしょ？」

「はははは…。」

バタンシ

雨眞魏は倒れてしまった。

「軽い、熱中症だな。まあ、この頃太陽が出てきたからな。」

「そうね。」

パチツ

「…？緋那ちゃん？？」

「もう、雨眞魏は無理しそぎなんだから。」

「じめんね…」一ノ口シ

「もう、寝る。雨眞魏。」

黒鳥が横から言つ。

「うん…。」

雨眞魏はすぐ、眠りに付いた。

人は単純。だから、化け物も単純なのかもしれない…。

緋那は自分の部屋のベッドに寝転んだ。

「ははは…やつぱり…私は、自分嫌いね。」

42話 過ち

「緋那！」——「コシ

笑つてゐる。あの人があ。

「緋那！」——「コシ

凄く笑つてゐる。嬉しい。

「あれ？ 私寝てたのね。」

緋那は目を覚ます。

「はあ……。」

トンツトンツ
ガチャツ！

緋那の部屋のドアが開いた。

「おい、緋那。」

「何かしら？ 蒼弥？」

蒼弥が緋那の部屋に入つてくる。

「雨眞魏が……。」

「えつ？ ……。」

緋那は廊下を走つていた。

ガランツ！

「雨眞魏！」

「緋那……。」

梓が不安な顔で緋那の顔を見る。

雨眞魏はベッドで静かに寝ていた。

「雨眞魏……」

「ただの熱中症じゃ無かつた。」

「……呪マークの副作用だ。」

「黒鳥！？」

黒鳥が突然現れた。

「呪マーク？」

緋那がきょとんとした顔で黒鳥に聞く。

「呪マークは呪いのマーク。憎しみや恨みが心に貯まつた時、その呪マークが付く。

わしも付いている。」

「えっ？！……」

黒鳥が腕にある呪マークを見せる。

「白と深紅にも付いている。」

「？！……」

「副作用。一二三日安静にしていれば、すぐ元気になる。大丈夫だ。」

「そうか……ありがとうな。」「別に」二口ツ

君のせいかも知れないよ？……

ドクンツー！

「！？……。」

君が人間を嫌うから……。

「！？……違う……。」

君が仲間を拒んで裏切つて殺すんだ！……。

「違う！！」

「緋那？」

ハツ！

「あつ……」

「大丈夫か？顔色悪いぞ？」

「あつ……大丈夫よ。心配しないで。」

緋那は屋上に向かつた。

「……。」

緋那は日陰の所で立つていた。

「君のせいじやないよ？」

「！？……」

緋那の目の前に一人の少年が下りてきた。

「誰？……」

「君の大切な人を生き返らせてあげようか？」

「？！……」

「まあ、信じなくともいいんだけどね」ニコッ

「……何者なのかしら？」

緋那は少し動搖していた。

「鬼は、血を見れば、本来の力を解放すると聞いた。」

「！？……何を……」

「君の鬼の力が必要なんだ。僕と来てくれる？」

「無理だと言つたら、どうするのかしら？」

「それは、ちょっと困るな。」ニコッ

少年は指を口にあてた。

「！？……」

「血を見せて本来の力を取り戻してもらわないと。」

少年は自分の血を緋那に見せた。

ドクンッ！

？」

血：欲しい：人間：。

「違ひ……………」や一過が《あやめの》を繰り返すなんて出来ない。

細那は苦しんでいた。

ドクンッ！

絵用の書き方

「目覚めた。鬼の血が開放した！」

43話 雨と鬼

「鬼はやつぱり、いるないや。やつぱりヴァンパイアか。
じゃあね。化け物の鬼」——「」

少年は消えた

「维那！どうしたんだよ！お前？」

「うー！ 排卵！ うー！」

「お、」

梓は軽々しくよけるが。

やめて……やめて……逃げて……梓……。

「チツ！」

桙は空中で1回転して、綺麗に着地した。

「お、！排那！」

梓は繩那と呼ぶがまったく反応が無かつた。

まるで、本物の”鬼”のように。

“鬼” 我を忘れて、誰にもとらわれず、ただただ。人を殺す化け物…それ

「！？」

やめて…違う…私じゃない…違う…助けて…梓…逃げて…。

「緋那！」

梓は呼びかけるか

「ゴーリー」

梓が壁まで吹き

柱が壁まで吹き飛はされた

梓！いやだ！止まって！止まってよ。仲間が私の

「ハア、ハア、」

梓は立ち上がる。

鬼の威力があんなにあるのか？…これはヤバイな。

「ハア：緋那！」

グサツ！

ポタツ… ポタツ…。

「ハア… ハア… 緋那…。」

梓は斧が肩に刺さっていた。

梓…いや…いや…もうみたくないわ…。

ポタンッ

緋那の目から、涙が流れていた。

「緋那…お前のせいじや…無い…。」

「梓…。」

「大丈…。」

「梓！」

緋那は元の姿に戻った。

バタンッ

「…はは…かつこ悪いな…俺。」

「梓…ごめん…ごめんなさい…。」

緋那は涙を流した。

「うう…。」

「…大丈夫だつて…俺は…。」

梓は眠りに付いた。

「梓…ありがとう…。」

44話【番外編】PCのお友達（前書き）

久々の番外編です！

44話【番外編】PCのお友達

学園には、PC室パソコンがある。

その部屋に一人の男の子が来ていた。

ガラッ

ドアが開いた。

「今日も疲れたなあ…。」

その人はなんと白だった！？

「パソコン～」ニコツ

テキパキパソコンを動かしていく。

「あつ居た！」

白はパソコンでチャットをしていた。

そして、いつも話しているのが”雨”って人らしい。
ちなみに白のチャット名は”氷白”らしい。

氷白さんが入室しました。

雨【こんにちわ】

氷白【こんにちわ^ ^】

雨【今日は、何の話をしますか？？】

氷白【何でもいいですよ^ ^】

白は結構早くキーボードを打つ。

雨【じゃあ…氷白さんがどんな人ですか？？】

氷白【そうきますか？？w w】

雨【駄目でしたか！？】

氷白【別に構いませんよ^ ^】

雨【ありがとうございます^ ^】

氷白【ううへん…甘えん坊??】

白は自分の性格に自覚あるらじー。

雨【そなんですか??私の友達にもそんな人がいますよ^ ^】

「えつー??.」

白は思わず、声を上げてしまう。

氷白【そなんですか。どんな人なの?】

雨【甘えん坊だけど優しくて明るくて兄が大好きな人です^ ^】

「!??..

白はなぜか顔を真っ赤にさせる。

もしかして…僕の事??。

氷白【そなんだあ…www後何か特徴ありますか??】
雨【特徴ですか??…楽しい事が大好きな子ですよ^ ^】

「なつー??.

白は驚く。

絶対これ…僕だよね??。

氷白【その人のいいところはありますか??】

雨【仲間思いと兄思いな所が私、大好きですか??】

「……。」

「これ……絶対雨眞魏……はあ……。」

氷白【すみませんが、今日は落ちます。でわ。】

雨【はいへへでわ。】

氷白さんが退室しました。

雨さんが退室しました。

「はあ……。」「はあ……。」

由はアシを消して、部屋を後退した。

「ん?何か、喋った事あるような人だったなあ~まあ、いいか」
「コツ」

雨眞魏は結構鈍感らしい。

44話【番外編】PCのお友達（後書き）

活動報告にも気軽に口メしていく下さいね^ ^

45話 蒼の冷（前書き）

蒼弥編行きます！――！WW

45話 蒼の冷

俺は、ただ一人でいきてきた。

それだけが…俺の道だつたから…。

そんな事だけが俺に必要するから…。

「蒼弥！蒼弥！」

白は朝から蒼弥に付きまといっていた。

「なんだ？…。」

「おそぼうよー」この前みたいに…」

「今は忙しいと思つ…。」

「ブツー。」

「白、雨眞魏が呼んでるぞー。」

「雨眞魏が？？今行く！！！」

白は雨眞魏の元に行つた。

由には…悩みがなさそうだよな…。

「ドンッ！」

蒼弥が誰かにぶつかつた。

「あつ！蒼弥！」

「劉禰と…乃亜と澪か？…。」

蒼弥は劉禰とぶつかつた。

「大丈夫なの？劉禰？」

「大丈夫？蒼弥も？」

「大丈夫…だと思つが…。」

意外なメンバーが集まつた。

「何してたの？？」

「いろいろだとと思つ……。」

「何それ？？」

「劉禰。早くしないと雨眞魏に怒りられるのー。」

「そうだつたわね！ 雰！ 行こいつー。」

「あつ！ ちょっと劉禰！』

澪は劉禰と乃亜に引っ張られて雨眞魏の元に行つてしまつた。

「…。」

過去にとらわれるのも…俺は…馬鹿だな…。

タツタツ

「？？？」

「…。」

「…。」

「…。」

「ん？…あつ蒼弥！ どつした？？」

「どうしたんだ？ その肩…。」

「ああ… ちょっとな。」

「？？」

蒼弥はぽかんとした顔をした。

「そうだ…、お前も来い！」

「はあ？！ どこに？？」

「いいから！」

蒼弥は梓に手を引っ張られた。ガターンッ

きたのは、学園の教室だった。

「何で、教室なんだ？？」

「いいから！」

「…。」

ガランツ

「ん？ 梓と蒼弥君！」

雨眞魏は嬉しそうな顔をしていた。

「？？？」

蒼弥は何がなんだが意味が不明だつた。

「なんだ？ これは…。」

「雨眞魏が考えた学園の交流会。」

「……。」

蒼弥は黙り込んだ。

交流会…。

【化け物…】うちに来るな…】

【人間！ お前はどこかに死ね！】

「蒼弥君。 はい。」 —「コッ

雨眞魏がコップを渡す。

「…。」

蒼弥は黙り込んでいた。

「蒼弥君??」

パシッ！

パリンツ！

「！？…。」

蒼弥はコップをはじいて割つてしまつた。

「…俺は… そんな交流会なんか… しない…！」

「！？… 蒼弥君…。」

「うざい… そんな事して、俺が楽しく笑うとでも思つたの？…

あいにく… そんな事しないし…だから、いい加減。 やめてくれな

いか？

そんな幼稚みたいな事。」

蒼弥は教室から出て行つた。

「雨眞魏。大丈夫？？」

劉禰が雨眞魏に近づく。

「ははは…私やつぱり駄目だな…。」

雨眞魏はとても悲しい顔をしていた。

「……。」

ダツ！

「！？…白？！」

白が蒼弥を追つた。

「……。」

屋上で空を見ていた蒼弥。

バキューーンッ！！

「？！…。」

後ろから誰かが銃を弾を撃つてきた。

蒼弥はとっさに後ろを向いた。

「白！？…。」

「…蒼弥、遊ばない？僕と…。」一ヤツ

いつもの白じやない…。

46話 哀れな苦痛

バンツバンツ！

「おい！白！…。」

「…ねえ、よけるだけじゃ面白くない！」

「白！？…。」

白は躊躇もなく蒼弥に向かつて弾を撃つ。

蒼弥は軽々しくよける。

「！？…。」

蒼弥の目の前に白が消えた。

ガツ！

「ガハツ！』

白は蒼弥の目の前に来て、腹を思いつきり蹴った。

「白…。」

「僕は…雨眞魏を傷つける奴が嫌いなんだよね。」

白は不気味に微笑んでいた。

「…ハア…ハア…。」

どうするか…こんな白俺が止めれるのか？…。

ズキッ！

「！？…。」

蒼弥の様子がおかしかった。

俺は…優しくされただけなのに…俺は…人に八つ当たりしただけか
？…。

「……蒼弥ーおそぼつー。」

「……。」

今、一番考える事は、白だよな……。

バンツバンツ！

「チツ……。」

蒼弥は軽々しくよける。

「見切つた……。」

白が蒼弥を蹴るが。

「……。」

蒼弥はよける。

ガランツ！

屋上のドアが開いた。

「！？蒼弥君！白！」

雨眞魏が様子を見に来ていた。

「雨眞魏！危ない！」

「えつ！？梓！」

カタツ！バンツ！

白の弾が雨眞魏方面に跳ね返ってくる。
梓が雨眞魏を助ける。

「……白。」

「雨眞魏。危ないから。ここで待ってる。俺が行くー。」

「あつ！？梓！？」

梓が蒼弥と白の元に向かった。

「……。」

雨眞魏は不安な顔で梓の背中を見ていた。

! ? : .

「雨眞魏の気持ちも知らないで！雨眞魏に謝れ！」

「……俺が……悪が……か……と思……てる……」

卷之三

梓が蒼弥と白向かつて叫ぶ。

「お前は黙つてろ！！！！！」

卷之三

「う前二兩眞愧の憂」アマニシテ

「分かるわけが無いだろう！：俺なんかに！」

「…いし加洞！逃げるのやめないと！」

「いい加減に……しろ！……！」

ドカーンッ！

蒼弥と白か吹き飛はされた

卷之三

「いい加減にしろ！お前らがガキ以下か！ああ！。」

瞬彗は蒼弥と白に怒る。

蒼弥は暗い顔をする。

蒼弥と白が吹き飛ばされた。

「お前に…何が分かるんだよ…。」

「はあ？」

蒼弥は立ち上がりつた。

「お前に何が分かるんだよーろくに差別も何も受けた事無いお前に
！俺の何が…。」

「……分かるか。お前の気持ちなんか俺に。」

「！？…。」

「誰にだつてな！過去を背負つて生きてるんだよーお前だけが辛く
て悲しい思いしてるんじゃない！」

皆一同じくらい辛いんだよーーーー！分かれよボケ！」

「？！…。」

瞬彗は蒼弥の目の前に来た。

「俺は…一生償えない過ちを犯した事がある…。」ボソッ

「えつ？…。」

「お前は一人じゃないんだぞ。蒼弥。何でもかんでも一人で抱え込
むな。」

「分かつたか？？」

「…分かつた…。」

「…よかつたな。」

俺には仲間がいるんだな…。

俺は、ヴァンパイアと人間の血を引くからと言って、差別を受けていた。

人間にもヴァンパイアにも認めてもらえないなかつた。
必要とも、してくれなかつた。

だから、今まで一人で生きてきた。

誰にも頼らずに。ただ一人で。

誰にも認めてもらえないなら、一人で生きていくしかなかつた。
人間の血を引くからと言って、ヴァンパイアには拒絶され。
ヴァンパイアの血を引くからと言って、人間には怯えられた。
それがいやで、何もかも一人でやつてきた。

「化け物！ 化け物！ お前なんか、死ねばいい！」

「近づいてくるな！ この汚れた人間め！」

ずっと、一人だつた。

寂しいなんて思ったことも無かつた。

泣いた事も無かつた。

ただ、必死だつた。自分の事で。

誰にも関わらず。誰にも頼らないで一人で生きてきた。

そして、一枚のチラシを見た。

”化け物学園帝国”のチラシ。俺はこうして、転入した。

そして、仲間も出来た。

嬉しかつた。

「……。」

蒼弥は少し怪我をしていた。

「蒼弥君。」

「雨眞魏……。」

「傷、大丈夫？」

「あつ……うん。」

「よかつた。」――「ツ

「……雨眞魏……あのつ……。」

「ごめんね。」

「えつ？」

雨眞魏は突然謝った。

「これからも、一緒に頑張りうね」――「ツ

「??…どういう意味だ??…。」

「だから……蒼弥君は一人じゃなーって意味だよー」――「ツ

「!??」

「雨眞魏ー、ちよつと。」

「あつーうん今行くー」――「ツ

雨眞魏は梓に呼ばれ、去つて行つた。

「……参つたな……。」

一人じゃないか……それもそうかも知れないな……。

「ありがとう……。雨眞魏。」

47話 聰明（後書き）

次回から、新章編！！！

48話 嵐の予感

俺は……なんで、一人じゃないんだ？。
何で、俺は今。誰かといふんだ……？。

俺は……償えないくらいの……事をしたのに……。

バキューンッ！……！
バタンッ！

「雨眞魏。」「めんね。だけど僕は君を殺しに来たんじゃない。」

梓は驚いて、起きる。
ハツ！
「…………。」

雨眞魏！？。

ガチャツ！
「あつ、梓。おはよー。」
「梓……。」
「どうした？そんなに慌てて……。」
「変ね。」
「大丈夫？？」
「雨眞魏は……。」
ガラツ
「どうかしたの？梓？」

「雨眞魏がどうかしたの？」

「あつ……いや。なんでもない。」

「??」

雨眞魏は台所から出てきた。

お前のせいで、雨眞魏は全て失った。

「！？…。」

「梓？」

雨眞魏は梓に近づく。

「…！？。」

「梓？～どうかしたの？」

「殺意の色…。」

「えつ？…。」

梓は何かをつぶやいた。

「悪い…雨眞魏。」

「あつ…梓！」

梓はどこかに去ってしまった。

「なんだつたんだろう？」

「…私のせいなのかな？…。」ボソッ

雨眞魏はとても寂しい顔をしていた。

「うわあー…砂時計が壊れたあああ！！」

一人の少女が、真っ暗な部屋の中で叫んでいた。

「うつさい！」

もう一人の少女が一人の少女は軽く殴る。

「酷いなあ～…ねえ、殺意の色つて何？？」

「殺したいほど、憎いんだらうね。」

「..

「そんなものなの？？」

「あたしが知るわけ無いだろ？が！」

「それもそーか。」

「人の少女はなんとなく納得した。

「そろそろ、遊びに行つていい？」

「いいよ。行こう。」

「」

その頃梓は屋上に居た。

「殺意の色…。」

梓は空を見上げていた。

「空には色が無い…。」

「空には、色が無いんだあ～」

「?!…。」

梓の顔に少女の顔が急に出てきた。

「ねえー殺^{さつ}。こいつでいいんだっけ？」

「ああ…そいつでいいと思うぞ。」

「お前ら誰だ！」

「ねえー名前は？」

「幸杜^{さち}：梓^{さくら}。」

「僕は、死^し。」

「あたしは、殺^{せつ}。」

梓は武器を構える。

「お前、戦えるの？」

「！？…。」

「無理に決まっている。」

「チツ…俺にだって！」

梓は酷く動搖していた。

「無理だな。あたし達は殺せないし倒させない。」

「……なんで、お前等が俺と兩眞魏の事知ってるんだよ。」

「……知ってるよ。何でも。」——口芝

ガタンツ！

「梓！」

雨真魏が屋上に来た。

「十二、一、四、三、五、七、九、」

死ま、
銃を取り出す。

「殺、やつていいく？」

「勝手にしろ。」

お、シテ

「梓！？」

卷之三

۰

雨眞魏が銃の弾で撃たれた。

俺は……何も守れない……。

データンツ！

「雨真魏！……！」

目の前の奴一人…守れない…。

49話 死に掛けのヴァンパイア（前書き）

雨眞魏メインかも　ｗｗ

49話 死に掛けのヴァンパイア

「おー！ 雨眞魏！」

雨眞魏は動かなかつた。

「ヴァンパイアと死神の力もこんなものかあ！」
死は銃をなおそうとする。

「雨眞魏！ 雨眞魏！ 起きろ！ 雨眞魏！」

「誰？ 泣いてる？」

「梓… 泣かないでよ… お願い。 梓… 泣かないで…。」

「…赤…色…。」

「血の色か？」

「怒りの色…。」

「ボソッ

雨眞魏が立ち上がつた。

「雨眞魏？！」

梓は驚いていた。

「…。」

雨眞魏は一言も喋らなかつた。

「久々だな。 お前らは俺が殺してやるー。」

「瞬彗！？」

雨眞魏の人格ではなく、瞬彗の人格だった。

瞬彗は刀を構えた。

「ははは。 僕に勝てると思つてゐるお前。 地獄見てみろー。 はははは
！」

死は銃を瞬彗に向けた。

「梓…。」

「瞬彗？」

「…皆を連れて、逃げる。」

「！？…な、何言って！」

「俺の力じや、あいつには勝てないんだ。」

「？！…瞬…。」

「俺が死んだら、お前の封印も解ける…雨眞魏も承知の上だ！」

「！？…俺は…。」

梓は何かがいいたげだったが。

「あんずるな。俺は、貴様らのために死んでやると誓つていい。だから行け！」

「！？…瞬彗…ごめん！』

梓は屋上のドアから下に下りた。

「いいの？」

「構わないが、目の前の敵は殺せ。」

「了解だよお～！」

ダンッダンッダンッ！！！！！

「チツ…。」

死の弾は何発も撃つてくる。
それによける瞬彗。

梓は指示をしていた。

「全員、外に逃げろ！」
「えつ？どうしたの急に？」
「いいから早く…」
「分かつた…。」
「梓は指示をしていた。

指示と半分不安と絶望に覆われていた。

バンッ！

雨眞魏…瞬彗…。

「クツ！？。」

瞬彗の腕が弾にかすつただけなのに腕から大量の血が流れる。

「僕の弾は特集なんだよだから、すぐ死ぬ。ちゃんと交わさないと。」

「チツ！？。」

バンッバンッ！

「さあ！踊れよ！……さあ！」

死は二本の銃を使いこなしていた。

「チツ！？。」

瞬彗はよけていた。

血をたらしながら。

「貰つた！」

「？！…ガハツ！？」

ドカーンッ！

瞬彗は死に腹を思いつきり蹴られた。

「弱いなあ～ヴァンパイアってこんなものなの？」

「おい…。」

「？？。」

瞬彗は立ちながら何かをつぶやいた。

「俺の血は、殺し屋の血だ！よく覚えておけ！」

「そつか。なら殺さないと。」

バンッバンッバンッ！！！！

「！？…ゲホツ！」

瞬彗はもう動く力もなかつた。

まともに、死の銃の弾を受けた。
大量の血を吐いた。

バタンッ

瞬彗が倒れた。

「あれ？死んだ？」

「さつさと、とどめを差せ。」「了解。」

俺は……死ぬのか？……雨眞魏……悪い……。

「じゃあ、サイナラ。」

バキューーンッ！

49話 死に掛けのヴァンパイア（後書き）

一日2話書くと思います。

（これからww）

気分で3話くらい書きますww 気分次第ww

50話 最後の願い

「ごめんね……梓。」

「ヴァンパイアは皆こうなの？？」

「違うな。一重人格のヴァンパイアだが、人格同士。違う血を引くのだな。」

「……？意味不明。」

「お前知らなくて十分だ。」

「う……。」

瞬彗はまだ立ち上がりっていた。

「何？、まだ立つの？」

死を瞬彗の銃を向ける。

「ハア……ハア……。」

「遺言でも残す？それとも、仲間に伝えるか？」

「なんだ……と？」

グツ！

「！？……。」

死は瞬彗の髪を引っ張つて、屋上の手すりに顔をぶつけた。

「グツ！」

「おい！そここの雑魚共！よく聞け！」

死は梓達を呼んだ。

「えつ？」

「瞬彗？！」

梓達は、屋上の方を振り返る。

「！？志木！許さない！志木！」

「やめろー白ー！」

「！」

黒が白を抑える。

「黒！離せ！志木が！雨眞魏が！」

「頼む！白！」

黒はとても悲しい声で白に言つた。

「全員……聞け……ハア。」

「志木！」

瞬彗の体はボロボロ。

頭からは血が出ていた。

大量の血を流して、もう体力も残っていなかつた。

「……咄……。」

「雨眞魏……。」

ポタッ

雨眞魏の目からは涙が零れ落ちていた。

「……。」

梓はずつと下を向いていた。

俺は……また……。

「幸せに……平和に……生きてね……私の分まで……。」

俺はまた！…大切な奴一人守れないのかよ！

「…今まで…ありがとう…サヨナラ。」二二四

バキューーンッ！

死は雨眞魏の頭を正面から撃つた。

バタンッ

雨眞魏はそのまま倒れてしまった。

「雨眞魏…………！」

ドクンッ！

「なんだ？」

「梓……。」

「憎しみで我を失うな。」

黒鳥が白の隣につぶやいた。

俺は…守りたかった…！大事な人を！あいつを…。

ドカーンッ！！！！

「！？…。」

殺の隣に居た死が誰かに吹き飛ばされた。

「あれ？…何？…もう本気になつた？」

死は口から大量の血を吐いて不気味に微笑んだ。

「…やっぱり。梓はそっちの方がいいのになあ～」ニヤリッ

梓の目は真っ赤な瞳で光っていた。

「やっぱり野獸の梓は僕は惚れるよ。」ニコッ

「……。」

梓は血だらけの瞬彗を抱きかかえて、学園の階を連れて姿を消した。

「逃げちやつたか。」

「…退くぞ。少し遊びすぎたからな。」

「了解」ニコニコ

「瞬彗ー」

瞬彗は息をするのがやっとの状態だった。

「志木ー雨真魏ー！」

「白ー」

呪マークが反応しないだと…おかしい。

黒鳥は何かを考えていた。

「優櫻ーどーーー！」

一人の少女の声がした。

「！？…。」

学園の階は冷や汗が流れていた。

「主。誰か居ます。」

「誰よ？」

チャキッ！

「！？…。」

白は少女に銃を向けた。

「白ー」

「あつ……えつと……。」

少女は焦る。

「……？……怪我してゐる……。」

「……？……。」

「……あの子。後30分もたたないうちに死ぬよ。」

「……？……。」

全員が驚愕した。

「渚つち！ 優楓いた？？あと翔つちも！ 」

「いよい！」

後ろからは双子の少年が出てきた。

「ん？ ……こりや。酷いね。留灯！」

「…………はいはい。」

双子が瞬彗の所で何かを始めた。

そしてなぜか、瞬彗の傷が治つて行つた。

「！？ 瞬彗！」

「おい……お前等何してんだよ。」

そして、最後に一人の少年が出てきた。

51話 ヴァンパイア少年少女（前書き）

キャラが増えてきましたね　ｗｗ
まあ、お気になさり。

5-1話 ヴァンパイア少年少女

「優榎！？」

少女は頬を赤く染めた。

「どうしたんですか？主？顔が赤いです。」

「な、何でもない…別に…。」

「…誰？」

少年はぽかんとした顔で梓の顔を見る。

「？？？」

「…狼と天使か。」

「！？」

「俺は、河森優榎。
かわもりゆうが

優榎が梓の顔を見て。自分の名前を名乗る。

「…俺は幸杜梓。」

梓もつられて、名乗る。

「つて…翔は？」

「優榎と一緒にじゃないの？」

「はぐれた。」

「じゃあ、優榎は僕の物だあ！」

小さい少女（？）が優榎に抱きつくる。

「留香。俺に抱きつくな。

「あつ…そーだ。僕は青ノ国留香男だらかね」
あおのくにむか
—コツ

「…青ノ国留灯。」

双子が名前を名乗った。

「…これが噂のヴァンパイアなんだ。」

「！？…」

帽子をかぶった道化師みたいな少女が眠っている瞬髪をじっと見て
いた。

「お前、誰だ！」

「君は弱い。」

「えつ？…。」

梓に少女は言った。

「君が弱いから。この子が死にそうになるんだよ。
それで、大切な人が守れると思う？」

「？！…。」

少女は梓にズバッと言つた。

俺が…弱いから…。

「君。封印魔法があるね。」

「！？…。」

少女は梓の事に築いていた。

「何？封印つて！？」

「私達そんなの聞いてないわ。」

「そうだな。」

皆が言つ。

「……。」

「梓だけ？あなた、この雨眞魏つて女の子にもう一生戦えないよう、魔力の封印魔法を

かけられてるんだよ。だから、梓は何も出来ない化け物つて感じ
だね。」

「……。」

「図星だ。」

梓は黙り込んでしまう。

「で、貴様等。どこから来た。ヴァンパイアと言つても
ヴァンパイアの殺気が違う。」

「…主。どうします？片付けますか？」

「駄目。優榎がどうにかしてくれる。」

少女達はコソコソ話していた。

「あなたの名前は何て言ひの?。」

乃亜が少女達に聞く。

「私は、日向渚。よろしくね」二口ツ

「私は、主に仕える者。ララです。以後お見知りおきを。」

少女達が名前を名乗る。

「で、どうから来たんだ?わしはそんなところしか興味ない。」
黒鳥は鋭い目つきで優榎達を見る。

「…この世界に存在しない世界つて言つたら、分かる?」「

「信じる。だがどこ?」

「異世界とでも言えばいいのかな?」二口ツ

「へえ…で、名は?」

「春風。」二口ツ

「そうか。

黒鳥と春風は案外似たもの同士。

「で…瞬彗は生きてるのか!…?」

「…生きてる。」

優榎が無表情で語つ。

「生きてる。留香の魔法は最強だから…。」

ガサツ

「ん?…。」

「優榎。」

「翔!…。」

「翔さん!…。」

後ろから一人の男の人があくびに抱きついた。

パチツ

瞬彗が目を覚ました。

「あつ起きたー！」

「瞬彗ー！」

「…田の前のものを受け入れられる?」ボソッ

「?ー?ー。」

春風は梓の耳元で囁いた。

瞬彗は座った。

「大丈夫か? 瞬彗?」

梓が心配そうな顔をする。

雨眞魏? ? ?。

雨眞魏が顔をあげると…。

「ー?ー。」

右は真っ赤な瞳、左は漆黒のよつて真っ黒な瞳に変わっていた。
そして、笑つても居なかつた。
ずっと無表情のままだつた。

「雨眞魏? ? ?。」

「えつ? ? ?。」

「あなたは…誰ですか? ? ?。」

52話 無くした記憶

「雨眞魏！俺が分からぬのか？」

梓は雨眞魏に聞く。

「…私は…あなたを知りません。」

雨眞魏はとても冷たい目をして梓に行つた。

「雨眞魏！」

「記憶を見事に割つた。」

優榎が横から言った。

「はあ？」

「あの女一人。見事に銃で記憶の欠片を割つたな。」

「…？」

梓は驚いていた。

俺は…雨眞魏…。

「…あなたは…私を知つてゐるんですね。」

「…？…雨眞魏…。」

「…？」

「…」めんな…。」

梓は下を向いて雨眞魏に謝つた。

「気にしてません。」

「雨眞魏！私の事覚えてる？」

劉禰が雨眞魏の前に出る。

「…分かりません。」

雨眞魏は無表情で言った。

「渚。」

「何？！優榎？」

「…ララと一緒に辺りを見てきてくれないか？」

「あつ！うん！ララ行こう！」

「はい。」

渚とララは消えてしまった。

「記憶喪失。これは結構記憶消えたね。」

「……。」

「見つけた！」

「！？…。」

「！？…。」

梓達の後ろには死と殺が居た。

「お前ら！？」

「居たね。雨眞魏まだ生きてたんだあ～」

「雨眞魏。大丈夫だ！お前はここに…。」

梓が言うが。

雨眞魏は立ち上がった。

「雨眞魏？」

「…守るという気持ちに変わりは無いです。」

「？！…。」

雨眞魏は死を目掛けて走つて行った。

「雨眞魏！」

「ははは、死んじゃえ！…！」

バンッバンッ！

「はあ…この世界の奴はいろいろ鬱陶しい。」

「優柔！危ない！」

「…。」

銃の弾が所々に跳ね返る。

「留香。」

カキンッ！

留灯は刀で銃の弾を半分に斬つた。

「留灯！」

「大丈夫か？。」

「留灯！」

「大丈夫か？。」

「うんー」——「」

「雨眞魏ー！」

「はははは、瞬彗よりも強いね。」

「…志木を馬鹿にするのは許さないー！」

「ははははははー！」

「ドカンッ！ーーー！」

雨眞魏は死の背中をかかと落としました。

「……。」

「はははは、僕は死ないーーー！」

「ーーー。」

雨眞魏は下から撃つて来る銃の弾をよける。

「雨眞魏ー！」

梓が呼んでいるが、雨眞魏は反応が無かつた。

瞬彗…。

「梓、戦えば？」

「えつ？」

白が梓に向かつて言つ。

「今の雨眞魏の魔法は弱まつてゐる。梓でも壊せるよ。」

「！？…白。」

「大丈夫だつて！」

梓は立ち上がつた。

「白…。」「ん？」

「俺がもしも…暴走したら、殺してくれ。」

「！？……。」

白は驚愕しながら梓の方を見た。

「梓！…。」

白には一瞬、梓の周りに天使の羽ではなく、漆黒の悪魔の羽が見えた。

梓…雨眞魏…大丈夫だよね？…。

53話 暴走狼

俺は……あの日から。逃げてきた。

何もかもから…守りたいと思つたけど…。

内心はとても怖くて臆病だつた…。

俺は変わる。そう決めた！

だから…何もかも変えると決めたのに…。

「…狼いー。」

死は梓をおちよくなつた。

「……。」

「…とつとと死ねばいいのに！！！」

「俺は…死なない。」

「うつせ！！！」

「お前がうつせ！！！」

梓は死が撃つ銃の弾を跳ね返した。

そして、その弾は死の肩をぶち抜いた。

「？！…なつ！」

「死！」

「殺…。」

「チッ…。」

死と殺は消えた。

「梓！…ヤツター！…」
「近づくな！…！」

優櫻が後ろから白に言った。

「えつ？…。」

バシッ！

白は梓に吹き飛ばされた。

「ガハツ！！！」

「白！」

白はたつたの一発なのに、体は血まみれ。何もかもがボロボロになつた。

「白！」

黒が白に駆けつける。

「何が起こってるの？！」

「渚！」

「えつ？…。」

梓が渚に襲い掛かる。

「主は私が守ります！」

「ララ！」

グサツ！

「！？…。」

「ララ！…！」

ララが梓に素手で刺された。

ドクンッ！

「？！…ゲホツ！…！」

「渚！」

渚は大量の血を吐いた。

「ちょっと！…どうしたの？？大丈夫？」

劉禰が駆け寄る。

「私達のいる…世界は、ヴァンパイアとヴァンパイアで契約をします。」

「…そして、契約すれば…。」

バタンッ

渚は倒れた。

גָּמְעַן - גָּמְעַן

「契約すれば：一心同体。」

「えつ？」

「…契約者が死なないように守るヴァンパイアが傷を負えば、契約者も傷を負うって事よ。」

春風が平然と言つた。

「つて梓！田を見ましなさいよ！！！」

「…本来の力を取り戻して、意思が飲み込まれている。」

そんなん!

「梓の懐かしい名前。」
一 ボソッ

俺は…また、殺すんだな。
自分自身の意思ではない。
俺は…また臆病になつた。
皆から恨まれる。

それでももういいと思った。
だから、…ま、うー。

「梓！」

雨真魏

「めんな……守れなくて……。」

梓が白に目掛けて走つてくれる。

「黒は俺が……？！」

「……大丈夫だよ……黒」「コッ

「雨眞魏……。」

黒と白の田の前には雨眞魏がたつた。

「梓……めんな……。」

グサツ……！……！……！

！？……雨眞魏……。

「雨眞魏……！……！……！」

血が木に飛び散つた。

54話 泣いた狼

雨真魏は倒れた。

とても血を流して

「？」

雨眞魏は動かなかつた。

ただ、血を大量に流して、倒れていただけだった。

雨真魏：俺は……。

「梓！」

守るって…言つたのに！約束したはずなのに…俺は…

「渚。大丈夫か？」

優檮

一
はしゆ
七

「あの、雨鳳で言う子。結構やる子だね」

「優櫻。あの子。魔力の量が半端ないよ。

「 なあ なーまー!」

「はあ、はいはい!」

優楓はあいまいな返事をした。

「雨眞魏！雨眞魏！……？！」

「凄い出血だ。俺が治療する。」

蒼弥が雨眞魏の治療をする。

「梓！……何してんのよ！返してよ！……！」

劉禰が涙を流して、梓に言ひつ。

「！？……」

「？！……」

「あなたは、雨眞魏を守るんじゃなかつたの！……ねえ！梓！
嘘ついたの！……本当は大切な人を傷つけるのが好きなの！？
ねえ！梓！ちゃんと応えてよ！……」

劉禰は怒っている半分悲しんでいた。

梓は狼の姿から人間の姿に戻つた。

「俺は……違う……俺は！……雨眞魏が守りたかった！
だけど……俺……は。」

「過去に縛られてるのは分かるけど……自分で自身で自分を変えなさい
よ！……」

「！？……」

劉禰は座り込んだ。

タツ……。

「おい！……雨眞魏！……」

「！？……雨眞魏……。」

雨眞魏は血だらけのまま、梓の前に來た。

「梓……。」

「雨眞魏…。」

「…大丈夫だよ…梓は悪くない…悪くないよ…。」

「雨眞魏…俺は…。」

「変わつてるよ…梓は…とても変われてるよ…。」――口

「…?…雨眞魏…。」

梓はとても不安な顔をした。

「雨眞魏…。」

「梓…ありがと…。」

「雨眞魏…ごめん。」

ボタンツ

「…梓の泣き顔…初めて見たよ…。」

「雨眞魏…ごめんな…。」

梓はそのまま、雨眞魏を抱きしめた。

雨眞魏は優しい顔で微笑んでいた。

傷は治つて行つた。

55話 BLOOD(献血)

黒鳥メインーーー！

わしの田指すものは何一つない。

何もかもを捨てて。

何にもとらわれず。

ただ、一人で生きてきた。

誰も必要してくれないのなら、死んだ方よかつた。

だけど……そんな事できなかつた。

わしには……遣り残してることが合つたから……。

パチッ

黒鳥が田を覚める。

「……。」

黒鳥はボーンとしていた。

何もかも……殺せば何も感じなくなるのか?……。
わしにはそんな事……できるのか?……。

「はあ~? ……。」

黒鳥はため息を吹いた。

「…絵本を持ってきていたな。」

机に置いていた絵本を黒鳥は手に取った。

「わしは、この話がとても好きだ。」

「そうなの？」

兎が出てきた。

「そうだ。この絵本はわしの理想だ。」

「ふ〜ん…読んで。」

「おう！」二コツ

黒鳥は本を開いた。

昔、黒い鴉の伝説があつた。

その黒い鴉とは…。

人々を恐怖に苦しめ、地獄に送った者の事。

人は何かに支えてもらえなければ、生きてはいけない。だが、その黒い鴉は…たつた一人で生きてきたという。

他人を捨て、両親を殺し。

何もかもを失つた。

そうして、感情がなく、感覚も無くなつた。

何もかもを失つてしまつたから。

誰もはその黒い鴉に恐怖した。

自分自身の何もかもを失つてしまつからだつた。

目の前に居た者を即座に殺した。

そして…長い年月が経ち、その黒い鴉は消えた。

バサツ！

黒鳥は続きの途中に絵本を落とした。

「黒鳥？」

バタンツ！

黒鳥は倒れてしまつた。

「…？ 黒鳥！…！」

意識が遠くなつていつた。

この絵本を……家の本棚から見つけたとき……。

わしは、これに憧れた。

とても……とても……。

だから……皆殺した……。

56話　闇夢

” ありがとウ ” … ” サヨナラ ” … 。

なんて言葉..誰に言えばいい?

何でそんな事言わないといけない?

なぜ..わしは” 犯罪 ” を犯した?

絵本に憧れたから..。

それだけの理由..。

【ウハハハハハハハハハハハツ！死ね！お前ら死ねばいい！ハハハハ
ハハハツ！！！】

5歳で絵本の物語に憧れて、両親から殺し始め。

そして..なぜか、殺すのが楽しくなった。

だから..殺した。

町の中の人間を全員。

楽しく笑いながら。

だけど..泣いていた。

笑いながら泣いていた。

止まらない涙だった。

【わしは犯罪者になる…なつてやる…！…殺してやる…！】

町は燃え。人間は血だらけのまま、わしの故郷は消えた。

【ハハハハ…楽しい…。】

【そうか、楽しいか？】

【誰だ？わしに殺されたいのか？】

【お前は、人魚か？】

【…はははは、何でもかんでも…わしの血が欲しいのだな。】

【お前がここで死のうが俺には関係ないが、俺はお前が気に入った。】

【…勝手にしろ。】

【名は？俺は…迷。^{まい}】

【…わしの名前はない…。】

【なら…今日からお前の名前は、
黒鋼黒鳥くろがねがらすだ…】

【…ふん…氣に入った。】

懐かしい…記憶の欠片か…。

パチッ

黒鳥が目を覚めた。

「黒鳥！大丈夫か？」

「あつ…黒?」

目が覚めたら、黒が居た。

「どうして?…。」

「兎が黒鳥が倒れたって、俺に行つてきて。」

「そうか…悪かつた…。」

「なんだ?この本?」

「わしの…大切な本だ。」

「ふうん…。」

黒鳥は少し暗い顔をした。

「お前…変わったな。」

「はあ?…!」

「何か、来た時よりも、何か顔が楽しそうな感じだぜ」ニコニ

「なつ!…?…そ、そんな事はない…。」

黒鳥は顔を真っ赤に染めた。

「まあ、いいけど。後でおかゆ思つてきてやるから、ちやんと寝て
ろよ。」

「わ、分かつてる!…!…!」

「本当に…お前は変わらないかも知れないな。」ボソッ

「えつ?…。」

黒は部屋から出て行つた。

ドクンシ…

「!…?…。」

黒鳥の様子がおかしかつた。

「あつ!…ぐう…うう…ウワアアアアアアアアアアアア…!…!…!…!

!…」

57話 呪マークの悲劇

黒鳥の首から、何かの模様が広がっていた。

「…呪マーク…うう…！」

黒鳥は苦痛に耐えていた。

戻りたくない…いやだ…。

「ああ！…！…ウワアアアアアアアアア…！」

ガチャツ！

「黒鳥！」

黒は急いで、黒鳥の部屋に戻るが…。

「黒鳥？…。」

部屋からは黒鳥の姿はなかつた。

「…？…血…？」

黒鳥の部屋のベッドには血が一粒落ちていた。

「黒鳥！…！」

黒は急いで、黒鳥を追つた。

「ハア…ハア…戻りたくない…ハア…うう…！」

黒鳥は森に潜んでいた。

「グツ！…いやだ…やめろ！…。」

黒鳥は木にもたれて、座つた。

「…いやだ…。」

意識が遠のいてくる。

「……黒……夜……様……。」

黒鳥の田からは一粒の涙がこぼれたと同時に、
黒鳥は静かに目を閉じた。

「黑夜様！」——コラ

「今日も元気だな、黒鳥」——コラ

あなたの優しい笑った顔が好きだった。

あなたと一緒に居るだけで嬉しかった。

だから……わしはあなたに……。

「黒鳥——！」

誰かが黒鳥の名前を呼んでいた。

「黒鳥！大丈夫か？」

「……。」

黒鳥はただ、田をつぶつぶて黙っていた。

「おーーー黒鳥ー！」

「……黒……今まで……ありがとう……。」

「えつ？」

黒鳥は小さな声でつぶやいた。

「おい！黒鳥！」

「……わしは……。」

「おい！大丈夫だよな！お前は皆の仲間だ！」

だから…生きてくれよ…

黒は黒鳥を抱ぐ。

「…わしは…嬉しかつた…。」

「えつ?」

「皆に…会えて…笑いあつて…居場所が出来て…嬉しかつた…。」

黒鳥の田からは大量の涙が溢れた。

「…今まで…わしと一緒に…居てくれて…ありがと…。」

「?…黒鳥…。」

「…あり…が…と…。」

黒鳥の声はどんどん、小さくなつて行つた。

「おー! 黒鳥! 死ぬな! ! !」

黒は走つた。

「黒…。」

黒鳥は小さい声で黒を呼んだ。

「…化け物は…永遠に…死なない…。」

「えつ?…。」

「今が…終えても…また次の世界…で…この記憶を取り戻すよ?…。」

「…もういいから喋るな! ! !」

「…黒…また…会おうね…。」

「おー! 死ぬな! ! !」

「…化け物は…呪マークには…勝てない…。」

黒鳥はそのまま、静かに目をつぶつた。

「…? 黒鳥! おー…黒鳥…黒…黒鳥…! ! !

黒夜様…わしは、あなたの望んだ…化け物に慣れたでしょうか?…。

「…わしと会うのは、また今度だぞ、おぬし等。」

一人の少女は闇の影へと消えた。

58話　また…10年後（前書き）

第一章終了…！

黒鳥が死んで、一週間。

みんな、とても冷たい空気の中をさ迷っていた。

劉禰と乃亜は突然二人同時に姿を消した。
誰も行方を知れなかつた。

緋那と蒼弥が劉禰と乃亜を探しに行つたが…。

その一人もまた行方不明になつた。

それから、皆居なくなつた。

最後に残つたのは…俺と雨眞魏だけだつた。

雨眞魏は、ないていた。

とても…ただ…俺はそれを抱きしめる事しか出来なくて。

「う…梓…寂しい…怖い…皆居ない。」

「…分かつてる。俺が居る。」

「梓…。」

「雨眞魏…俺が居る。一生お前の隣に居るから…。」

雨眞魏は安心して、眠つた。

それが、俺と雨眞魏の日課だつた。

だけど…ある日。

「梓…」
ボタンツ

梓は、とてもなく、強い魔力の持つた妖怪に殺された。

「怖い！…いない…誰も…居ない。」

雨眞魏は、一人の孤独に耐えられなくなり、狂い始めた。

「…いない！…誰も居ない…皆ど二!?…。」

「雨眞魏…。」

「黒！白！…？！」

雨眞魏は呼んだ声の方を振り返ると、血だらけで死んでいる白と黒。

他にも劉禰、乃弒、蒼弥、緋那…梓。

「いや！…怖い！…いやーいやーイヤアアアアアアアアアア…！」

ドンッ！

「痛ッ…。」

「あつ…ごめん、大丈夫？」

「あつ…うん。」

一人の少女が綺麗な少女にぶつかった。

「名前は？」

「緋鬼瘤兩眞魏。よろしくね」一一口ッ

「私は、嘉応劉禪。よろしく兩眞魏」一一口ッ

58話　また…10年後（後書き）

次回から、第一章開始ー！

59話 訪れた人（前書き）

第二章開始ー。

小説、更新遅れると 思います。
すみません><！

59話 訪れた人

「あつ劉襯! おはようなの!」
「あつ、乃亜。おはよー!」
「誰? ? 。」

「乃亜は鈴月乃亜。よろしくなの!」
「私は、緋鬼瘤雨眞魏。よろしくね」
雨眞魏は優しく微笑んだ。

「おはよーーー嘘!」
「こらー白ーこらぬぞー!」
「あつ、黒。白。おはよー!」
「ドクンシ!」
「ー? ...。」

分からぬ...懐かしいのに...。

「蒼弥ーーさつと歩きなさい!」
「そんな事言われてもな...。」
蒼弥と緋那が階段を上っていく。

誰? ? 。

「ー? ...。」

雨眞魏は誰かに田をふさがれた。

「えつー? ...誰! ?」
「お前等、早く教室入れ!」
誰かが皆を指示していた。

「はいはい。」

「…？」

雨眞魏から手が離れた。

「お前も、早く教室に入れよ」二口ツ

「…？…。」

「…？…。」

「歪みの時間。訪れた人達かあ…。」

一人の少年がつぶやいていた。

「…あの子の、心は砕けたまま。」

「…。」

雨眞魏は少し落ち着いてきた。

私は…誰も知らない。

タツタツ

一人の少年が廊下を歩いてくる。

「？？…。」

少年は雨眞魏に向かつて歩いてくる。

「久しぶりだね。雨眞魏」二口ツ

「えつ？…。」

少年は雨眞魏の田の前に立つ。

「誰？…。」

「僕の事、覚えてない？」

「…えつと…。」

雨眞魏は考え出した。

「…八城。」

「えつ？…。」

「僕の、名前は八城。思い出した？雨眞魏」二コッ

「…えつ？…。」

ズキッ！

「…？…いつ…。」

雨眞魏は突然、頭に激痛が走った。

【八城！】二コッ

【八城！遊ぼう！】

【また明日ね、八城】二コッ

ドクンッ！

「？！…八城…。」

「思い出した？雨眞魏」二コッ

「八城…。」

「久しぶりだね。雨眞魏」二コッ

「八城…八城！…。」

バタンッ！

雨眞魏はそのまま、気を失ってしまった。

私は…何かを忘れているのかな？…。

60話 十字架を背負つ少女（前書き）

すみません。
久々更新です。

60話 十字架を背負つ少女

タツ

「…早く会いたいな…雨眞魏様。」

「…?」

「どうかしたの?蒼弥?」

「いや…なんでもない。」

「つて…雨眞魏とあの男は誰なのかしらね?」

「知らない…。」

蒼弥と絆那は雨眞魏と八城を見ていた。

「雨眞魏、遊びに行こう」ニコッ

「うん。」ニコッ

雨眞魏と八城はとても仲がよかつた。

「本当に…覚えてないのね。」

「当たり前だ。雨眞魏だけしか前世の記憶が戻っていない。」

「どうしてなの?」

「一重人格のせいで、記憶のずれが生じているのかもしれないな。」

「そんな事つてあるの?」

絆那は蒼弥に顔を近づける。

「まあ…今はあの二人をなんとかしないとな。」

「えつ?…。」

絆那は蒼弥の差す方向を見た。

「!…。」

梓と白が落ち込み状態になっていた。

「ブツ…アハハハハハハハハハツ!…!…!

絆那は大爆笑した。

「絆那。笑い事じや、ないって。」

劉禰が言う。

「そうなの！これでも結構大変なの！」

「アハハハハハツ！だつて…アハ！だつて…ブツ…アハハハハハハ

ハハハツ！！！」

緋那の笑いは止まらなかつた。

「はあ…劉禰、乃亜。こいつはほつといでいいだろう。」

「うん。」

「分かつたの！」

三人は梓と白を見た。

「…はあ…。」

「…雨眞魏…。」

二人は絶望と鬱状態だつた。

「貴様は誰だ！」

廊下から、誰かの大きな声が聞こえてきた。

「何？」

ガラツ！

そしたら、雨眞魏と八城の前に一人の十字架を背負つた少女が立つていた。

「誰？…。」

梓が立つて、廊下に出る。

パシッ！

「えつ？？…誰？」

「…。」

梓が雨眞魏の手をつかんだ。

「僕、なんか悪者みたいだよね？」

「…はは…。」

雨眞魏は少し笑つた。

「雨眞魏？」

「ハハハハハハハハッ！お前ら何をしていろ？」「

「瞬彗！」

「ん？…梓か。」

「お前…前世の記憶が…。」

「覚えている…ちゃんとな。雨眞魏の分まで、全て。」

瞬彗はとても悲しい顔をした。

「雨眞魏様！お久しぶりです！」

十字架を背負つた少女が瞬彗に抱きついてくる。

「なつ？！…。」

「！？…。」

バタンッ！

二人は倒れる。

「痛…なんだ？お前？」

「雨眞魏様！お久しぶりです。随分、りりしいお姿になられました

！」

「はあ！？…。」

瞬彗は頬を真っ赤に染める。

「どうかされましたか？雨眞魏様」一ノ口ッ

「！？…いいからどけ！」

「あつ…はい！」

少女立ち上がる。

「で、誰なんだ？」ボソッ

梓は瞬彗の耳元で囁く。

「俺が知るわけないだろ？」「ボソッ
「はあ？！」

ムカツ

「おい！貴様！」「

少女は梓の目の前に来る。

「…？…。」「

「貴様、雨眞魏様にそんな口を叩くなど、じつこいつもりだー。」

少女の目つきが変わった。

「…怒りの色…。」

「何を言つてゐる、梓？」

「別に…。」

梓は少女を無視して、ビルかに行ひります。

「おい！まで！貴様！」

「貴様じやないけど、梓。」

「…？…私は、ロザ。」

「…そつか。覚えておく。じゃあな。ロザ。」

「なつ？…。」

ロザは少し頬を赤めた。

ズキッ

「…？…。」

瞬彗は少し暗い顔をした。

なんだ？…」のモヤモヤとしたよつなムカムカしたよつな気持ちほ
なんだ？？…。

6-1話 呪いの記憶

ボツー。

「……。」

ここ数ヶ月、なぜかずっと瞬彗の人格のまま居る。

「……。」

それと、なぜか瞬彗はとてもボーッとしている。

「雨眞魏？」

「八城か……。」

「どうかしたの？」

「別に。」

瞬彗はちょっと寂しい顔をした。

「梓！」

「ん？ 口ザ。どうした？」

「！？……。」

口ザは梓に声をかけていた。

「梓、一緒にご飯食べない？」

「俺は、別にいいけど？」

「ヤツター！ ジやあ、雨眞魏様も！」一緒に？

ズキッ！

「……俺は……遠慮しておく。一人で……食べる……。」

「あつ……瞬彗！」

瞬彗はその場から去った。

何で……こんな気持ちになるんだ？……。

「！？。」

瞬彗は突然、口を手で塞いだ。

「…ゲホッ！ゲホッ！ゲホッ！」

思い出したくない。

【梓！いや…怖い！一人にしないで！】

もう…あんな思いは…したくない。

「…梓…。」

バタンツ

瞬彗はそのまま倒れてしまった。

タツ

瞬彗が倒れている目の前に、知らない一人の双子が現れた。

「ならさ…消しちゃえば？」

「その思いも、記憶も何もかも。」

「…消しちゃえば？」

瞬彗の倒れている周りに薔薇の紋様が広がった。

「！？」

瞬彗は一瞬にして、目を覚ました。

「！？…ガハッ！」

瞬彗は口から血を吐いた。

「僕達は、君を連れ戻しに来たんだよ？」

「志木様、人格から出てきなよ？」

「…ハア…それは…無理な話だ！」

「志木様の能力…それは。」

「…言つな…！！！！！」

瞬彗は大声で叫んだ。

タツ！

「瞬彗！」

梓達が瞬彗のいる、所に来た。

「仲間？なら、もう一回同じ記憶を見る？」

「！？…やめる…。」

瞬彗は紋様の中に入つてゐるため、体が思うように動かない。

「志木様が”戻る”と言つてくれたら、やめる。」

「！？…。」

もう見たくない…見たく…ない…。

タツ

一人の男が瞬彗の後ろに立つて居た。

「瞬彗！」

「雨眞魏様に触るな！！！！！！！」

ロザが十字架を武器に振る。

「……。」

男が手を叩く。

「！？…。」

「な…！？」

ロザは血だらけになつて、そのまま瞬彗の田の前で倒れてしまつた。

「！？…血…血。」

「……。」ボソッ

「！？…。」

男が瞬彗の耳元でつぶやいた。

「戻つてやる…。」

「！？…瞬彗？」

「志木！ 戻っちゃ駄目だよ！」

「…………。」

瞬彗の様子がおかしかった。

志木?

白か心醜そに見

双子は瞬髪の隙に行つた

「！？
闇の色。」

「梓がつぶやいた。

瞬髪の体から闇の力で六が力量は出でいた

「！？瞬彗！」

62話 消えるもう一人の自分

瞬慧から、とても闇のオリラが大量に漂っていた。

魔力が：志ア魔力を止め

「え？ ? ! ... 」

瞬彗は少しだけ言葉を話せた。

「！お前俺に何をした？上

「呪文を唱えた。」

二十九

男は叫んで、又一が叫んでいた

「志木！」

瞬髪に血をはした

「ねえ、この女の秘密教えてあげようか？」

え？

而此變的傳子孫也。但力士教之。並非其本意。

卷之三

瞬彗は大声で叫んだ。

魔力が強すぎて、近づきたくとも近づく事が出来ない。
雨眞魏と瞬彗の魔力は他の人より強い。

「志木！」

「白助け。」

バタンッ

瞬彗は気を失つて倒れてしまった。

「志木！」

「瞬彗はさ、雨眞魏の体で何人者、数え切れないほどの殺人を犯したんだよ？」

「！？…」

「瞬彗の引く血は何か知ってる？」

「はあ？…そんなの、雨眞魏と一緒に…。」

劉禰が言うが、双子はあきれた顔で顔を横に振る。

「瞬彗の引く血は、人殺しの血と人間の濃い血を引いてるよ？」

「！？…人間！」

グサツ！

「志木！」

瞬彗は刃を双子の一人に刺した。

「！？…」

「志木！志木！」

「君も成長しないね。もう君は負けたんだよ？生き残ったのが…。ボソッ

「！？…思い出させたら…見たくないんだ…ゲホッ…。」

瞬彗は双子のもう一人に背中を刺された。

「ヴェンパイアの血なら…すぐ治るのにね。」

「…。」

俺は何もかも、要らなかつた。

ただ、俺の存在理由を知りたかつた。

俺を”人殺し！”と呼んだ奴から殺して行つた。

初は殺すのが気持ちよかつた。

だけど……だんだん、楽しくなくなつた。

大切な人が出来て……死んで。

俺の人生駄目だな……。

「邪魔だ！」

上から誰かの声がした。

力キンツ！

「！？……」

双子に攻撃してくる、一人の少女。

そして、魔力は少しづつ消えて行つた。

「志木！」

「瞬彗！」

皆瞬彗の所に駆け寄つた。

「志木！」

「……白……俺は……。」

「志木！」

「……ごめん……白……。」

「志木……僕を一人にしないでよー！」

”人殺し！”……あの頃からもう俺はいなかつたのだな……。

「……今……永遠に……生きていられるなら……お前たちと……友に生きてい

たい……。」

「志木！」

「……白……サヨナ……。」

瞬彗の人格はそのまま消えてしまった。

「一旦退くぞ！」

一人の双子と戦つてた、少女が大声で言つた。

「チッ…お前ら聞いているのか！？さつさとしろ！お前等も殺すぞ
！！！」

「！？…」

一人の少女がとても大声でとんでもないことを言つ。

63話 黒い鳥

「チツ、乱入者？？むかつくなあ～」

「…白！最大魔力で瞬間移動する！出来るか？」

「あつ…任せてよ！」

白が目をつぶる。

「…クツ…。」

白の周り電気が走る。

「…飛ぶ！」

「あつ…。」

「！？…。」

一瞬にして、皆消えてしまった。

ドンッ！！

皆が地面に落ちる。

「…。」

バタンッ

白が倒れた。

「白！大丈夫か？」

「ணணண…。」

白はゆっくり眠っていた。

「雨眞魏…。」

梓は不安な顔をした。

「それより、お前誰…！」

「そうなの！あなたは…誰なの？」

乃亜と劉禰が言つ。

「…もう忘れたか？雨眞魏はともかく、わしの」とを忘れるとは、

ひどい奴等だな。」

少女はかぶっていた、フードを脱ぐ。

「？！。」

「黒鳥！！！」

「前世ぶりだなー！」

皆学園のロビーで休んでいた。

「…やはつ、」には変わらんな。」

「そうだな。」

「全員、へとへとのようだな。」

「しかし、黒鳥。お前何をしていた？」

蒼弥が黒鳥に聞く。

「わしは、少し調べ事をしていた。」

「何の調べ物なのかしら？」

「二重人格。」

「？？」

皆ぽかんとした顔をした。

「おかしいと思わんのか？」

「何が？」

「世界には、二重人格なんていうもの存在しない。」

雨眞魏と瞬彗は特別だという事だ。

だがもう、瞬彗と言う存在も居なくなつたがな。」

「！？。」

「それって…。」

「瞬彗は死んだって事だ。」

「！？。」

「雨眞魏…。」

梓は不安な顔だった。

「う…う…。」

雨眞魏はうなつていた。

「雨眞魏？」

『皆？… どー？…。』

雨眞魏…。

『瞬彗！…。』

ごめん… 守れなくて… ごめん。

『！？…。』

瞬彗の顔が崩れ始める。

『いや！… 惡い！』

雨眞魏が座り込んで、顔を伏せる。

『梓！… 助け… て… 梓…。』

【梓！… 私を一人にしないで…。】

『？！… 私？…』

【（ごめんな）… 雨眞魏… 守れなくて…。】

『！？…。』

雨眞魏の目から涙が一粒一粒溢れて行った。

『皆… いなくなつちやうの？… 梓… 皆…。』

居なくなる。お前のせいだ。

『！？…。』

「イヤアアアアアアアア…！…！」

「雨眞魏？」

「イヤアアアアア…！…皆居ない！…怖い！… 人はいや…！」

「雨眞魏！」

「！？…梓…。」

雨眞魏の目には大粒の涙が溢れていた。

「梓…分から…思…思い出せ…。」

「何…が…だ…。」

「夢…を見…た…誰…か…が…居…なくな…つ…た…夢…。」

誰かを失つた…怖い…。

「大丈夫だ。俺が居る。俺が守つてやるから。」

「梓…私…一人…に…し…ない…で…。」

梓は雨眞魏の手を優しく握つた。

「…記憶を戻つてきて…いる…か…。」ボソッ

梓と雨眞魏…記憶を取り戻すほど、雨眞魏は狂い歪な関係へ行く…。

64話 自分 前編

皆が笑うから、私も笑う。

私に意思なんていらない。

ただ、皆に笑つてほしいから。

私が自分の気持ちを伝えるなんて駄目。

自分自身が耐えればいい。

私の、迷惑な意思なんて伝えなくてもいい。

前世、皆で騒いだ夏。

夏の始まり。

「……。」

雨眞魏は座つていた。

ただ呆然と椅子に。

「暑い……。」

「クーラーないのかよ、この学園。」

「ない！」

黒は大声で叫ぶが梓はキッパリ応える。

白は団扇で自分を扇いでいた。

「夏つてどうして、こうも暑いのかしらね？」

「ん？…！？」

蒼弥は顔を赤めた。

「何よ？」

「なんだ、その格好？」

梓が緋那に聞く。

「学園のプールで泳ぐのがなって、思つただけよ。」

「じゃあ、僕も行く！」

「白が行くなら、俺も行く！」

「しゃーない。今日は全員でプール開きだ！」

皆学園の屋上に向かった。

雨眞魏が椅子から動こうとしなかつた。

「雨眞魏、どうしたんだろ？」

「わしが見とくから、お前等は行つていいぞ。」

「分かつた。」

黒鳥が雨眞魏の田の前にある椅子に座る。

「…雨眞魏。」

「…怖い…。」ボソッ

雨眞魏はつぶやいた。

「自分の意思を伝えないと自分自身の気持ちなんて、絶対伝わらないぞ？」

「…。」

「意思を心の底に引っ込めて、自分はただ笑つてるだけでいいと思つていいのか？」

「…。」

「雨眞魏のやつている事はただ、他人から逃げているしかわたしには思えんな。

他人を遠ざけて、自分は関係ない。ただ他人を傷付けたくないと思つてているだけだ！」

ただ、お前は誰かに構つてほしいだけなんだとわしは思つけどな。

「

「…?…。」「

パシツ！

雨眞魏は黒鳥の頬を叩く。

「?…。」「

「何が分かるのよー私は、自分の意思を閉じ込めてるーだから何よー。私の迷惑な意思を皆に伝えなくとも、私は、皆に笑ってほしいだからー！」

「それが逃げていろつて言つていろー他人から逃げ、自分からも逃げる！

そんなに逃げて楽しいか？他人の顔をよく見たことがあるのか！」「！？…黒鳥は何も知らないからでしょー！何で、そんなに言われないといけないの！」

雨眞魏と黒鳥は廊下に響く声で言い合つ。

「お前は、他人の顔色も心も気持ちを何も分かつていない！」「

「？！…何よ…それ…私がただ、自分一人が勝手にやつてるとでも言つの！」「

「やうだーお前は自分自身で勝手にやつていろー皆笑つていろよーうでな…

何かを考えているんだぞーなのに、お前はその気持ちを踏みにじるのか！」「…?…。」「

「皆、お前を心配していた。なぜ分からぬーなぜだー！」

これ以上、雨眞魏を狂わせたら…未来と一緒になる。

「…黒鳥に何が分かるのよー私には梓が居ればいいー梓だけが居れば私はそれでいいの！」「

「！？…やつぱり分かつてない…仲間つて言つてたのも嘘だつたんだな！

梓だけがいればいい？ふざけるなよー仲間つて友達つて言つてた

奴の事も…。」

「あいつら、仲間でも友達でもない。私には梓が居ればいい。」

「…?…。」

雨眞魏の田つきが変わった。

「私の意志なんて伝えない。」

「なら、もうお前を殺すしか未来は救えない…」

黒鳥は武器を構える。

「私は一生梓と共にに行く!」

雨眞魏の刀を構える。

カキンッ!

「何か聞こえなかつた?」

「そつか??空耳じやねえーの?」

「そつかもしれないね」二口シ

白は空を眺めていた。

『白…』

『志木…。』

『雨眞魏を助けてくれ!白ー!』

「?…志木!…?」

65話 自分 中編

「志木？」

『白、すまんが体を借りる。』

「えつ？！..」

瞬彗（？）が白の中に入った。

「チツ…あいつら…」

「！？…白？」

黒が不思議な顔をして、走つて行つた白を見ていた。

「お前はあいつらの気持ちを踏みにじつた！わしは許さない！」

「知らない！私は、梓さえ居ればいい！梓が居れば、何も要らない！」

「！」

シユツ！バシツ！

雨眞魏と黒鳥は酷くボロボロになつていた。

「じゃあ、なぜお前は一人になるのがいやなんだ！」

「私はそんな事言つてない！」

「！？…」

やはり…前世の記憶がまた戻つていなか…。

「「ラアー！お前等！」

「えつ？！」

「？！..」

「瞬彗か？」

白が大声を上げて言つた。

「誰もいないところで争うな！」

「白？！」

「瞬彗か？」

「ハツ！黒鳥はいい。」

白は雨眞魏の目の前に来た。

パシッ！

「！？…。」

「瞬彗！？」

黒鳥は焦つた顔をする。

瞬彗が雨眞魏の頬を叩いた。

「いい加減にしろ！何でもかんでも、梓、梓、梓！ふざけるな！
お前には仲間も居て、友達もいるだろ？！
梓だけがお前の全てか！」

「！？…。」

「何でもかんでも！いい加減な事を言つてないで、
みんな居るんだ！お前を支えてくれる奴等が！
皆いるんだ、お前と一緒にいてくれる奴が！
何で、気づかないんだ！」

「！？…。」

ポタンッ

白（瞬彗）の手に一粒涙のような物が落ちてきた。

「う…怖い…。」

「えつ？」

「怖い…一人になるのが…。」

「雨眞魏？」

雨眞魏は座り込む。

「…時々…とても恐ろしい夢を見るの…。」

「なんの？…。」

「瞬彗！私、怖い…その夢を思い出すのがとても怖い…。」

「雨眞魏…。」

雨眞魏の田には涙が溢れていた。

「怖い…怖いよ…瞬慧…。」

「分かつてる。俺が居る。」

「怖い…。」

「グサツ…！」

「！？…。」

「ポタンッ

「！？…。」

「バタンッ！

「雨…。」

「あれれ？空あくすぐ壊れた。」

「縁、狂つてるんだから、すぐ壊れるつて。」

「…。」

「雨眞魏…！…！…！…！…。」

「貴様ら…！…！…。」

「黒鳥…！」

黒鳥はこのまえの双子と一人の男に襲い掛かる。

「雨眞魏…！…。」

雨眞魏は背中から刺された。

倒れても血が大量に出ていた。

「雨眞魏！起きろ！なぜだ、なぜ傷がすぐに治らない！」

誰かが叫んでる…泣いてるのかな？…。

「雨眞魏……起きる……。」

「……。」

「?!……。」

「……。」

「グサツ……。」

「瞬彗!」

「君も邪魔……。」

「グサツ!」

「ガハツ……。」

「バタンッ!」

「ん?……血の匂い?……。」

「梓?……どうかしたか?」

「いや……何でも無い!……氣のせいかも。」

「雨眞魏……。」

「……。」

「……やつと、見つけた。僕の手がかり。」

「……手がかり?……。」

瞬彗はそのまま田を閉じてしまった。

66話 自分 後編

私は優しくしてくれる梓が必要だつた…。

「瞬彗ー黒鳥ー」

私は…。

「大丈夫か?」

私は…。

「あず…せ…雨…眞魏…が…。」

「白!」

私は…。

『梓…怖い…皆?…!…いや…血…!…』

「チツ…。」

「黒鳥、立つなよ。」

「わしは…大丈夫だ。」

黒鳥から血がポタッポタッ落ちる。

「大丈夫じゃ、ねえーだろう?」

「わしは…あいつに伝えなればならんのだ!…」
「なら、大人しくしてください。」

「!…。」

「深紅!…?」

皆の目の前には深紅と深香が立っていた。

「兄様。お久しぶりです。」

「おう。」

「で、伝える事とはなんですか？」

「…別に…お前…。」

バタンツ

黒鳥は倒れた。

「早く、医務室に連れて行つてください。」

「了解。」

白と黒鳥は医務室に運ばれた。

タツ

「梓…。」

「えつ？…？！」

梓の目の前には黒い着物を羽織った少女が居た。

「誰？…。」

「俺だ。瞬彗だ！これが俺の本当の姿だ。」

「…そうか。」

「奴等は、雨眞魏が手かがりと言つていた。」

「手かがり？」

「そうだ。俺にはさつぱりだが。」

「…。」

梓は考え込む。

『梓！怖い！怖い！1人は怖い！…皆…』

パチツ

「……。」

雨眞魏が田を覚ます。

「梓。」

ジャキッ

雨眞魏に剣を向ける一人の男。

「貴様、あまり調子にのるなよ！」

「誰？」

「！？俺は富だ！」

「私、殺されるの？」

「貴様はこれから、葬様に従うだけだ！」

「分かつた。」

雨眞魏は静かに黙り込む。

「お前、変な奴だな。」

「もう一人なら、死んでもいいよ。」

「なぜだ？」

「分からぬ。ただ。周囲にいる人が死んだ夢しか見ないの！」

ポタンッ

「！？」

雨眞魏は涙を流す。

「悪かつたよ。泣くな。」

「？？？ありがとう。」

富がハンカチを渡して、雨眞魏は涙を拭ぐ。

「俺も。」

「ん？」

「俺も。昔そんな夢しか見なかつた。」

「うなんだ。」

雨眞魏は少し悲しい顔をした。

「雨眞魏ー」

「梓…。」ボソッ

届かない一人…すれ違ってしまう。

67話 すれ違い1

「黒！雨眞魏の居る場所、分かるか？」

「分かるが、結構遠いぞ？」

「それでも、急がないと…。」

「…。」

雨眞魏はベッドで寝かされていた。

「知つているか？」

「…何を？」

「これは、お前の、^{さだめ}運命だと。」

「…知つてるよ。」

雨眞魏の上には、人間の血が大量に入つたバケツが合つた。

「人間を血を飲めば、飲むほど、私はもう…。」

「…悪い…。」

「富が謝る事じやないよ…。」

「…雨眞魏。」

富はそつとレバーを引いた。

そして、バケツは雨眞魏の体一面に浴びせられた。

ドクンッ！

「？！…。」

「…。」

富は部屋から出て行つた。

富は部屋に、鎖と鍵を閉めた。

もう一出生でこれないよう。

「あー！ガハッ！…。」

雨眞魏は苦しみながら呟んでいた。

「雨眞魏…悪い。これも命令なんだ。」

富はそのまま部屋から去つて行つた。

「せひやとしる……！」

「分かつてゐつての！梓急ぎすぎ！」

「これを手配するのに、時間がかりすぎだらう……。」

「しょうがなーのーこれは学園になかったのーー。」

「はいはー。」

梓達はバイクに乗つて、雨眞魏がいる所に向かつていった。

「雨眞魏……！」

ギシッ

血だらけのベッドで雨眞魏は座る。

「あ……けて……。」

雨眞魏はフラフラになりながら、歩く。
そして、雨眞魏はドアの目の前に行く。
シコツ！グサツグサツ！—

「……。」

バタンツ！

雨眞魏は後ろから、何本物刀に刺されてそのまま倒れた。

「チツ、先に行くぞ！」

「あつ待て！瞬彗！」

梓は狼の姿になる。

「あつおーー俺は運転できねえーぞ！」

「すまん、勝手に操縦してくれ！」

「おい！梓…。」

黒は文句を言つが、運転を始める。

「乗れ！…！」

「まったく、横暴な奴だな。」

瞬彗は梓の背中に乗る。

「あつちよつ！梓…！」

緋那が止めようとするが、先に行ってしまった。

「はあ…。」

「雨眞魏…！…！」

そして、一つのお城を見つけた。

「梓、どうする？」

「窓から入るか。」

「そうだな。」

そして、梓は羽を出して、飛ぶ。

「突つ込むぞ！」

「おう！」

梓は一つの部屋の窓に突つ込んだ。

パリンッ！

「！？…。」

「なつ…。」

入った部屋は、血だらけの部屋だった。

そして…。

「…？…。」

「雨…雨眞魏！…！」

梓と瞬彗の田の前には、血だらけの雨眞魏の姿が合つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9389v/>

化け物学園帝国

2011年11月20日03時55分発行